40th

SYAA
ANNIVERSARY

行くよ、未来。

公益財団法人
さっぽろ青少年女性活動協会

40年のあゆみ

── まちのこどう ──

街のなかのどこかに
ぼんやりしているこどもがいたら
そっと笑顔を届けたい

暮れてゆく街のなかを
さすらっている若者がいたら
握り合う手を差しのべたい

日々のくらしのなかで
むなしさを感じているお母さんがいたら
おしゃべりの声を聞かせたい

この街のなかで生きてゆこうとする人々に
どうぞお伝えください　私たちのことを

目次
CONTENTS

ご挨拶　理事長 野崎 清史 …… 02

お祝いのことば　札幌市長 秋元 克広 …… 03

40年のあゆみ【episode1 設立時の想い】…… 04・05

SYAA HISTORY

1980年～1990年 …… 06・07
1991年～2000年 …… 08・09
2001年～2010年 …… 10・11
2011年～2019年 …… 12～29

40年のあゆみ【episode2 地域のために、人のために】30・31

部門について ～ 設立40周年記念座談会 ～

こども育成課 …… 32～37
こども事業課 …… 38～43
こども劇場課 …… 44～49
若者支援事業課 …… 50～55
野外活動課 …… 56～61
市民参画課 …… 62～67
企画事業課 …… 68～73
総務課 …… 74～77

40年のあゆみ【episode3 新しい未来に向かって】…… 78・79

財団概要

活動協会について …… 80
管理運営施設一覧 …… 81～84
基金 …… 85

編集後記

ご挨拶 さっぽろ青少年女性活動協会40周年にあたって

理事長　野　崎　清　史

1980年4月、15人の職員により札幌の地に誕生した活動協会は、現在では、市内の全児童会館をはじめ210を超える市有施設や創立時から続く滝野自然学園の管理運営に加え、雪まつり大雪像制作やイベント事業などさっぽろ観光の一翼も担う職員2000人超を有する法人に成長を遂げた。

これもひとえに、「人とのつながりを通じて魅力あふれる未来社会の創造」を理念とする当協会の使命に共感した職員の不断の努力と札幌市役所をはじめとする関係者のご支援・ご協力の賜物であり深く感謝申し上げます。

創立30年までの歩みは既に発刊されている周年誌に譲り、最近10年間を振り返り特筆されることは、2013年の公益法人化移行後の事業エリア拡大と協会内外と連携した児童・若者・ジェンダーに関する新たな取組がある。

当協会では、従前から震災被災地支援や人形劇指導など市外へのアウトリーチ活動を展開していたが、公益法人化を契機に、札幌でのノウハウを活かし「江別・岩見沢若者サポートステーション」での若者自立支援や「北海道女性起業家支援ネットワーク事業」を国から受託するなど市域を超えた取り組みを進め、2021年4月から開始する千歳市児童館事業受託もその一連と言える。

また、生活困窮家庭の中学生に対する「札幌まなびのサポート事業」や困難な状況にある子どもにアプローチする「子どものくらし支援コーディネート事業」などを札幌市から受託するとともに、様々な課題を抱える若者、女性、LGBT相談・支援、さらに新たに設立したこども若者応援基金を活用した「子ども・若者の居場所いとこんち」などの事業もスタートさせた。

これまで当協会は、国の制度変更や状況変化に対して人員や事業の拡大を図りながら対処してきたが、これからは、ウィズコロナからアフターコロナ社会を見据え、コロナ禍で希薄化した直接的な人と人のつながりの再構築やオンラインのさらなる活用など事業内容の見直しにあわせ、協会事業の根幹にも大きな影響のある少子化にも的確に対応していく必要がある。

奇しくも協会創立50周年の2030年は「誰一人置き去りにしない」世界を目指すSDGsのゴール年にあたるが、これから10年、我々もこの精神を踏まえ時代の変化に柔軟に対応した組織業務運営に努め、魅力あふれる未来社会の創造に向けて「さっぽろ」の人づくり、街づくりの活動に取り組んでまいります。これからも、引き続き皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

お祝いのことば

札幌市長　秋　元　克　広

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会の設立40周年を心からお祝い申し上げますとともに、このたびここに40年間の歩みを綴った記念史が発刊されますことをお慶び申し上げます。

貴財団におかれましては、グループ活動の指導者の養成や、キャンプ活動・レクリエーション活動のプログラムの企画・指導等を通して、多くのグループワークの専門家の育成、また青少年の健全育成と青少年女性の社会参加の促進に多大な功績を残されてきております。さらに、青少年女性に関係する多くの市有施設の管理運営を担われ、その運営能力をいかんなく発揮されておりますことに、敬意を表しますとともに深く感謝申し上げます。

札幌市におきましては、少子化の急速な進行、女性の就業率の高まりなどにより、青少年女性を取り巻く環境は大きく変化しております。加えて、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による影響から、今後、青少年女性の様々な問題・課題が表面化してくることも予想されます。

このような時代だからこそ、貴財団が長らく取り組んでこられている体験活動の場の提供、地域に根づいた世代間交流の場づくり、次世代リーダーの育成など、人と人とが互いに手を携え、心豊かにつながるための取組が、より一層重要になってくると思われます。

札幌市といたしましても、皆様とご一緒に、誰もが安心して暮らせるまちづくり、全ての青少年が健やかに育ち学ぶことができるまちづくりに努めてまいりますので、引き続き本市事業にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、今後とも、札幌市の青少年女性のために意欲的な活動を展開され、地域社会の発展及び向上と、市民の豊かな生活の実現に寄与されることをご期待申し上げますとともに、貴財団のますますのご発展と職員皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げ、お祝いのことばといたします。

40年のあゆみ

episode 1

設立時の想い

1972(昭和47)年、
冬季オリンピックの開催で急速に近代化した札幌市。
都市の充実化が図られ、住みよい街になっていく一方、
「核家族化」が進み、青少年の非行や自殺者の増加といった
社会的な課題も目立つようになっていました。

青少年は、「札幌という街の未来を創る担い手」です。
その担い手をどうしたら健全に育成できるのでしょうか。

活動協会の前身、札幌ユース・ワーカー協会のメンバーは、
グループワークこそが最も有効な手段であることを知っていました。
なかでも自然の中で共同生活を送るキャンプやレクリエーションは、
リーダーシップの育成に最も効果的なプログラムだと信じて疑わず、
その動きをどんどんと活発化させていったのです。

子ども会のシニアやジュニアリーダーの研修、
青年サークルや婦人サークルのリーダー研修、
札幌市の野外活動指導員の研修など、
活動の輪は次第に大きく広がっていきました。

そんな最中、札幌市教育委員会から思わぬ提案が舞い込みました。
「皆さんに、札幌市の『滝野自然学園』の管理と運営をお願いしたい」。
それは、娯楽的な余暇活動に見られていたキャンプや
レクリエーションの存在価値を大きく変える転機となりました。

グループワークは、個人の主体性を確立し、創造性を養い、
連帯感を深め、明るく豊かな社会を作るための活動である。
信じて疑わなかった思いは協会の「理念」となりました。

そして、任意団体だった協会は社会的責任を明確化し、
専門指導者の確立と組織化、そして養成を図るため法人化の道へ。

1980(昭和55)年、
「財団法人 札幌市青少年婦人活動協会」として、
活動協会の歴史が幕を開けました。

SYAA HISTORY

1980（昭和55）年4月1日に札幌市の出資のもと設立され、
社会の価値観の多様化と時代の変遷に合わせながら、グループワーカーとして
人と人とのふれあいを通じてあたたかな社会を目指した私たちの軌跡

1980 昭和55年度

財団法人札幌市青少年婦人活動協会の設立

青少年の健全育成のため、グループ活動の指導で専門的な知識を有し、かつ実践的活動のできる専門指導者（グループワーカー）の確保を目的に法人を設立。また設立と同時に、札幌市教育委員会からの委託を受け、社会教育施設（青少年レクリエーションセンター・滝野自然学園）の運営と指導員派遣業務（勤労青少年ホーム・石山青少年会館）も担当することになった。

グループワーカー養成講座開講

「現代社会では豊かな人間性や社会性を育てていくことが重要な課題」と考え、その課題解決に取り組む手法としてグループワークを取り上げ、専門的な知識を持ち実践的な活動ができるグループワーカーの養成を目的に開講した。25歳までの青年を対象に、講義や宿泊研修、グループ演習などを通じて青年指導者の養成に取り組んだ。

1981 昭和56年度

札幌市婦人文化センター管理運営業務受託

女性のさらなる生活文化の向上や婦人活動の推進、福祉の増進を目的に札幌市が開設した施設の管理運営業務を受託。女性の自主的な活動の場の提供をはじめ、女性問題や幅広い男女共同参画の事業を展開した。また、開設当時では珍しかった女性学講座や就労婦人、子育て中の母親など、講座への直接参加が難しい方への婦人通信講座の開設にも積極的に取り組んだ。

札幌市天文台管理補助業務受託

札幌市天文台は、青少年および一般市民の天文科学への知識の啓発・普及と、天文学上の観測記録の収集を目的に設置された施設。協会ではこの目的を踏まえ、青少年をはじめ多くの市民が気軽に天文観測を楽しめる場を提供し、天体への興味と理解をより深く抱いていただくことを目指して運営を開始した。

1982 昭和57年度

札幌市青少年センター管理運営業務受託

1979年3月、札幌市青少年問題協議会の答申に「青少年センター」の必要性がうたわれたことを受け、旧札幌市婦人会館を改装し開設され、当財団が受託することになった。「青少年の自主的な活動の場の提供」を掲げ、大学生や高校生といった在学青少年も利用対象となり、より自由な利用方法ならびに活動が展開されることとなった。

じゃがいもキャンプ

じゃがいもの植え込みから収穫までおよそ半年間の栽培体験を通じて、郊外の豊かな自然や土に親しみながら家族の交流を深めることを趣旨として実施した。新聞を使った広報活動の影響が大きく、定員を大幅に上回る応募で多数の家族が抽選に漏れる状況となったため、急きょ日帰りコースを設定し、多くの市民に参加いただけるよう柔軟に対応した。

1983 昭和58年度

アウトドア・スクール －中学生キャンプ－

中学生を取り巻く環境が受験戦争などにより複雑化し、また小学生と比較するとキャンプなどの集団活動の機会が極めて少なくなる傾向が強まった時代。中学生に共同作業・共同生活を体験してもらい、個々の重要性を知るとともに、互いに協力し合うことの大切さや楽しさを実感してもらおうと実施した。

おもしろタウンラリー

札幌市内をめぐるオリエンテーリング事業として実施。方角と距離を示すガイドマップ、曲がる方向を示すアローマップを頼りに、街中に設置された問題を解きながら進んでいくルールとした。青少年センターの主催事業ながら家族単位での参加が非常に多く、普段何気なく見ている街角で意外な発見の機会を得られたといった高評価を得た。

1984 昭和59年度

遊習塾リトルキャンプ

小学校1年生から3年生が対象の事業。夏冬の年2回、集団の中で遊ぶ楽しさに触れながら、自ら課題を成し遂げたという達成感の体験を狙った。また、保護者にもそうした体験の大切さを知っていただき、自らも積極的に体験してもらうことも目的に実施した。開始以来、大勢の参加者と高い評価に支えられ、現在も継続している人気事業に成長した。

女性学講座

女性の学習、知識の向上を図るために、ティータイムサロンやワープロ講座など、多様な機会を実施した。とくに、毎年異なるテーマを取り上げ、様々な角度から女性の生き方や婦人問題について考える機会としたティータイムサロンは、講演に加えて質疑応答を行う気軽なサロン形式とし、参加者と共同で講座運営したことでも好評を得た。

1985 昭和60年度

ステージング・クリニック

音楽や演劇の活動を始めたばかりの中高校生を対象に、音響機器や照明の基礎的な操作、ギターやドラムの演奏方法を専門家からの指導により、各自の活動を活発化させることを目的に実施した。クリニック開講以降、夏と冬の年2回、学んだ成果を発揮する機会として、ライブコンサートも開催した。

婦人リーダー研修会

婦人団体やサークルのリーダー、およびグループ活動を望む方々に視野を広く持ってもらおうと企画した研修会。国内外の動向をいち早く生きた情報として提供するとともに、互いの情報交換の場としても活用してもらえるよう、内容を工夫しながら実施した。

1986 昭和61年度

児童会館受託開始

児童会館は、「児童の文化的素養を培い、その福祉を増進する」ことを目的に、児童の校外生活で異なる年齢集団での遊びを通じて、地域での児童間の交流をより一層深めることを目指す児童健全育成施設である。当協会のこれまでの青少年教育の専門的活動が認められたことにより、宮の森、太平児童会館の管理運営を委託された。

滝野すずらん丘陵公園スノーフェスティバル

公園緑地管理財団から受託し、フェスティバル初回からチャレンジゲームコーナーを担当している。雪を活用したゲームトレイルの企画運営に加え、かまくら造りや氷張りなど、冬季のアウトドアで可能な遊びを紹介。このフェスティバルは毎年、さっぽろ雪まつりと実施期間が重なるが、楽しそうに雪まみれになる大勢の家族の姿が見られるなど好評を得ている。

1987 昭和62年度

児童クラブ設置

昭和30年当初、民間有志や父母の相互協力によって学童保育が実施されていたが、昭和34年に市の単独事業として、小学校や地区会館に設置された民営の施設7か所に運営費を補助したのが児童会館の始まりである。50館になった児童会館の整備計画に伴って、同年に児童クラブが開設され、今日に至っている。

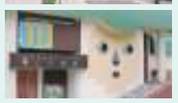
みどりと遊ぼう自然学園

グループ・ワーク協会から引き継いだ事業。毎年、多くの応募があり、各回100名が参加するほどの人気ぶり。模擬通貨「ミドル」を用いてキャンプ期間中の村生活を営むほか、裏山散策やキャンプファイヤー、滝野町内会の協力を得て数軒のお宅を訪問した食材調達ウォークラリーなど、様々な冒険要素を盛り込んだキャンプ事業を実施した。

1988 昭和63年度

「やまびこ座」「こぐま座」管理運営業務

こどもの劇場「やまびこ座」、こども人形劇場「こぐま座」の2施設は、子どものための人形劇や児童劇などの専門劇場で、全国的にも非常に珍しく貴重な施設である。また、鑑賞の場だけではなく、作品創造の場や演じ手の育成など、子ども文化の総合施設として運営している。



ソリリング大会

滝野すずらん丘陵公園を会場に、自作ダンボール製のソリすべり大会を開催した。室内にこもりがちになる冬季、誰もが簡単に製作でき気軽に参加できる競技会で、広く市民に親しまれる冬の風物詩的な事業にしたいと狙って企画したところ、家族や勤務先の同僚、地域の仲間ら子どもから大人まで幅広い参加者が集まり、歓声と笑いに包まれた盛況の事業となった。

1989 昭和64年～平成元年度

父と子のアドベンチャースクール

親子間のふれあいが希薄になっている当時の現状を背景に、父子の絆を深めようと、小学生以上の子どもと父親を対象に実施した。自然を探索しながら野草を採り非常食として調理する方法を学ぶなど、レクリエーション活動を通じて、親子の関係を深めるきっかけとなった。

やまびこ座夏まつり

「やまびこ座」のオープンを記念して、夏休みに実施されたお祭り。道内外の人形劇団のほか、海外からも人形劇関係者を招いて多彩な上演活動が繰り広げられた。また、やまびこ座前広場を利用した出店や盆踊りも企画され、地域の方や劇団と協働して実施するにぎやかなお祭り事業として現在も継続している。

1990 平成2年度

サンドアートコンテスト

石狩浜で開催した青少年センター主催の砂像制作コンテスト。初年度は道新スポーツと雪像作りの手腕を持つ「101人の会」の協力を受け、勤労青少年ホームの青年や札幌市民から参加者を募り、作品の完成度とユニークさ、話題性などを競い合った。雪像とは異なり、砂像は崩れると修復できないため、たびたびデザイン変更に迫られながら工夫を重ねて制作を進めた。

子ども会ジュニアリーダー・シニアリーダー養成研修会

地域の子ども会から選出された小学生リーダーを対象に、「ジュニアリーダー養成研修」とさらに上級の「シニアリーダー養成研修」を実施。市民局青少年婦人部からの委託を受け、生活指導面を担当した。リーダーとしての資質向上や知識・技術の習得を目指して、未来を担う子どもの活動を中心に、地域社会がより豊かになって行くことを願い実施した。

1991 平成3年度

事務局移転

「青少年の健全育成および青少年活動の促進を図ること」を目的に昭和57年2月に開設された青少年センターは、業務を受託した当協会が管理運営にあたっていたが、北海道警察の新庁舎建設に伴う施設解体で12月に閉館となった。センター内で運営していた当協会の事務局機能も、新施設(南9条西14丁目)に移転した。

あそびのフェスティバル

当協会と札幌銀行ドリーム基金が中心で組織した「あそびのフェスティバル実行委員会」が、遊びの広場を設けようと企画、実施したイベント。伝承遊びや集団遊び、工作、野外紙芝居など多様な遊びを揃えたほか、中島児童会館前の広場にステージを設置し、コマやけん玉、釘さし、お手玉など遊びの名人によるショーを開催、終日多くの親子連れでにぎわった。

1992 平成4年度

婦人文化センターから女性センターへ名称変更

成熟した特定世代の女性や既婚女性を指すといった固定的イメージがある「婦人」から、男性も含めた社会全体の問題であるため、「男性」の対語である「女性」がふさわしいといった理由から名称変更された。変更に伴い広報紙も名称・内容を一新し発行。時代とともに札幌の女性が力強く歩んで行きたいとの想いを込め、「S・W・ing」と名付けられた。

やまびこ座プロデュース公演「うぬぼれうさぎ」

こどもの劇場やまびこ座、共育舎、演劇制作体「鈴木喜三夫+芝居の仲間」の三者が協働し、演劇「森は生きている」を1989年にプロデュースしたのを契機に、1992年からはやまびこ座が単独で児童劇のプロデュース公演を開始した。その後も形を変えながら継続し、2008年度からは市民公募により結成した「東区市民劇団オニオン座」が現在も公演している。

1993 平成5年度

札幌市勤労青少年ホーム全館(6館)管理運営業務の受託

当協会は設立時より、ホーム各館に職員を派遣していたが、1993年度より全館(中央・円山・アカシア・ポプラ・豊平・発寒)の管理運営業務を受託した。当協会らしさを前面に出し、スポーツや講座など各館の特徴を活かした事業実施により、参加者同士の連帯感強化と青少年の健全育成を目指した運営に努めた。

第1回さっぽろふれあいフェスタ

「ふれあい都市さっぽろ」の実現を目指し、全世代でふれあいのある温かい地域社会を作ろうと、青年世代が中心となり、多世代を巻き込み市民が積極的に参加できるイベントを企画した。一般公募による青年世代を中心とした市民ボランティアスタッフが運営委員会を組織、半年以上の期間を費やして企画、準備、運営を行った。

1994 平成6年度

北海道初の人形浄瑠璃講習会

やまびこ座所蔵の浄瑠璃人形を用い、日本の伝統芸能である人形浄瑠璃を上演できる人材の育成と、北海道ではなじみの少ない古典芸能の魅力を子どもから大人まで幅広い市民に伝え、関心を高めてもらうことを目的に開講した。八王子車人形五代目家元西川古柳さんの協力を得て、古典芸能に触れる機会の少ない子どもたちや市民に豊かな体験の場を提供した。

児童会館 新館オープン

1986年の宮の森児童会館、太平児童会館に始まり、本年度の上篠路児童会館(現・百合が原児童会館)で管理運営委託は計30館となった。児童会館の新設にあたっては、1ヵ月ほど前から準備室を立ち上げ、各児童会館から近隣小中学校までの距離、通学経路などを調査するとともに、近隣施設への訪問を通じて地域に密着した児童会館づくりに取り組んだ。

1995 平成7年度

阪神淡路大震災支援バザー

1995年1月に発生した阪神淡路大震災に対応し、札幌市女性センターボランティアスクールの修了生が結集して「阪神淡路大震災支援バザー」を開催した。修了生同士や知人に協力を依頼し、家庭での不使用品や企業訪問による支援物資の収集に努めたところ、善意の輪は瞬く間に広がり、女性センター大ホールには物資が山と積み上がるほど集められた。

「復活ボンバー」誕生

円山西町児童会館職員が「かたき」を原型にした新しいボール遊びを考案。アウトでもゲームに復帰できるルールに焦点を当て、「復活」を含むネーミングでポジティブな印象を与えたとともに、柔軟なボールの使用で恐怖感なく参加できるルールとしたことで、市内の児童会館のみならず全国にも普及する人気の遊びに発展した。

1996 平成8年度

仕事と育児両立支援セミナー

仕事と育児の両立に困難さを感じる市民を対象に、両立に必要な情報や心構えを提供しようと、財団法人21世紀職業財団とのタイアップでセミナーを開催した。受講者から託児を求める声が多くあり、女性センターでのセミナー開催に際しては、託児機能も整える必要性を感じた。

ボランティアビューロー研修会(講演会)

ボランティア活動を希望する女性を対象に、ボランティアの意義と基本、体験学習を行う「ボランティア・スクール」が40期を迎えたことを記念して、修了者を対象としてボランティア活動を援助し推進するための拠点となる機関を意味するボランティア・ビューローをテーマとした研修会を実施した。

1997 平成9年度

ミニ児童会館管理運営事業受託

札幌市の中学校区ごと1館に相当する児童会館100館構想が達成目前となり、小学校区ごとの会館建設を望む声が高まったため、小学校内の空き教室を利用したミニ児童会館が開設された。児童が放課後、ランドセルを背負ったまま校内移動で利用できる利便性が特徴で、初年度は南小、菊水小の2館が開設された。

再就職準備セミナー

結婚や出産、子育てで退職した女性が「自分には出来ないかもしれない」と自信を失い、職場復帰を断念するケースが多かった時代背景にあって、具体的な目標設定の重要性や職場復帰に向けた情報収集の必要性を認識してもらおうと、セミナーを開催した。

1998 平成10年度

札幌市定山渓自然の村管理運営業務受託

定山渓自然の村は、自然観察や野外活動を通して市民の自然に対する関心と理解を深めるとともに、市民の健康増進、交流促進を図るため開設された。当時では珍しかった通年で利用可能なキャンプ場として話題となり、夏季とは一味違った野外活動を楽しんでもらおうと、職員はスノーシューを用いた自然観察やかまくら造りの体験プログラムなどを考案し、提供した。

プルタブ大作成

「できることからはじめよう」をテーマに、全児童会館で集めたリングプルを車いすに交換し、市内の公共施設に贈る取り組みを実施。活動を通して、体の不自由な人の立場を考える機会やリングプルの収集に遊びを取り入れるなど、各児童会館で工夫を重ねる機会にもなった。

1999 平成11年度

こぐま座こども人形劇団

小学校3年生から6年生を対象に、人形劇団を結成。人形劇を創る過程で創造性を培い、子どもたちの舞台芸術活動を追求、支援するとともに、劇場の次代を担う表現者の育成を図ることを目的とした。2000年からは人形劇の審査公演を行う「札幌人形劇祭」に連続して参加、豊かな発想力と観客を楽しませる表現力が高く評価された。

児童会館全館受託

宮の森児童会館と太平児童会館の2館を札幌市教育員会から運営受託した1986年4月以来、当協会が得意とするグループ活動中心の遊びの提供や行事の運営実績が評価され、受託館数が年々増加した。1999年6月より、児童会館の運営効率化を図るため、札幌市より全館の運営を受託することとなった。

2000 平成12年度

新たな事務局でスタート

1992年度に移転、開設されていた札幌市青少年センター(中央区南9条西14丁目)が、札幌市生涯学習総合センターちえりあ内(西区宮の沢1条1丁目)への移転に伴い、当協会事務局も移転した。当協会全体の規模や職員数も拡大していた中、新たな事務局としてスタートし、現在に至る。

初心者のための人形劇講座修了生対象人形劇講座

札幌の文化、劇場を担う人材の育成と、公演活動の活性化を目指して、こぐま座・やまびこ座のオープン以来、初心者を対象とした人形劇講座を開講してきた。2000年度からは、新しい作品の創造と人形操作、美術、演出など、一層のスキルアップによる作品づくりを目標に、経験者対象の「修了生対象人形劇講座」を新たに開講した。

2001 平成13年度

「i・あいプラン21」スタート

財団内で検討を進めていた将来構想検討プロジェクトの提言を基に、具体的な方向性と事業推進のため「ゆめプラン21策定プロジェクト」を発足。活動協会の持つ各種機能の連携と充実化した横断的な事業実施に向けた議論のうえ「i・あいプラン21」を策定し、21世紀の札幌のまちづくり・人づくりの具体的な方向性を示した。

さっぽろパフォーマンスカーニバル「だい・どん・でん」

勤労青少年ホーム「Let's中央」を拠点に若者による実行委員会を組織、札幌中心街の活性化に向けたパフォーマンスイベントを企画した。招待した全国的に著名なパフォーマーや市民パフォーマーによる弾き語りやフラダンス、ジャグリングなどを商店街や地下街、狸小路で披露。規模拡大に伴う組織体制の変更を経ながら、中心部の一大イベントとして市民に定着した。

2002 平成14年度

ハックルベリーアドベンチャーキャンプ

学校の週休2日制を有効活用し、社会体験や直接的な自然体験活動の機会を増やそうと、2002年度から開始したキャンプ事業。小学1年生から3年生が対象のリトルコース、小学4年生から6年生が対象のジュニアコースを設け、天売島の外周を1周するなど、市内に限らず北海道の自然を舞台とするアクティブなプログラムを展開した。

北星学園大学実習生受け入れ

児童会館での現場理解を深める実習の場として、北星学園大学 心理・応用コミュニケーション学科の学生を実習生として受け入れを開始。学生にとっては直接児童と触れ合う機会、職員にとっては学生の指導を通じて自身の日々の業務振り返りにつながり、双方にとって学びのある貴重な機会となっていることで、現場体験、現場実習として現在も継続している取り組みである。

2003 平成15年度

財団法人札幌市青少年女性活動協会へ名称変更

国の施策として男女共同参画社会が推進されるに伴い、社会情勢の変化を背景に、従来の「婦人」から「女性」へと一般的な呼称が変遷していた状況を考慮し、活動協会の名称を「青少年婦人」から「青少年女性」へと2003年8月、変更した。

札幌市男女共同参画センター開館

女性の生活文化の向上と女性活動の推進を図り、女性の福祉増進に寄与する目的で運用されていた札幌市女性センターが、2003年6月をもって閉館。機能の一部を引き継ぐ形で、札幌市男女共同参画推進条例に基づいた男女共同参画を推進する総合的な拠点施設「札幌市男女共同参画センター」が開設され、札幌市から管理運営業務を受託した。

2004 平成16年度

さっぽろ雪まつり大雪像制作団ボランティア指導業務

札幌の冬の風物詩「さっぽろ雪まつり」で、冬の魅力を市民が育むまつりへと発展させたいといった札幌市の意向を受け、活動協会が大雪像の制作団の一員に加わった。
これまでメインで携わっていた自衛隊や消防局から雪像制作の技術伝承を受け、制作技術を継承するスタッフの育成と雪像制作に加わる市民ボランティアの活動サポートを実施した。

子ども運営委員会

屯田北児童会館の新設に際し、利用者となる子どもの意見を採用しようと、「こども運営委員会」が設置された。新築設計に向けた構想会議に子どもたちが参加し、自らの夢や希望を反映した児童会館の完成が実現した。この子ども運営委員会の設置を皮切りに、市内全館でも同様の委員会が設置され、児童会館の運営に子どもたちが参画する機会が広がった。

2005 平成17年度

「ヤングジョブスポット」事業受託

独立行政法人雇用・能力開発機構からの受託し、職業的自立支援の観点から事業の企画立案や実施運営に携わった。ビジネスマナーの体得や履歴書の書き方講習、企業面接のトレーニングなどを行い、若者の就労に直結する取り組みを進めた。これまで主に、余暇活動で関わっていた青年へのアプローチが、就労支援といった新たな役割に拡大する契機となった。

スノー&アイスキャンドル大作戦

活動協会が管理運営する全施設が連携し、取り組んだ地域交流イベント。札幌の冬ならではの素材と環境を生かしたキャンドルシェード作りは当時では珍しく、製作方法を保護者や地域からの参加者にレクチャーする講座も開催。当初、さっぽろ雪まつり期間と連動したキャンドル点灯だったが、年々、各地域のイベントと連携が拡大し、地域密着型の交流イベントに発展した。

2006 平成18年度

「指定管理業務」初年度

2003年9月に地方自治法が改正され、公の施設管理を民間団体等が実施する場合の仕組みが、従来の「管理委託制度」から「指定管理者制度」に変更されたことに伴い、札幌市においても経過措置期間を経た2006年4月に「指定管理者制度」に移行した。応募に係る業務計画書の作成、提案等に取り組み、児童会館や勤労青少年ホーム等の管理運営業務を受託した。

「子育てサロン」スタート

安心して子育てのできる地域の施設として、児童会館が乳児から幼児期の子育てを支援。遊びを楽しみながら、親子の関わりや保護者同士の交流を深めていくことを目的としスタートした。開始当初は札幌市の職員からアドバイスを受けていたが、次第にベビーマッサージや栄養士、歯科医師による講話等活動協会独自のプログラムを取り入れ、多彩な内容で実施している。

2007 平成19年度

カヌーキャンプ

児童会館を利用する児童に、自然の中での野外活動を体験してもらおうとキャンプ事業を企画した。洞爺湖財田キャンプ場の一角を貸し切り、自然と水にどっぷり浸かってもらいたいとの趣旨で名付けた「どっぷり村」で、村旗や村役場も設置した仮想空間を作り上げた。日常活動では見られない参加者の一面に触れることができ、その後の成長を実感する事業となった。

かもくま祭

中島児童会館とこぐま座の開館を記念し、地域社会への貢献を目的とした事業の実施で両施設の歴史的価値をPRした。周辺地域の大勢の市民や団体も巻き込み、協働で企画を運営。幼児から大人まで楽しめる人形劇や腹話術の上演、地域住民や公園管理課によるバザー、作品展を開催し、大勢の市民が来場し賑やかなイベントとして成功した。

2008 平成20年度

「ふり→たいむ」愛称決定

2006年より、中高校生の居場所づくりを目的として実施されていた「中高校生の夜間利用」について、親しみやすい愛称を募集したところ、170作品もの応募があり、その中から利用生徒たちの投票により「ふり→たいむ」に決定した。現在では利用する中高校生だけではなく地域の中にも「ふり→たいむ」として定着している。

エルプラまつり

札幌エルプラザを拠点に活動する市民活動団体や市民グループを中心に、商店や周辺地域、企業と協働でお祭りイベントを企画した。活動団体の振興と市民への普及啓発、団体相互の交流を目的に企画し、ステージ発表や作品展示、各種体験会やチャリティー販売など多彩なプログラムを実施。

2009 平成21年度

札幌市滝野自然学園を自主運営施設として管理運営開始

自然体験活動をはじめとする当協会の自主事業の幅広い展開のため、協会自主運営施設として「札幌市滝野自然学園」を新たに取得した。滝野の恵まれた自然を体感し、四季を活かした多様な自然体験活動を通して、子どもたちに主体的かつ積極的に生きる力の育成に取り組んできた施設で、さらなる発展を目指しての運営開始となった。

こども基金「スマイルキッズ」

札幌の子どもたちの様々な体験活動を通して子どもたちの健全育成活動を応援しようと設立した基金。この基金を活用して、活動協会の各部門で事業を自主的に行うほか、市民グループが企画する事業の助成を行っている。企業や事業者には社会貢献事業として基金への寄付を募り、多くの企業から協力を得ている。

2010 平成22年度

野外活動課の新設

新たに札幌市青少年山の家ならびに札幌市北方自然教育園の指定管理業務が加わり、野外活動課が新設された。これまで活動協会が培ってきた野外教育事業のノウハウや滝野自然学園、定山渓自然の村の運営実績をいかし各施設が協働し横断的な事業を展開していくこととなった。

「エンジンリンク」始動

札幌市若者支援基本構想の一環として若者支援施設のあり方を検討し、「明日の社会を担う若者の社会的自立の実現」を目標に勤労青少年ホーム(愛称Let's)を若者活動センターに変更したことに合わせ、全市的に若者の仲間づくりや交流を促進するために市内の若者団体の登録制度を設けて様々な情報提供を可能にした「エンジンリンク」を始動した。

2011 －平成23年－

社会背景

・札幌駅前地下歩行空間開通
・東北地方太平洋沖地震発生
・大通公園100周年
・地上テレビのアナログ放送終了

財団の主な出来事

・市民活動プラザ星園を自主運営施設として
　管理運営業務開始（～平成27年3月）
・ミニ児童会館3館新規受託（全70館）

事業

共通・イベント
○福島リフレッシュ・サマーキャンプ
○姉妹都市少年交流事業プログラム　○洞爺湖・夏の冒険王
○西区サマーカーニバル　○第1回たまねぎフェスタ
○歩くスキー出前授業　○札幌花き市場まつり

滝野自然学園事業
○リトルキャンプ　○お父さんと過ごす週末キャンプ

若者支援施設事業
○ 若者舞台芸術祭 ○ ポプラ若者活動センター閉館式典

こども劇場施設事業
○ こぐま座パペットユーススクール ○ いいだ人形劇フェスタ2011
○ 東日本大震災チャリティー公演ゴールデンウィーク特別企画
　「パラ☆パラ☆パラエティーショー」
○ 東日本大震災支援北海道こども舞台フェスティバル

北方自然教育園事業
○ 教職員初任者研修

定山渓自然の村事業
○ 道産素材で大人の野外料理研究会
○ 大人のためのキャンプ研究会

青少年山の家事業
○ なかよしキャンプ　○ しめ飾り作り

札幌エルプラザ公共4施設事業
○ 女性のためのチャレンジ支援事業
○ 異世代交流事業「じいじの孫育て講座」
○ インフォメーションリテラシー講座
○ “NPOのための”今日から始めるfacebook講座

市民活動プラザ星園事業
○ NPO手作り市場　○ 知りSHIRIコンサート
○ 市民活動プラザ星園秋まつり

共通

福島リフレッシュ・サマーキャンプ

福島県在住の小中学生を対象に、長期間のサマーキャンプを実施。財団の全課が運営に携わったほか、NPO法人ネイチャープログラムデザインや大勢のボランティアスタッフが協力し、およそ90名に充実したプログラムを提供した。

事業への想い
東日本大震災被災地での不自由な生活環境から、転地療養による心身のリフレッシュを目的に実施。北海道の自然を満喫しながら児童会館での交流や人形劇の鑑賞、市内観光なども楽しみ、平穏な日常を感じてもらえる機会となり、平成24年度まで継続実施した。

児童会館・こどもの劇場・こども人形劇場

東日本大震災復興支援活動

こども育成課・こども劇場課では、東日本大震災直後から被災地の子どもたちへの支援活動を実施。岩手県でいわて子どもの森移動児童館事業「あそびにコンビニ」のほか、やまびこ座・こぐま座の2劇場が、福島県の子どもたちや仮設住宅に住む高齢者の方々を対象に人形劇および人形浄瑠璃公演を行った。

事業への想い
震災により子どもたちの遊び場所や環境が奪われたため、「たくさん遊んでほしい」と願う人々の想いがつながり“あそびの輪”が広がった。現地関係団体と連携しつつ支援・交流活動を現在も継続しており、心のケアや地域コミュニティ再生へつながっている。

若者支援施設

若者舞台芸術祭

若者活動センター利用の演劇団体による合同演劇祭を、センター利用者有志と共同で企画。6団体が参加し、ひたむきな演技が観客を魅了した。また、東日本大震災チャリティ事業として売上の一部を募金し、社会貢献の機会となった。

事業への想い
演劇団体の利用機会増を背景に、団体間の交流機会と演劇ネットワークの構築を目的として合同演劇祭を企画した。演劇を共通テーマに交流を深めたほか、高校演劇部の出演や中高生の観劇料無料化による集客効果で、舞台芸術の裾野を広げることにもつながった。

市民活動プラザ星園

市民活動プラザ星園管理運営業務開始

廃校となった札幌星園高校の施設を借り受け「市民活動プラザ星園」として管理運営業務を受託（平成27年3月迄）。入居団体と共同で星園祭りや町内会主催のゴミ拾い、市民活動団体と連携したロビー事業などに取り組んだ。

事業への想い
NPO法人コミュニティーワーク研究実践センターと共同で、財団の理念「市民活動の振興」の実現と市民活動サポートセンターの補完機能を目的とした施設。施設の周知とPR、入居団体や利用団体の発表の場、利用者間の交流機会とした「秋祭り」では、大勢の来場者で賑わい、社会体験や市民交流の場となった。

青少年山の家

なかよしキャンプ

野外教育の観点から教育現場の課題「小1プロブレム」に対処しようと、幼・保・小連携のモデル事業として市教育委員会と共催で実施。清田区内の小学校5年生と次年度入学予定児童を対象に、計4回の自然体験や宿泊機会を提供した。

事業への想い
自然の中での様々な体験を通じて学校教育の最重要課題「生きる力」を育み、異校種間、異年齢交流を促進することが目的。学校教育に成果を反映させるため、効果測定（IKR測定）を組み込んだ。開催毎に参加者相互やグループ内での連携活動が増える成果を挙げ、企画事業課の受託事業として現在も継続実施中。

男女共同参画センター

就業支援機能「女性のためのチャレンジ支援事業」

女性の経済的自立と多様な働き方を支援する講座を実施した。自然、ものづくり、デザインのテーマ別全5コースで、110名が参加。趣味を仕事にする心構えなどを学んだ。また、貸室や情報の提供、コミュニティ形成の支援を行った。

事業への想い
従前の再就職準備講座への参加者減少の一方、就職にとらわれず自宅やNPOでの地域就労を目指す声が多かったため、同講座を企画した。開講を契機に札幌市男女共同参画センターでの起業支援がスタートし、女性起業家コミュニティの発足や女性起業家対象のチャレンジスペース開設へと展開した。

2012 －平成24年－

社会背景

・子ども・子育て支援法成立
・泊原子力発電所稼働停止
・東京スカイツリーが開業
・日本の総人口 過去最大の25万9000人減

財団の主な出来事

・ミニ児童会館9館新規受託（全79館）
・札幌まなびのサポート事業「遊學舎 まなべぇ」（西区5会場）受託
・児童クラブ開設時間延長および対象学年の拡大

事業

共通・イベント

○札幌市水道記念館リニューアルオープン5周年記念行事
○藻岩山観光道路登山マラソン・駅伝「もいわ山ヒルクライムラン531」
○大倉山夏まつり　○第23回幌北ふるさと夏祭り
○もいわ山小学校体験学習プログラム
○JR白石駅イベント　○キズナ強化プロジェクト
○西区ウォームシェアinちえりあ　○スポーツキャンプ
○「福島リフレッシュ・サマーキャンプ」写真展

児童会館事業

○ 南区合同行事「あそびの宝箱～あけてびっくり!?カッパラダイス～」
○ とびだせ！じどうかいかん！げんキッズフェス

こども劇場施設事業

○ 札幌市教育文化会館共同制作人形劇
○ こども人形劇舞台祭典2013 in ISHIKARI

若者支援施設事業

○ 若者支援総合センター移転閉館イベント
○ ちえりあ子ども盆おどり

定山渓自然の村事業

○第3土曜日は工芸デイ　○セルフはんごうタイム
○森林ガイド育成事業　○自然アート事業
○Nature Village フェスティバル

青少年山の家事業

○ はじめてのスキーキャンプ

札幌エルプラザ公共4施設事業

○困難な状況にある男女への支援事業
○社会貢献活動推進事業　○子ども・青年への男女共同啓発事業

児童会館

とびだせ！じどうかいかん！げんキッズフェス

市内の児童会館、ミニ児童会館に通う児童が中心となり、子どもたちのためのイベントとしてサッポロファクトリーで開催した。子どもたちがスタッフとして遊びのコーナーやステージ発表、市長へのインタビューを含むトークイベントを行った。

事業への想い

子どもの夢の実現をテーマに掲げ、児童会館の利用児童に、活動の成果発表や体験活動の機会を提供し、日常活動の活性化につなげることを目的に企画。市内全館の共同事業として各コーナーを運営し、他館との連携強化や一般市民への児童会館PRにもつながった。

若者支援施設

ちえりあ子ども盆おどり

町内会主催の盆踊りのこども踊りを宮の沢若者活動センターの地域アプローチ事業として企画。太鼓の叩き手は周辺の小学校から募集し、また札幌市青年団体協議会と連携して、若者が各コーナーをボランティアスタッフとして運営した。

事業への想い

太鼓の叩き手募集では、広報効果と地域児童への体験的な学びの機会提供が得られた。未経験者との活動で太鼓経験者はリーダーとして成長し、参加者同士のグループ化も促進。地域事業の連携拡大の目的通り、世代間交流を図るための地域の盆踊りとして定着した。

青少年山の家

はじめてのスキーキャンプ

小学校入学前児童やスキー経験の少ない低学年児童を対象に、スキーや雪あそびの魅力を伝える目的で一泊二日のキャンプを開催。滝野すずらん丘陵公園の協力を得、ファミリーゲレンデでのスキー体験や夜の森あそびなどを実施した。

事業への想い

児童に、雪への親しみや遊びを通じた人や自然と関わり、自立と共同の基礎を培う機会を提供しようと実施。集団宿泊活動を経験した参加者は、自立性や協調性を養い、小学校のスキー学習に備えて「スキーに対する自信」を得ることができた。

男女共同参画センター

子ども・青年への男女共同啓発事業

中高生を対象に、個人として尊重される経験の場「たまりんぱ」を開設。ピアカウンセラーや学生ピアサポーターによる運営で、センター内で若い世代が集まりやすい居場所を作り、将来を考えるシンポジウムや講座も実施した。

事業への想い

若年時からの男女共同参画啓発を目的に、まずは中高生が気軽に集える居場所づくりから取り組んだ。同年代の大学生ピアサポーターによる悩み相談により、それまで足を運ばなかった中高生が安心して参加できる場の運営が実現できた。

児童会館

札幌まなびのサポート事業（まなべぇ）

大学生の有償ボランティアが学習支援サポーターとして、生活保護受給世帯の中学生を対象に学習指導を行う事業。平成24年、西区生活保護課から当財団が子どもの貧困対策事業のモデルとして受託し、西区内5会場で開始した。

事業への想い

対象世帯の中学生に、自ら考え、学ぶことの大切さを伝え、学力向上と高校進学の促進を目的に実施。平成28年度からは40会場に拡大し、学習のみならず交流や野外活動にも取り組み、学習支援だけでなく、人と人とのつながりの大切さを実感できる居場所機能を担った。

企画事業

キズナ強化プロジェクト

インドの高校生を日本に招き、東日本大震災の被災地や地域内での青少年交流を通じて相互理解の促進を図る事業を、JICEと共同で主催した。当財団は、北海道滞在期間中のプログラム策定とホストファミリーの募集面で協力した。

事業への想い

アジア太平洋・北米地域から青少年を招き、東日本大震災後の日本再生へ向けた諸外国での理解促進と絆の強化を目的とした事業。当財団が訪日青少年と日本の青少年の交流や体験活動のプログラムを企画したことで、札幌の青少年の国際交流促進が可能となった。

2013 －平成25年－

社会背景

・北海道集中豪雨
・障害者総合支援法 施行
・いじめ防止対策推進法 成立
・日本人の女性の平均寿命が世界1位に

財団の主な出来事

・公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会に名称変更
・放課後子ども館5館の受託開始
・ミニ児童会館7館の新規受託（全86館）
・岩見沢地域若者サポートステーション事業受託
・札幌まなびのサポート事業「遊學舎 まなべぇ」（市内25会場）受託

事業

共通・イベント

○ ウォーキング推進キャンペーン　○ リトルキャンプ2013
○ 北海道新幹線開業PRマスコットキャラクター作成ワークショップ運営業務
○ ホワイトスクール雪像制作指導業務
○ ZOOナイト・キャンプ

児童会館事業

○中・高校生のための情報誌作りワークショップ
○児童会館・ミニ児童会館マスコットキャラクター「にじりん」誕生

こども劇場施設事業

○銀のしずく～大地が謡ったものがたり～
○やまびこ座25周年記念公演　○加藤ひろしメモリアル13
○まこ×まち2014人形劇ワークショップ　○やまびこ座たのしませ隊

若者支援施設事業

○脱自分チャレンジ　○白石MAPプロジェクト
○若者支援総合センター移転に伴う式典

定山渓自然の村事業

○シルバーくつろぎ倶楽部
○自然アート・クッキング交流会

札幌エルプラザ公共4施設事業

○「さっぽろまちづくり総合情報ポータル」キッズページプロジェクト
　学生まちづくりコミュニケーションツール検討委員会
○広報力アップ講座

共通

公益財団法人移行

公益法人制度改革に伴い、平成25年4月に「公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会」へ移行した。従来からの寄付行為や設立趣意書を継承し、更なる公益性向上のため時代の変化に応じた定款と目的も掲げた。

当時の想い

「人とのつながりによる魅力あふれる未来社会の創造」を経営理念とし、理念実現のための主体的な活動支援や地域社会の発展及び向上、豊かな生活の実現への寄与を目指し、拡大してきた事業領域を再定義し、定款4事業に集約した。

児童会館

児童会館・ミニ児童会館マスコットキャラクター「にじりん」誕生

児童会館、ミニ児童会館のマスコットキャラクターのデザインを公募、キャラクター名は児童会館利用者から募った。2月にサッポロファクトリーで開催した「げんキッズフェス2014」にて公開投票の結果、「にじりん」に決定した。

事業への想い

児童会館・ミニ児童会館のPRを目的に、誰からも愛されるキャラクターを誕生させようと企画。全国から415作品の応募を得た。「にじりん」は各区合同行事等に登場するほか、児童会館利用者へのグッズ配布などを通じて認知度が向上、たくさんの子どもたちに親しまれていった。

若者支援施設

若者支援総合センター移転に伴う式典

平成25年3月末、若者支援総合センター（旧レッツ円山）の移転に伴い、従来からの利用者や地域住民を対象とした記念式典を開催した。過去の資料展示や大通高校の太鼓演舞、懇親会などを実施した。

事業への想い

移転先の町内会関係者の参加が多く、今後の活動への理解と期待を得られる機会となり、その後の町内会との合同事業や仕事体験先への発展につながった。若者利用者や連携校の市立札幌大通高校からアイデアや協力を得ながら、式典が実現した。

こどもの劇場

やまびこ座たのしませ隊

市民サービスの一環として、人形劇公演前後にロビーでの読み語りや昔遊び、パフォーマンスなどやまびこ座の利用者と交流をするボランティアを募集。初年度は12名が登録、活躍した。

事業への想い

利用者の満足度向上とリピーターの獲得に加え、市民のボランティア活動を通じた劇場の多様な利用機会による劇場全体の活性化も目指した。メンバーは定期的に学び合いながら、自主企画のイベント開催を計画した。

定山渓自然の村

シルバーくつろぎ倶楽部

退職者や主婦層などの高齢者対象事業として企画。ヨガ体験や竹笛作り、定山渓フットパスなど幅広い内容で全3回実施した。一部事業では専門講師の派遣を受け、内容の充実を図った。

事業への想い

施設の平日利用促進を目的に、定山渓ならではの活動やターゲット層の余暇活動に貢献する体験を提案した。ボランティア主体で活動援助ができるよう支援し、活動を経てシルバー世代のコミュニティー構築の効果も得られ、平成27年度まで継続的に実施した。

企画事業

ZOOナイト・キャンプ

小学4～6年生を対象に、円山動物園で動物生態のグループ学習に取り組む宿泊キャンプを行った。参加者は、飼育員と共に業務内容を体験しながら飼育員から与えられたミッションを調査し、グループで発表を行った。

事業への想い

平成20年度以降、JTBから円山動物園ナイトキャンプを受託していたが、平成25年度からは円山動物園との共催となった。貴重な経験が得られる機会として参加者からの評価が高く、大勢の参加者と円山動物園の協力を得て、実施された。

2014 －平成26年－

社会背景

・札幌国際芸術祭2014（第1回）開催
・消費税8％に引き上げ
・総人口の4人に1人が65歳以上に
・はやぶさ2打ち上げ成功

財団の主な出来事

・ミニ児童会館8館新規受託（全94館）
・新琴似オフィス設置
・こども劇場課を市民参画部からこども事業部へ所属変更
・第3期指定管理開始
・札幌まなびのサポート事業「遊學舎 まなべぇ」（市内30会場）受託

事業

共通・イベント

○札幌国際芸術祭2014コロガル公園　○ミニさっぽろ
○かんきょうみらいカップ2014
○子宮頸がんに関する普及啓発プロジェクト
○エコチル100号記念 エコチル祭2014
○北海道青少年会館Compass1周年感謝祭
○もっとにっこり！鉄西秋祭り

児童会館事業

○西区児童会館統一事業「探検！発見！リバーレンジャーキャンプ」
「探検！発見！自然アドベンチャー」

こども劇場施設事業

○やまびこ座海外特別公演「外套」
○いいだ人形劇フェスタ「北海道フェア」
○第66回さっぽろ雪まつりプロジェクト「雪の国のアリス」
○さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座20周年記念公演
○OKHOTSK～終わりの楽園～

若者支援施設事業

○若者交流事業「ガクショク」
○地域活動ネットワーク構築事業
○市立高校外部人材活用支援事業

滝野自然学園事業

○グリーン・スクール2014

定山渓自然の村事業

○キャンプ初心者講習会　○初めてのお泊りキャンプ

青少年山の家事業

○防災キャンプ　○自然体験活動ボランティア養成講習会

札幌エルプラザ公共4施設事業

○コワーキングスペース　○男性のための仕事の悩み相談事業
○「共感する人の輪」を広げていくためのフォーラム事業
○市民活動団体フォーラム　○まちづくり活動座談会
○教師対象研修　○日本女性会議2014札幌

児童会館

西区合同行事「リバーレンジャーキャンプ・自然アドベンチャー」

琴似発寒川流域の西区の各児童会館利用者が、川遊びと生き物探しを通した自然との触れ合いや上流での源流探し、一泊二日で川の流域をすべて歩くキャンプ企画、水質調査を実施した。

事業への想い

子どもたちが、自然との共生観点からその素晴らしさや不思議さを実感し、自然を守る意識の向上を目的に実施。発寒小ミニ児童会館の利用児童が環境広場での発表を行ったほか、人間の生活圏に合わせて川の汚染が進む事実を知り、環境問題への関心が向上した。

こどもの劇場・こども人形劇場

第66回さっぽろ雪まつりプロジェクト「雪の国のアリス」

大通5丁目特設ステージで大雪像が舞台の人形劇オペラ「雪の国のアリス」を制作・上演。芸術監督に沢則行氏を迎え、やまびこ座やこぐま座からパペットユーススクール、さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座が出演した。

事業への想い

アートによる雪まつりの魅力アップを図るため、雪像制作委員会に「アートパフォーマンス部会」が置かれた。平成29年度からは、こぐま座前広場を会場に雪像と雪のステージを設営し、野外人形劇を上演するなど、冬の子ども文化醸成の機会創出につながった。

青少年山の家

防災キャンプ

災害時のリスクをどう切り抜けるかを野外活動を通じて体験学習する事業を実施した。「衣・食・住」をテーマに、サバイバルクッキングや小屋作り、生活体験・救急法の全3回を開催した。

事業への想い

生涯学習の観点から、楽しみながら防災体験し、生きる力を育むことを目的に実施。通常のキャンプとは異なり、参加者同士が自発的に協力して課題に取り組むプログラム展開を目指したところ、災害状況を想定した行動につながり、防災意識の強化が図られた。

企画事業

ミニさっぽろ

小学3、4年生の児童を対象とした体験型イベント「ミニさっぽろ」の指導、運営業務、実行委員会事務局機能を担当。子どもだけの仮想都市で、参加児童が仕事に就き、店舗での買い物や食事を楽しんだ。

事業への想い

将来を担う児童が、職業体験を通して就労の楽しさを学び、社会性や自立心を養う機会として実施。ボランティアの募集やコーディネート、当日の会場運営、各種団体との調整を通じ、参加者や関係者との連携強化と当協会の活動の認知度向上の好機となった。

男女共同参画センター

日本女性会議2014札幌

今大会で31回目、北海道では初開催となる全国会議の企画、広報を担当した。本大会では、男女共同参画に関わる様々な課題について理解を深める講演や解決策を探る意見交換が行われ、全国各地から約2,000人が参加した。

事業への想い

本大会は、各分野で活躍する女性の紹介や女性に関する諸問題の解決策の検討を目的に、昭和59年より毎年開催されている。女性の活躍推進や女性に対する暴力の根絶などのテーマ別で分科会を開催。男女共同参画センターの周知と全国的な関係構築の機会を得た。

環境プラザ

教師対象研修

小学校教諭を対象に、環境教育充実に向けた体験型学習の構成を学ぶ講座「アウトドア環境教育～身近な自然やビオトープを使った学習づくり～」を実施した。講義後にはグループワーク「どんな授業ができるだろうか」も開催し、参加者全員で意見の共有を図った。

事業への想い

身近な自然を題材とした主体的な学びへの契機、また参加者とのネットワーク構築を目的に実施。参加者との意見交換が学習内容に活かされ、児童が野外で自由な発想を活かせる学びにつながったと好評を得た。

2015 －平成27年－

社会背景

・子ども・子育て支援新制度施行
・マイナンバー法施行
・持続可能な開発目標（SDGs）採択
・北海道新幹線開業

財団の主な出来事

・ミニ児童会館3館新規受託（全97館）

事業

共通・イベント

○清田区町内会活動活性化支援事業
○安全運転普及イベント　○西区こども環境広場
○第67回さっぽろ雪まつり大通西10丁目会場における
　大雪像制作等業務
○ミモザコンサート
○さっぽろ雪まつり大雪像制作隊長育成業務
○第9回かもくま祭

児童会館事業

○レバンガ北海道選手訪問プロジェクト
○厚別ブロック「あつマルシェ」

こども劇場施設事業

○地域創造大賞（総務大臣賞）受賞
○福島地元人形劇団招待公演
○被災地報告会とシンポジウム「福島のいまを考える」

若者支援施設事業

○施設デザイン検討プロジェクト　○音楽人材育成講座

滝野自然学園事業

○手稲タンケンツアー

定山渓自然の村事業

○昆虫博士キャンプ　○ようこそ北海道ファミリー
○定山渓ウインターフェスティバル

青少年山の家事業

○ヒグマトランクキットプログラム提供
○学びの支援団体 さぽーと事業　○防災サバイバルキャンプ

札幌エルプラザ公共4施設事業

○子どもボランティア体験プログラム
○長期休み自由研究応援企画「～小さな研究者になろう!～」
○情報発信講座

企画事業

さっぽろ雪まつり大通西10丁目会場　大雪像制作

©バードスタジオ／集英社・フジテレビ・東映アニメーション

札幌市より受託し、さっぽろ雪まつり大通西10丁目会場の大雪像の模型製作から設計、市民ボランティアとの大雪像制作を担った。ボランティア指導業務では、事務処理や現場でのサポートも実施した。

事業への想い

隊長派遣業務や市民ボランティアコーディネート、制作指導業務の受託実績があり、その実績を基に市民ボランティアと大雪像を制作。今後のまちづくり事業へ発展させることを目指して取り組んだ。大雪像の制作完成は大いに注目され、広報的側面での役割を果たした。

定山渓自然の村

定山渓ウインターフェスティバル

キャンプや野外アクティビティに興味を持つ家族、グループを対象に、冬季アクティビティの提案機会として、スノースクリーンでの映画上映や自然愛好家によるトークショー、スノーシューハイキング体験や屋外クッキングを実施した。

事業への想い

市民への冬季キャンプスタイルの提案で、アウトドアの楽しさとキャンプへの親しみを感じてもらい、地域や企業との連携で地域活性化の契機にもしたいと発案。令和元年度まで継続的に実施し、20の賛同企業と600人超の参加者を集めるなど好評を得た。

青少年山の家

ヒグマトランクキットプログラム提供

ヒグマと人間の接触する環境に位置する青少年山の家を会場に、ヒグマの毛皮や足跡シート、餌やフン等を収納したトランクキットを製作し、施設利用者や事業参加者にヒグマの生態に関する体験学習プログラムを提供した。

事業への想い

ヒグマの生態への正しい理解と愛護の精神を育み、野生動物を身近に感じられる札幌への愛着を深めることを目的に実施。当初、小学校5年生対象の宿泊学習プログラムとして開発したが、要望による出張提供も増え、幼児から大人まで幅広い層が体験した。

滝野自然学園

手稲タンケンツアー

「10年後の手稲のまち事業」アイデア作品を描いた手稲区在住の小学4年生を対象としたバスツアーを開催。手稲区内で「歴史・自然・未来」のテーマに沿った3ヵ所の探検会場を選定し、学生ボランティアとともに探索した。

事業への想い

将来を担う子どもたちに、まちづくりへの参加の楽しさと重要性を知ってもらおうと実施。手稲鉱山選鉱場跡地や星観緑地、北海道科学大学へ見学に赴き、専門家からの解説を受け、普段、接する機会が少ない場所や出来事に触れ、地域への愛着を深める機会となった。

環境プラザ

長期休み自由研究応援企画「小さな研究者になろう!」

長期休暇の児童を対象に、自由研究の支援事業を実施。夏休みには「まちの中の樹木調査」で街路樹の役割や自然の大切さを学習。冬休みには「自由研究ネタのタネまつり」で環境団体の出展ブースでの多彩な体験を提供した。

事業への想い

体験のみならず、専門家による直接指導を受け調査研究のプロセスを学び、調査を行う面白さの気付きによる主体性の習得を目指して企画した。事業後には保護者とともに自然に触れる機会が増えたという声もあり、家庭内での意識向上にもつながった。

情報センター

情報発信講座

市民活動団体や個人がより効果的な情報発信を行うため、SNSを用いた広報活動の講座を開催。基礎知識や効果・活用法を学んだ後、キャッチコピーやプレゼン力をテーマに、ビギナー編とアドバンス編に分かれて展開した。

事業への想い

市民活動団体が情報発信面で抱える課題を把握し、解決のヒントにつながる講座の開催で、広報の課題解決を目指した。助成金の申請、活動報告など、自らの活動をPRするために必要な力を習得する機会となった。

2016 －平成28年－

社会背景

・熊本地震
・改正公職選挙法施行 選挙権18歳に
・米大統領にトランプ大統領就任
・出生数 初の100万人割れ

財団の主な出来事

・経営企画室新設
・ミニ児童会館1館新規受託（全97館）
・札幌まなびのサポート事業「遊學舎 まなべぇ」（市内40会場）受託
・二条小ミニ児童会館廃止により受託終了

事業

共通・イベント

○UHB秋の収穫祭　○さっぽろ水道記念館秋まつり
○水道記念館「普及宣伝事業」
○白石区青少年まちづくり活動促進事業

児童会館事業

○第10回かもくま祭中央ブロック合同行事子ども運営員会コーナー
○白石区合同庁舎開設イベント白石ブロック児童会館の参画

こども劇場施設事業

○こども劇場課・こども育成課連携事業
「人形劇クラブの指導および育成」
○札幌市こども人形劇場こぐま座開館40 周年記念セレモニー

若者支援施設事業

○アカシア演劇指南塾 2nd season　○クラウドファンディング講座
○ENGINE-LINK支援事業

滝野自然学園事業

○クボタeプロジェクト　○RERA　DOKIDOKI SUMMER CAMP2016
○サマーチャレンジ!カヌーキャンプ
○ホクレン「くるるの杜 杜の感謝祭2016」
○インタープリターズキャンプin札幌　○冬休み宇宙科学探検隊
○ちえりあ広場を雪だるまで飾ろう!in宮の沢

定山渓自然の村事業

○ようこそ北海道ファミリー　○森もりレンジャー

札幌エルプラザ公共4施設事業

○寄付月間キャンペーン「寄付ってなぁに?～寄付の教室～」
○インタープリターズキャンプin札幌
○お家で楽しむ「ゆるカフェ講座」　○ガールズ相談
○学習スペース@ジョーセ

児童会館

中央区合同行事「第10回かもくま祭」

中島児童会館・こども人形劇場「こぐま座」主催による地域参加型のお祭り事業「第10回かもくま祭」にて、中央区内の児童会館全館の子ども運営委員会の児童が、ゲームコーナーやステージの司会、発表などを担当した。

事業への想い

リーダー育成と中央区の子ども運営委員同士の交流や、職業体験の機会として実施。参加者は子ども運営委員会の活動の成果を発揮して積極的に取り組み、その後の活動への意欲向上へとつながった。765名が参加し、職員同士や地域関係団体との連携強化、児童会館活動のPRを図った。

こどもの劇場・こども人形劇場

人形劇クラブの指導および育成

こども劇場課の専門性を活かし、各児童会館の人形劇クラブを対象に、指導や育成に取り組んだ。稽古を重ねた3館は「第45回札幌人形劇祭」で上演し、新琴似南小ミニ児童会館が優秀賞、札苗児童会館が奨励賞を受賞した。

事業への想い

児童会館利用者と職員に児童文化への興味関心を高めてもらうとともに、こども育成課とのノウハウ共有による職員のスキル向上を狙った。児童会館対象の特別観劇枠の設定や被災地継続支援活動への現地スタッフ協力を得て、延べ678名が参加。横断的で拡大が期待できる協力体制を築いた。

若者支援施設

アカシア演劇指南塾 2nd season

アカシア若者活動センターで、演劇初心者を対象とした演劇講座を開講。地域若者サポーターや多数の演劇人らが講師を務め、受講した高校生から社会人までの若者が、「卒業公演」を目標に稽古に取り組んだ。

事業への想い

演劇に興味をもつ若者に気軽な演技体験の機会を提供しつつグループワークによる成長性を狙った事業で、延べ258名が参加。事業終了後も、参加者が講師や職員の力に頼らず独力で市内劇場で公演を行うほど主体的な活動へと継続。卒業後は関連事業のサポートを担うなど、団体と施設の強固な関係が構築できた。

定山渓自然の村

森もりレンジャー

「定山渓遊々の森」を活用し、家族単位での森づくり体験事業を実施した。森林の専門家から伐採、植樹体験や川の生き物、昆虫、鳥などの生態を学び、人と森とのつながりや歴史を理解する貴重な機会となった。

事業への想い

森林環境教育を通じた人と自然の関係を深めるプログラムを実施した。計50組150名が家族単位で参加し、自然への興味・関心の向上とボランティア意識の醸成を目指した。当事業は令和2年度まで継続実施され、定山渓の歴史や森の歴史を織り交ぜながら水源の森でプログラムを展開した。

滝野自然学園　環境プラザ　野外活動施設

インタープリターズキャンプin札幌

野外活動課・企画事業課・市民参画課の連携事業として実施した企画。公益財団法人キープ協会から講師を招き、道内の自然教育施設職員らが、専門性の高いインタープリテーションのプログラムを学んだ。

事業への想い

「自然を通して人と人を繋ぐ」視点による自然体験で、地域素材を活かした活動、学びづくり機会を目的に実施。参加者や講師、共催施設職員が繋がり、相互理解が図られた。また、各施設で従来の対象者へのアプローチに加え、新しい価値創造の可能性も生まれたため、事業の継続的な実施へとつながった。

企画事業

白石区青少年まちづくり活動促進事業

札幌市白石区地域振興課からの受託事業。白石区複合庁舎のオープニングイベントと区民協働スペースでのにぎわい創出イベントを、次代のまちづくりを担う青少年の協力を得て開催した。

事業への想い

清田区以来17年ぶりとなる新庁舎の建て替え事業に伴うイベントで、青少年によるまちづくり活動促進を目的に開催。白石区児童会館の合同行事や地域で活動する市民によるワークショップ「町内会×若者トーク」など、地域に根付いたプログラムを展開し、複合庁舎のにぎわい作りに寄与した。

2017 －平成29年－

社会背景

・「札幌市子どもの貧困対策計画」策定
・第8回冬季アジア大会
・「核兵器禁止条約」採択

財団の主な出来事

・こども事業部と企画事業部（若者支援）をこども若者事業部に統合
・こども事業課新設
・「求める人材像」策定
・児童会館2館（二条はるにれ、東雁来）新規指定管理開始（全106館）

事業

共通・イベント

○おもてなし推進事業　学生ボランティア募集・管理運営業務
○花とみどりのキッズパークinきよた
○次世代の活動の担い手育成事業　○市営交通子ども絵画展
○水道記念館ウォーターワークキッズ　○科学館夏祭り
○下水道科学館リニューアルオープンイベント

児童会館事業

○野外・自然体験活動「秋の定山渓でデイキャンプ！」
○北区児童会館業務実践プロジェクト

こども劇場施設事業

○中島児童会館・こぐま座連携事業
　冬の野外巨大人形劇「宮沢賢治～雪わたり～」
○中島児童会館・札幌市こども人形劇場こぐま座「こどものまなび塾」
　（ボランティア養成講座）
○札幌国際芸術祭2017「中島公園百物語」

若者支援施設事業

○ポプラYouth+ キッチン　○You食　○夏まつりだよ12分区
○キッチンカーを活用したアウトリーチ事業

滝野自然学園事業

○「雪活」体験イベント運営業務

北方自然教育園事業

○北方くだものファーム

定山渓自然の村事業

○モンゴルの夕べ
○課題を抱える青少年を支援する体験活動プログラム

青少年山の家事業

○親子で！軟石クラフト

札幌エルプラザ公共4施設事業

○市民活動出前講座
　「まちづくり活動ってなんだろう？ スマイルまちづくりゲーム」
○ミニサロン
○男女共同参画センター×しみさぽ “社会変革”をキャリアにする
○こどもエコクラブ支援事業

共通

「こども若者事業部」と「こども事業課」を設置

こども事業部と若者支援事業部門を再編し、「こども若者事業部」と「こども事業課」を新たに設置した。前年の「経営企画室」の新設に続く再編であり、現在の機構に至る。

当時の想い

子ども、若者世代に共通の様々な課題解決を狙い、機構改革を実施。こども事業課は、児童や家庭が抱える困難な課題の早期発見、必要な支援への連結を主業務とし、また若者支援事業課との連携で、各種事業に横断的に取り組むこととなった。

若者支援施設

キッチンカーを活用したアウトリーチ事業

キッチンカーを活用した若者向け飲食交流会として、もみじ台団地、中島公園、札幌市内の児童会館で「10代みんなのカフェ部活動」を実施。また、応援企業への訪問や若者の社会体験の機会として市内イベント会場で調理を行った。

事業への想い

若者支援施設からの遠隔地域でも、子どもや若者のニーズ、課題に対応しようと、「食」を介したアウトリーチ型の交流機会提供を通じて、新たな居場所づくりにつながる事業として展開。課題を抱える若者の早期発見と支援へとつながるなどの成果が生まれた。

定山渓自然の村

課題を抱える青少年を支援する体験活動プログラム

こども育成課や若者支援施設と連携し、まなびのサポート事業「スペシャルまなべえ」の野外体験活動として実施した。北方自然教育園での収穫体験や定山渓自然の村での野外炊事体験でグループ活動を行い、参加者同士の交流を図った。

事業への想い

自然体験活動の施設やノウハウを活かし、子どもの貧困など社会的課題の解決を目指し実施した。児童会館との連携で、課題解決や支援プログラムと支援体制の構築へつなげた。自然体験活動に教科学習の要素を持たせ、楽しみながらも学びに近づく機会となった。

北方自然教育園

北方くだものファーム

家族を対象に、果樹農家の一連の作業と収穫まで携わる果樹栽培体験事業を実施した。初回は梨の摘果と袋掛け作業、次回は収穫を体験し、果樹農家の工夫や苦労の体験を通じて、自然環境や作物との関わりを考える機会を提供した。

事業への想い

果樹木の有効活用策として事業化が実現した。果樹栽培体験事業を通して、家族間での協力と北海道の食文化や食育に関する理解と関心を深め、食料の大切さを学ぶ機会となった。

市民活動サポートセンター

市民活動出前講座

市民活動促進学生プロジェクトの大学生がアイデアを出し合い、作成したコミュニケーションツール（絵本・スマイルまちづくりゲーム）を利用し、小学生を対象に市民活動やまちづくりに関する出前講座を児童会館で実施した。

事業への想い

次世代を担う子どもたちに、市民の一人としてまちづくり活動をあそびの中で知ってもらう機会。大学生がツールを作成し、小学生にプログラムを実施することで、子ども・若者世代への市民活動の啓発となった。

企画事業

次世代の活動の担い手育成事業

市民文化局市民自治推進課のプロポーザル形式公募にて受託。若い市民を対象とし、小学生、中学生、高校生、大学生・若者と、年代別に「まちづくり」に関わる啓発、体験の場作りを行う事業を実施した。

事業への想い

まちづくり活動の担い手育成を目的に、まちづくりゲーム体験や市民活動家との意見交換会、ごみ拾いや雪まつりでの来館者受入れボランティア、学生と地域をつなぐマッチングバンクや「まちフェス」の運営を通して、小学生から若者までの地域活動参加を促した。

2018 －平成30年－

社会背景

- 北海道命名150年
- 北海道胆振東部地震
- 不登校14万人超 過去最多
- 働き方改革関連法成立

財団の主な出来事

- 児童会館1館（栄西小はんのき）新規指定管理開始（全107館）
- 女性の多様な働き方支援窓口運営事業
  ここシェルジュSAPPORO総合案内業務受託
- ミニ児童会館4館（栄西小ミニ、石山南小ミニ、澄川小ミニ、上野幌東小ミニ）廃止により受託終了

事業

共通・イベント
○栗山町・くりやま若者サポーター育成事業
○元気です!!北海道プロジェクト　○科学館冬フェスタ運営業務
○だい・どん・でん!FINAL!

児童会館事業
○白石Ⅰブロック「川下ウィンターフェスティバル」

こども事業
○子どもの貧困対策事業「にこにこキャンプ～森のひみつ～」
○生活協同組合コープさっぽろフードバンク事業
○さっぽろこどもサポート事業「福服ギフト」
○子どものくらし支援コーディネート事業

こども劇場施設事業
○やまびこ座30周年記念式典　○野外巨大人形劇「テンペスト」
○中島児童会館・こぐま座資料室MA・SO・BO開設

若者支援施設事業
○Youth+ 札幌にじーず　○Youth+ アカシア「浴衣カフェ」
○Youth+ 全館若者育成プログラム「数字で社会が見えてくる」

滝野自然学園事業
○こまおか森のようちえん　○おためしデイキャンプ
○プチリトルキャンプ

北方自然教育園事業
○ロビーで簡単工作

定山渓自然の村事業
○親子で「こそ練」キャンプ　○ようこそファミリーキャンプ

青少年山の家事業
○キャンプを学ぼうキャンプ　○インターンシップ受入事業
○ウィルダネスファーストエイド野外・災害救急法資格取得講習会

札幌エルプラザ公共4施設事業
○展示コーナーの活用あそビバ!エコプラザ
○スタートアップ支援事業　○しみサポ事業サポーター

こども事業

子どものくらし支援コーディネート事業

困難を抱えている児童やその家族を把握し、適切な支援につなげる「子どもコーディネーター」を配置する事業を札幌市より受託。児童会館や子ども食堂、学習支援団体など地域で子どもと関わる関係先を積極的に巡回し、相談支援体制の充実を図った。

事業への想い
平成30年3月に掲げられた「札幌市子どもの貧困対策計画」の基本施策での、困難を抱える子どもや世帯の早期把握と必要な支援の推進に基づき、児童の生育環境によって影響されることなく成長できる社会の実現を目指して本事業を開始、以降段階的に地区を拡大した。

児童会館・こども人形劇場

「MA・SO・BO(ま・そ・ぼ)」開設

日本初の公立児童会館・中島児童会館、そして日本初の公立専門人形劇場・こぐま座の歴史的資料や文化的資料を揃えた資料室を開設。知る・学ぶ・触れるをコンセプトに子どもから大人までが楽しみ集い合い、子どもに関わる文化発信を目指している。

事業への想い
歴史的価値が高い子どものための健全育成施設が札幌に存在する事実を周知するとともに、歴史の振り返りにより、次世代に向け子どもたちが輝くまちづくり活動につなげるため開設した。市民だけではなく、教育関係や文化関係などの実践者も利活用できる場を目指した。

若者支援施設

Youth+ 札幌にじーず

LGBT対象の居場所づくりに取り組む民間団体「にじいろほっかいどう」と協働。性に悩む若者を対象に、性別や所属不問で参加できる機会をYouth+センターで月1回開催したほか、垣根をなくすための市民向けセミナーを実施した。

事業への想い
若年層の性的マイノリティ当事者の居場所づくりのため活動する「にじーず」は全国各地で実施されており、札幌ではユースワーカーが介在し、「外見で性別を決めつけない」などのルール設定による安心な居場所づくりで、参加者同士でも意識できる工夫を凝らした。

市民活動サポートセンター

しみサポ事業サポーター

市民活動への参画を目指す市民に、活動開始の契機となる場を提供。月1回の定例会での情報交換のほか、市民活動サポートセンター主催事業のボランティアとしての活動を通して、施設事業の理解や他の市民活動団体の理解を深めた。

事業への想い
市民活動参加の意思がありながらも、参画には至らなかった市民の「初めの一歩」として利用できる機会を提供しようと企画。しみサポ事業サポーターが市民活動サポートセンターと他組織とをつなぐ役割を担った。

青少年山の家

インターンシップ受入事業

東海大学、札幌ホテル&ブライダル観光専門学校の学生をインターンシップ生として受入れ、小学生の宿泊学習利用などの利用者対応、施設管理業務、事務作業など、青少年山の家の日常業務について5日間の実務体験を実施した。

事業への想い
職業体験の機会を設け学生のキャリア形成を支援することで、次世代の担い手育成につなげることを目的に実施した。これを機に野外活動を仕事にすることへの理解とともに、学生に財団を知ってもらう機会へ発展した。

北方自然教育園

ロビーで簡単工作

学習館ロビーにて「ミニ工作会」を実施。手押し車、自然素材で工作、ドライフラワーのブーケ作りの3種類から選択、自然素材を活用した創作活動や遊びを体験した。市民ボランティアが個別活動の機会として、工作キットの製作や指導等に関わった。

事業への想い
天候に左右されず自然素材を利用し誰もが楽しめる環境を整備したことで、冬期間の利用促進、新規利用者の獲得につながる機会となった。簡単な工作テーマを設定したため、幼児や保護者の参加者増加にもつながった。

2019 －平成31年－ －令和 元 年－

社会背景

・天皇陛下ご即位 令和に改元
・新型コロナウイルス感染症の流行
・消費税10%に引き上げ

財団の主な出来事

・「子どものくらし支援コーディネート事業」対象区を全10区に拡大
・人材育成方針策定
・児童会館1館（羊丘）新規指定管理開始（全108館）
・ミニ児童会館1館（羊丘小ミニ）廃止により受託終了
・南4条オフィス開設

事業

共通・イベント

○手稲鉄北地区防災マップ活用事業
「遊んで学ぼう！ぼうさいシールスタンプラリー」
○水道記念館ウォーターワークキッズ
○夏休み札幌歴史探検隊
○第1回イオン東札幌店チャレンジ・THE・けん玉

児童会館事業

○豊平区児童会館にじりんプロジェクト中高校生事業「eスポーツ体験会」
○里美地区「5館合同子ども会議」
○手稲区児童会館合同行事「ていねっこかぼちゃれんじ」

こども事業

○国際交流事業留学生と英語で日本の文化を体験しよう!
○COOPさっぽろ共催事業おうちごはん
○職業体験「森・もりキャラバン～森のプロから仕事をまなぶ～」
○だっことおんぶの講座　○子育てLINE相談

こども劇場施設事業

○OKHOTSK（オホーツク）欧州公演　○野外巨大人形劇ピノキオ
○企画展示ファミリー文学館「人形劇からとび出した人形たち」
○やまびこ座リフレッシュオープンフェスティバル

若者支援施設事業

○プロとYouTuber に学ぶ！サイキョードウガクリエイター講座

滝野自然学園事業

○「花川マリア認定こども園」講師派遣業務　○たきの川のがっこう
○親子でわくわく冬あそび

定山渓自然の村事業

○冬季テント泊チャレンジプラン　○親子で冬キャン!!

青少年山の家事業

○学校教育と連携した野外教育プログラム普及・開発事業
○公園と連携した自然体験プログラム

札幌エルプラザ公共4施設事業

○NPOワークショップ

児童会館

手稲区合同行事「ていねっこかぼちゃれんじ」

手稲区名産の「みやこかぼちゃ」を区内の児童会館全館で栽培し、収穫したかぼちゃを使ったクッキングや子ども食堂への訪問を通して地域との交流を深めたほか、手稲区役所を訪問し、手稲区長に活動報告を行った。

事業への想い

地域資源の発掘と活用のため、手稲区児童会館の合同行事として実施した。自らが栽培した野菜を使ったクッキング体験が子どもたちへの食育となり、その取り組みを小学校や地域でのパネル展示のほか、小学生向け広報チラシの配布により児童会館周知につながった。

こども事業

子育てLINE相談

乳幼児の保護者やプレパパママを対象とし、子育てや妊娠・出産、子どもの育ちに関する悩みをLINEで気軽に相談できる窓口を設置。札幌市子育てアプリへの掲載により開始日以前からの登録があり、ニーズの高さを実感した。

事業への想い

匿名や子育てサロンを利用していない方からの相談も受け付け、親子が心身ともに健やかに生活できるよう企画した。相談内容は多岐に渡り、話ができることでの安心感を求める相談者の声が多く届いた。

こどもの劇場

OKHOTSK（オホーツク）欧州公演

やまびこ座制作のプロデュース人形劇「OKHOTSK～終わりの楽園～」を欧州3ヶ国で上演。スロバキアでは人形浄瑠璃のデモ公演も同時上演。チェコの芸術大学、ポーランドの人形劇フェスティバルでは、人形浄瑠璃ワークショップを開催した。

事業への想い

やまびこ座開館30周年記念事業の際、特別公演で招いたポーランドの劇団からの招聘で、欧州での公演が実現した。現地では交流を図りながら日本の優れた伝統芸能を紹介し、文化の相互理解を深められ、未来につながる国際交流となった。

市民活動サポートセンター

NPOワークショップ

市内や近郊の高校、大学に出向き講座を実施。NPOの基本的な知識やその要素と合わせて、市民活動サポートセンターの機能を伝え、実際に活動しているNPOの想いや活動の周知を図った。

事業への想い

市民活動の担い手となる潜在層の若者を対象に、活動への理解を深めサポートセンターの認知度向上と利用動機、協働の機運を高めるために実施。予備知識の薄い若年層に直接働きかけることで、社会貢献に興味をもつ若年層の掘り起こしと参加意欲を高めることができた。

定山渓自然の村

冬季テント泊チャレンジプラン

キャンプ初心者を対象に、テント泊や冬季アクティビティ体験を提供し、冬季キャンプの利用促進を図った。当日は3種類のテントでの宿泊を体験し、キャンプで活用可能な防災食体験なども実施した。

事業への想い

冬季キャンプの促進と厳冬期での家族単位の雪中キャンプで冬の楽しさや家族間の団結を深めることを目的に実施。冬季間の新たな楽しみの提案と冬キャンプの楽しさを伝える契機となり、施設では継続して冬季キャンプの推進を呼びかけている。

滝野自然学園

親子でわくわく冬あそび

札幌市中小企業共済センターより受託。滝野自然学園で、親子対象レクリエーション事業の全体コーディネート及び企画運営を行った。雪遊びやスノーラフトなど、自然の雄大さを感じられる冬ならではのアクティビティ体験やピザ窯体験などを行った。

事業への想い

好評を得ていた夏季のカヌープログラム実績から、冬季の親子レクリエーション活動の依頼を受けた。15～20組定員40名に対し142組の応募があるほど反響が大きく、楽しみながら親子の絆を深める様子が見られた。

40年のあゆみ

episode 2

地域のために、人のために

活動協会は、発足した当初から自分たちの仕事を全うしながら、
一方で自分たちの仕事がなくなることを目標としてきました。

なぜなら、「自分たちの仕事がなくなる」ということは、
「街の担い手が育ち、心豊かな街になっている」ということだからです。

しかし、地域と人、人と人とのつながりは深まるどころか、
時代を追うごとにますます希薄さを増していきました。

「地域を、人を、なんとかしなければいけない」。

その切実な思いは、児童会館の管理運営業務に結びつき、
その後も「やまびこ座」や「こぐま座」、「定山渓自然の村」をはじめ、
地域や人を思えば思うほど、仕事がなくなるどころか、
管理運営する施設も事業領域もぐんぐんと広がっていきました。
そして2013(平成25)年、大きなターニングポイントを迎えます。

活動協会は制度改革に伴い、北海道に事業の公益性が認められた団体、
「公益財団法人 さっぽろ青少年女性活動協会」として再スタートを切ることに。

実績を積み重ねながら、拡大してきた活動協会の事業。
その整理と再定義が行われ、活動協会は「まちづくり」「人づくり」を通して
地域社会に貢献していく法人であることが、このとき明文化されたのです。

青少年の健全育成と社会参加の促進
市民活動の振興
社会教育の推進
その他法人の目的を達成するために必要な事業

事業内容がどんなに多様になろうとも、
活動協会が行うべき事業の軸はすべて、この4つに集約されます。

その上で現状に満足することなく、常に新たなチャレンジに臨み続ける。
それが、「公益財団法人 さっぽろ青少年女性活動協会」です。

こども育成課

「未来を生きる子どもたち」を
人のつながりと地域の中で育てていく

About us　児童会館の運営をベースに、人のつながりと地域の中で「未来を生きる子どもたち」の育成をサポート

札幌市内全200拠点の児童会館、ミニ児童会館は、18歳以下のすべての子どもたちが仲間を作り、地域とつながり、生活を豊かにする目的のもと、自由に利用できる公共の施設です。私たちのセクションでは、児童との関わりや各種行事、保護者向け事業の実践を通じて、乳幼児親子から小学生、中学生、高校生、地域の方々まで、幅広い年代のつなぎ手としての役割を担っています。

児童会館、ミニ児童会館での主な運営事業

児童クラブ
保護者の就労などにより、放課後に留守家庭となる小学1年生から6年生の児童を対象に「児童クラブ」を開設しています。

子育てサロン
0歳から小学校就学前のお子さんと保護者が自由に集い、気軽な交流が楽しめる場です。子どもの育ちに関する悩みなども、相談できます。

ふり→たいむ（夜間利用）
中学生・高校生が利用できる、児童会館の「夜間利用システム」です。バスケットボールやバドミントンなどのスポーツの他、ダンスや読書・勉強・音楽鑑賞などに利用できます。現在、週2回実施しています。

Mission　これまで大切にしてきたこと

街とともに 未来を育む 人づくり

地域で子どもを育てる交流施設として、私たちは5つの柱を元に日々、取り組んでいます。

1.あそびの手法を生かす
子どもは「あそび」を通しさまざまなことを学びます。日々の活動に「あそび」の要素を盛り込むことで、主体性や自主性、自信、挑戦意欲が芽生え、達成感や悔しさも味わいます。また集団のルールや社会性、協調性、他者との違いを認め合うことも学び、人間力の養成につながります。

2.異年齢交流を通して育む
0歳から18歳まで継続して子どもたちと関わると同時に、保護者や地域との多世代間交流など、学校や家庭では得難い体験やさまざまな関わりの中から、子どもたちは社会性を身につけ、視野を広げます。私たちは、こうした交流が効果的に図られるよう、創意工夫に努めています。

3.体験から学ぶ
子どもは直接体験を通し、五感を発達させていきます。児童会館が提供する「目的を持った質の高い体験機会」は、学校や家庭では得られない貴重な場と考えます。また、行事や特別な活動に限らず、日常活動を通じた体験も内面を成熟させる大切な要素と捉えています。

4.地域の中で育てる
児童会館は地域の交流施設であり、子どもたちを地域で育て、地域に返していく役割があります。地域との関わりの中から温かさや愛着、郷土愛を持ち、保護者も地域との関りが増す中で、安心して子育てができる環境が整い、孤独な子育て防止につながります。

5.安心安全な居場所を作る
子どもや保護者を取り巻く環境や価値観が多様化する中、課題に対する支援機能の強化が求められています。各家庭の心に寄り添った誠実な対応を通じ、防犯や災害だけでなく、安心感が得られる精神的な拠り所でもある居場所を作ります。

Vision　中期目標

1.児童健全育成の専門家集団として日々スキルの向上に努め、全ての子どもを笑顔にする
2.地域と子どものつなぎ手として、一人ひとりと心を通わせ合うことで豊かな未来を育む

子どもの育ちに関わる職員として

職員一人ひとりが、仕事に自信を持って、
自らの職に誇りと愛着を持つ

組織の一員として所属セクションの使命や方向性を理解し、未来を創る子どもたちの力を伸ばすために、常に尽力、努力する存在であることを自覚します。
また、同じセクションの同志として仲間と価値観を共有し、意識や行動の方向性を合致させることで、一人ひとりの力を集結させ、組織として質の向上を目指します。

未来に向かって育つ子どものために

さまざまな機会や活動を通して、
子どもたちの生きる力を育む

子どもたちは、何気ない日常生活や意図的な活動、家庭や学校、自身の周囲の人々との交流、さまざまな体験を通して学び、大人になるためのチカラを付けていきます。
そうした子どもを取り巻く環境を整え、資源をつなぎ、さまざまな活動機会を提供しながら子どもの育ち(豊かなココロとカラダづくり)を支えていける取り組みを続けます。

Value　中期目標達成に向けた行動指針

私たちがどう行動していくか～そこから生まれる価値を常に念頭に

全職員が自分の仕事に誇りを持ち、自らも常に成長しようとする意欲と熱意、物事を前向きに捉え生きていく姿勢を持つことが、未来に向かって生きる子どもたちのより良い育ちにつながります。これは、子どもの育ちを支える私たち職員の原点であり、かつ職員に求められる「質の根拠」でもあります。常にこの原点に立ち返り、価値を上げ続けられるよう、下記の指針を掲げます。

1. 幅広い視野を持ち、社会や時代の動きに鋭敏になる
2. 目的意識を持った質の高い体験機会を作るため、スキルアップを図る
3. 適切な指導や支援を行えるよう研鑽に努め、専門性を向上させる
4. 問題解決志向で最善を探るよう、前向きで自律した職員を目指す
5. 子どもの育ちに関わる者として、まず職員が相互に育ち合える関係性を築く
6. 課のミッション、ビジョンを通して自らの職に誇りを持つと共に、原点と捉える

設立40周年
記念座談会
～ VISION with Next Generation ～

こども育成課

児童会館の未来は地域とともに

INTERLOCUTOR

部 長
会田 彰仁
Aida Akihito

主任指導員 伏古児童会館
浦崎 雄樹
Urasaki Yuki

指導員 拓北小ミニ児童会館
菅沼 悠
Suganuma Haruka

進行 係長 山田 直樹 Yamada Naoki

担当しているからこそ分かる、こども育成課のこと。
部門長と若手職員、それぞれの思いを語り合ってもらいました。

児童会館だからできる子どもとの関わり

財団が児童会館を受託したきっかけをお話しください。

会田　財団の設立は1980年。児童会館ができてからかなり後になります。当時は、世の中が豊かになってきた反面、核家族化など子どもたちが孤立するような状況や、非行などが社会問題になるなど、子どもや青少年を取り巻く課題も変化していました。そんな中、地域での人と人との関わりを通じて将来の社会を作っていく人を育成する目的で活動協会が設立されました。当時はリーダー養成や、子育てをするお母さんたちの集いといった事業を、グループワークの手法を用いて行っていました。設立から6年後の1986年、児童会館の数も増えてきて、活動協会の取り組みが児童会館の仕事にマッチングするんじゃないかと札幌市から話をいただき、協会としても、たくさんの拠点を持つことで、地域を舞台とした人づくりや居場所づくりにもっと広く関われるのではないかと考え、運営を受託しました。最終的にはすべての児童会館を運営することになったというわけです。

児童会館を運営する中で、こども育成課が大事にしていることは何でしょう?

会田　子どもたちとどう関わるかということをずっと大事にしてきました。1つ目は「遊びの手法を生かすこと」。遊びなら、やらされるのではなく子どもたちが自ら湧き出る感情に従って主体的に努力もできるし、他者との関わり合いを通して協調性も学べます。

浦崎　遊びだと点数や結果に関係なく褒めたり一緒に盛り上がったりして自己肯定感を高めることができます。それが学校にはない児童会館の強みですね。子どもたちは一人ひとり伝えることや伸ばす部分が違うので、遊びの中で楽しみながら課題を克服することは大事です。

会田　2つ目に「遊びを通じた異年齢交流」も児童会館の特徴です。子どもたちの世界は意外と狭いので、放課後さまざまな年代や考えの人と触れ合うことはとても大切です。いずれ社会に出る時のためにも、いい経験になると思います。

浦崎　異年齢の人と先輩後輩ではなく、友だちという形でつながれるのも児童会館の良さです。私も学生時代に児童会館を利用して、その時知り合った他学年の友だちと今も交流があります。趣味や考えの似た子ども同士が引き合った時、年齢は関係ないんだということに気付けたのはいい体験でした。

会田　そう、体験だよね。3つ目は「子どもたちが体験から学べること」。むしろ体験でしか得られないものがたくさんあるから、行事や日常の遊びを通していろんな体験を提供しています。そうして彼らは知らなかった世界に触れ、自分の興味や可能性を見出していく。その選択肢をこちらが作っていくんです。

菅沼　体験といっても行事とか遊びだけではなく、たとえば友だち同士で議論したことや怒られたこと、泣くほど笑ったことなんかも含まれるので、意外と深いんですよね。

会田　「地域に目を向ける」というのも重要なキーワードかな。子どもたちにとって地域は、たくさんの人との関わりを通じて自分が育つ場所。職員や親だけじゃなく、地域に育てられているんですよね。

地域が子どもを育てる、という視点は大切ですね。

会田　もしかすると主役は地域の方かも。自分たちはそのお手伝いをする脇役で、児童会館を拠点にいろいろな人をつないでみんなで子育てをする。そういう意味でも、子どもたちや地域の人をどう引き込むかが重要です。

子どもたちの安全・安心を見守るという面はどうですか?

会田　家での虐待や学校でのいじめなど、子どもが子どもらしくいられる場所が少なくなっています。だからこそ児童会館は、自分らしく、笑顔でいられる安全な居場所であるべきだし、我々がそれを全力で守っていく必要があります。後は貧困の問題ですね。昔のような、食べ物がないとか服がぼろぼろだとか、そういった目に見えて分かるものばかりじゃない。見えにくい貧困の背景に気付いていくことも児童会館の役割です。根本的な解決は我々だけではできないけど、アンテナを張って必要な支援の場所につなげていくことが重要です。

浦崎　児童会館では、必ずしも子どもが地域の方とものすごく親しくなるわけではありません。でもお互いの顔を知っていれば、何かあった時お互いに助けを求めやすかったりします。地域の安全を守るためにも、児童会館がつながりを作るという役目を果たしているのかなと思います。

菅沼　いじめに遭っている子が、「ミニ児童会館だったら行くことができる」と言って毎日泣きながら来ていたことがありました。話をするのが館長だと子どもにとってもハードルが高いので、指導員の私が対応しました。してあげられることは本当に少ないんですけど、「どうしたの?こうすればいいんじゃない?泣いたっていいじゃない」と話しかけて、一人になれて落ち着ける、自分らしくいられる環境を作りました。4年生の夏にいじめに遭って、5年生の夏くらいには友だちと一緒に来館できるようになったのを見て、こういうことが安全・安心な場所ということなのかと思いました。児童会館にいる間だけでも、困っている子どもたちを、親でも先生でもない指導員としての立ち位置で守ってあげられたらいいかな、と思います。

浦崎　よく会館の職員と話すのは、子どもたちに対して何か一つきっかけを作って、今まで見ていたものとは違う世界を見せてあげたいということですね。

菅沼　ええ。児童会館に来る全ての人が主役で、自分の仕事は彼らが最大限輝けるようサポートすること。子どもたちには児童会館での経験を、友達、お兄さんお姉さんたちとみんなで成し遂げた達成感とともにいい思い出にしてほしい。私自身「名脇役になる」というテーマで12年取り組んできました。

思いを共有するための「言葉」を作る

育成課で「ビジョンプロジェクト」を立ち上げたそうですが、目的や背景をお話しください。

会田　今まで話したようなミッションやビジョンについて、みんな何となく理解はしているんだけど、共通理解のための分かりやすい言葉がなかった。経験のない若い職員も含めて、みんなで共有できる伝播しやすいキャッチフレーズを作りたいと思ったんです。いろんな人にいろんな角度から見てもらい、新しい言葉で作りあげたというのが経緯です。

まず「街と共に未来を育む人づくり」というミッションワードについてお聞きしたいのですが。

浦崎　子どもたちを育てたり未来を作っていくのは、児童会館だけではできないことなので、地域の方々や施設などと連携して行うという意味で「街と共に」になりました。その後の「人づくり」ですが、今私たちが関わっている子どもたちが、大人になって自分たちの思いを引き継いでくれたり、ミッション達成のために、子どもたちや地域の人たちがつながっていくという意味を込めています。

ビジョンワードは2つあるんですね。1つ目は児童健全育成の専門家集団として日々スキルの向上に努め全ての子どもを笑顔にする、2つ目は地域と子どものつなぎ手として一人ひとりと心を通わせ合うことで豊かな未来を育む、ということですが。

菅沼　1つ目のビジョンですが、私たちはただ子どもたちと過ごしたり見守ったりしているわけではありません。健全な育成には多くのスキルを必要とします。自分たちが専門家集団の一員であるということに一人ひとりが責任を持ち、子どもたちにできることを日々たくさん学んで身につけることが大切です。そうすれば子どもたちに還元できることも増え、職員としての誇りも芽生えると考え設定しました。2つ目のビジョンについては、「子どもたち一人ひとりと」という部分が重要と考えています。大勢の中の一人ではなくそれぞれの子どもとしっかり向き合い、真剣に関わっていくことで、彼らの感情や感受性を育てていけたら、と。もちろん子どもたちが変わっていく様子を見たり、「ありがとう」と言われることは私たちのモチベーションアップにもつながります。

会田　活動にはまず職員全員がミッションやビジョンを理解することが大切なので、プロジェクトでまとめたこれらのワードを、今後共通の言葉として浸透させていく予定です。

「誇り」と「研鑽」の積み重ねが成長につながる

今後に向けて、皆さんが目指していくべき姿勢について教えてください。

会田　子どもたちの抱える課題を前に原因や有効な手立てなどを考える時、世の中の動向を知ることが解決に結びつくかもしれないよね。そうした大きな動きに敏感になり、先を見越してどう対処するか考える力を養う必要があると思うけど、どうかな？

浦崎　社会情勢や児童会館を利用する方々を取り巻く環境も目まぐるしく変わっています。
児童会館だけで解決できない場合は、解決できる施設や人につなぐための情報を日々キャッチして把握しなければいけません。

会田　カウンセリングやコーチングといった、子どもたちと関わるためのスキルを身につけていくと、子どもが変わっていくための効果的なアプローチができるよね。
菅沼さんは何か意識していることある？

菅沼　私はアンガーマネジメントですね。怒っちゃう子にはきっと何か理由があるはずなんですよね。それを知りたくて今学んでいる最中です。

浦崎　館長として思うんですけど、子どもたちはもちろん、保護者の方も気軽に相談する場所がほしいんですよね。ただ話を聞いてもらって気持ちが楽になりたい時がある。だから自分がカウンセリングや傾聴のスキルを身につけ、指導員やパートスタッフなど、全職員にも伝えていこうと思っています。

会田　そうしたネットワークを広げて一緒に考えていくことが求められているのかも。これだけの組織なんだからみんなで協力していろんな手法を試せるし、スキルを持った職員たちと情報共有しながら全体の課題を解決していけたらいいな。

子どもたちの変化が見えるとうれしい

菅沼　子どもの変化にいち早く気付けるようにしようと思います。いろいろなことを経験してほしいので、彼らの興味を引くアイデアをどんどん出していきたいです。私にとっては地域の方が気軽に立ち寄れて、自然に交流できるのが児童会館の理想形。そういう場所を作れるような活動を館に提案し、名脇役として頑張るつもりです。

浦崎　あと、あいさつをきちんとする、悪いことしたら謝るなど子どもにやってほしいことは、言うだけじゃなく大人もできなくてはいけないと思います。まずやって見せて、そこから学んでもらうよう働きかける。加えて今子どもたちや社会の中で流行っているものを取り入れて自分の意識や中身をアップデートし、その上で古いものの良さも伝えていきたいですね。

皆さんからすごく使命感を感じますね。

浦崎　今関わっている方々や子どもたちの未来を作る一翼を担っていることに、誇りを持っています。そういった部分をほかの職員や児童会館の職員たちにも伝えていくのが今後の自分の課題だと思いますし、この座談会でそれを再認識できました。

菅沼　誇り……そうですね。指導員の仕事は必ずしも目に見える成果があるわけではありません。利用した方々に「ありがとう」「今日は楽しかった」と言って帰ってもらうことが私の中では誇りです。だからいつも全力で向き合い、いただいた言葉に対してちゃんと恩返しができるよう努めていきたいです。

志の高い若手職員の話を聞いて、部長はいかがですか？

会田　子どもたちの変化はなかなか見えにくくて、分かるまで年月がかかるかもしれません。一人ひとりとしっかり関わった結果、それが見えた時は嬉しいので、みんなもそれを信じて、諦めずに最善の策を常に考えてほしい。そして自分たちや職員が大事にしていることをどんどん伝えていって、同じ考えを持った人たちが増えるといいなと思います。それが、きっと子どもたちの笑顔の輪が広がることにつながるはずです。

スペシャリスト集団を目指して
札幌のすべての子ども育成支援に取り組む

About us　子どもが抱える課題に気づき、必要な支援につなげる専門家

子ども、若者に共通するさまざまな社会課題に対して先駆的な事業を推進するため、平成29年に新設されました。「札幌まなびのサポート事業」の主務課を担うほか、貧困を始めとする子どもや家庭が抱える困難を早期に発見し必要な支援につなげる「子どものくらし支援コーディネート事業」を展開しています。また、若者支援事業課と連携し、子どもや若者が抱える課題解決に貢献できるユースワーカーの養成のほか、こども育成課と連携し、児童会館運営の充実と安定化を目指し事務業務の効率化の推進に取り組んでいます。

Mission　これまで大切にしてきたこと

子どもの課題解決に対し、確実な成果を出せる専門家集団として

子どもに関する専門施設として児童会館の存在意義をさらに高めるため、より効率的な事業を先駆的に提案し、子どもの育成の社会的課題解決に対して確実な成果を出していくことを目標としています。

社会的課題への対策事業

子どもの成長にとって、それぞれが大切な存在として認められ自己肯定感を高めていくことが重要です。抱える課題が複合的なケースもあり、個別のニーズに合わせた対応で子どもたちの健全な心の成長に貢献できる取り組みを続けています。

すべての子どもたちに向けて

すべての子どもが対象の「興味・関心創出事業」、家庭環境により体験が不足している子どもが対象の「体験機会フォロー事業」などを実施しています。他団体や企業とのネットワークを構築、発展させた幅広い事業を今後も展開していきます。

基幹業務へ注力可能な環境の整備

児童会館の運営における基幹業務は、来館児童や地域との関りを深めることです。子どもたちに寄り添い、子どもたちが安心して過ごせる居場所としての環境整備を重視し、管理面においては、事務業務や情報共有の効率化に努めています。

Vision　中期目標

すべての子どもの健やかな成長に貢献する社会課題の解決に尽力

児童会館事業との連携により、子どもを取り巻く社会的、地域的課題の解決に取り組むとともに、すべての子どもを対象とした体験活動の充実を図る事業の展開に努めていきます。また、保護者のライフスタイルや価値観の多様化の背景や経済格差による「子どもの貧困」に対し、子どもに関わる「家庭・学校・地域」のバランス、連携が重要である社会背景の中で、右記に掲げた私たちの将来の在りたい姿を目指していきます。

1. 家庭や学校とは異なる、多世代・異年齢の多様な人との交わりや「遊び」を通じた体験機会を提供する様々なスタイル、「第3の居場所」を創出
2. 子どもに関する支援のスペシャリスト集団としての立ち位置の確立
3. 札幌市近郊での子どもに関する活動を行う団体同士をつなぐハブとしての役割

Value　中期目標達成に向けた行動指針

子ども期から若者期へ安心してつながる居場所の創出

自己肯定感の育成と楽しさや感動、安心して自己表現できる環境の提供が、意欲の低下や失望感などによる「心の貧困」から子どもたちを遠ざけ、未来に向かう子どもたちの健全な育ちの実現につながると考えています。そうした心の充足感を得られる場を創り出していくことが私たちの最大の使命であり、子どもたちが安心して若者期へ成長していくために、下記の取り組みを進めていきます。

1. 社会課題へのアンテナを張り、社会背景や時代のニーズに即した事業の展開
2. 個人と団体、企業をつなぐハブとしての役割とコーディネート業務の取り組み
3. 当財団の信頼性と実績のスケールメリットと公益事業への柔軟な対応姿勢を活かした取り組み
4. 児童会館バックオフィス業務の適正化および全体効率の向上
5. 児童会館運営部門が基幹業務に注力できる環境の構築

設立40周年
記念座談会
～ VISION with Next Generation ～

こども事業課

すべての子どもを見逃さない

INTERLOCUTOR

部 長
五十嵐 健二
Igarashi Kenji

×

課 長
加藤 孝
Kato Takashi

主任指導員
渡邊 沙千
Watanabe Sachi

主任指導員
冨澤 一泰
Tomizawa Kazuyasu

進行 係長 松本 弘美 Matsumoto Hiromi

担当しているからこそ分かる、こども事業課のこと。
部門長と若手職員、それぞれの思いを語り合ってもらいました。

課題を見つけ、素早く支援へ

こども事業課は発足から3年となります。どのような課なのかお話しいただけますか。

五十嵐　過去にも同じ名前の課はあり、何度かリニューアルしていますが、目的はそのつど異なります。今のこども事業課は、子どもや家庭、若者世代が抱えるさまざまな課題を早期に発見し、必要な支援につなげることを主な業務としています。課の中にはいろいろなセクションがありますが、何でも挑戦できる課です。コーディネート事業やまなびのサポート事業の委託を受けていますが、そこから進展して何か別のものが生まれたらいいなという期待も持っています。

加藤　確かに、最初からあまり「机の上」に仕事がないセクションかもしれませんね。もちろんやるべき大事なミッションはありますが、ほかにやりたいことがあったらどんどん自分で仕事を作れるし、それが許されているところ。特に課を1つ預かる者としては、そういうことを意識しながら、社会や地域の課題に対してそのつど何をすべきか、何ができるのかを考えて精力的に仕事をしたいと思っています。

子どもに携わる人同士をつなぐ

何代かリニューアルをしているということですが、現在の代の課ができたのはなぜでしょうか？

加藤　子どもを取り巻く環境が変化する中、事業の幅が広がって、どこかのセクションに当てはめると動きが鈍ってしまうというのはあったと思います。コーディネート事業やまなべぇも、外部団体や法人内他セクションと柔軟に連携を図ることが重要になってきます。

五十嵐　我々が中心になって業務をやっていた頃は、子どもたちが中学校を卒業した後も何とかしてあげたいと思っても、個人情報の問題もあって難しいし、半分はあきらめてたよね。新生児童会館の近くで施設を借りてOBの子たちと集まるという事業展開は、事業課になったからこそできているのかも。そしてきっと、まだまだいろんな可能性があると思う。

こども事業課の役割はどんなことであるとお考えですか？

五十嵐　「つながり、つなぐ」が我々の仕事だよね。これはどこのセクションでも共通する話。私は児童会館や劇場、青少年センターでいろんな人をつないできましたが、今は立場的に職員同士をつなぐ仕事しています。現在87のまちづくりセンターの地域に中学校が99、小学校が200ありますが、その地域ごとで皆さんがつながれるような支援をしていく。そのために我々はいろんなことを感じ取らなきゃいけない。これからは頭の柔らかいチームの人から見て、思うところがあったらどんどん声に出して深く掘り下げていってほしいですね。冷めちゃうと忘れちゃうから、温かいうちにそれを重ねていってほしい。

冨澤さんや渡邊さんは、主任指導員として未来を担っていくにあたって、何か具体的なイメージを持っていますか？

冨澤　仕事をする上で短期的な目標はもちろん立てていきます。その先、例えば10年先20年先、私や渡邊さんみたいな年代が上の立場になったとき、軸として続けていく部分と、時代の流れに沿って変えていかなければいけない部分はあるのかなと思います。具体性はというと……渡邊さんは今持てていますか？

渡邊　さまざまな社会情勢やその時の流行などがある中、40年間培ってきて「やっぱりこれは大事だよね」と言われた活動協会の価値を、「札幌モデル」としてもっときちんと目で見て分かるように伝えていきたいですね。そして協会が中心になって、子どもや若者、市民と関わる人、いろんな活動の時に集まれる仲間を増やしていく。その中から仲間も人材も作っていけたらと今は思っています。

若い世代が考える、課のこれから

主任指導員のお二人にお聞きしますが、今後こども事業課としてどのようなことをやっていく必要性があると思いますか？

加藤　それは聞いてみたいね。今うちの課は、事業を主にしているチームと、管理を主にしているチームがあって、管理の方は誰かに直接「ありがとう」って言われたりすることがないでしょ？　冨澤君はその辺のやりがいとかどう思ってる？

冨澤　私の場合、児童会館の現場で子どもたちと直接接したり、お母さんたちに「ありがとう」と言われていたところから、急に契約や執行というバックオフィス機能を担う仕事になりましたからね。もちろんそれも含めて活動協会の仕事だし、巡り巡って市民や子どもたちのためになるとは分かっていますけど、もう少し直接的な手応えはほしいです。

五十嵐　冨澤君は今、ファシリティマネージャーの勉強をやってくれているけど、仕事って財務関連を知らないと需要も供給も分からないんだよね。で、ずっと同じ仕事をするわけではないので、今は逆に勉強させてもらっているんだと自分の中で納得できたら、たぶん見方もちょっと変わるかも。

冨澤　もちろん、ここで学んだことは絶対今後に生きていくとは思っています。言葉ではこれは現場のためになってるんだよって後輩や部下たちに伝えても、それを還元していくのは難しいですね。

加藤　基本的には我々は施設を持ってない。だからこそそういう意識や、自分が今ここでやっていることがどういうことにつながるのか、冨澤君が伝えていかないとね。

冨澤　見通しを持った戦略で、今現場や会館に必要なものをピンポイントで導入していくことにつながるのかな。今できることもあれば、指定管理の切れ目でしかできないこともある。現場目線と言いながらも、本当に現場の立場に立ってできているのかな、と疑問に思う時もあります。

五十嵐　現場の職員に近くないと、何が困っているのか分からない。実際に行って話を聞かないと。机上で考えても迷子になる。そこを見極めるのが事業課の役割だね。

渡邊さんは現場から事業課へ異動して1年が経過し、何か思うことはありますか？

渡邊　基本的にこども事業課は、いろんな人や場をつないだり、試行錯誤して次の世代に伝えるような情報をどんどん蓄積していくところだと感じました。本当は管理部門と連携して、事業の中での管理の契約をしたり、いろいろなシステムを入れてもらったり、そこで私たちがプログラムを展開するといったスケールの事業をできると思うんですよね。そういう視点で考えることができないと、大きな事業を組み立てられないので、管理の方も勉強したいと思っています。その事業が継続できて、別な形で効果が残るようにちゃんと整えることが絶対必要なんだと、ここにきて痛感しています。

五十嵐　活動協会が40年間走ってきた中でいろいろなものが次々と加わっていったけど、全ての子どもたちに対して何が足りないのかをずっと分析できないまま拡大している。でも事業課ならその分析ができるんだよね。加藤さんを中心に、森も木も見られる環境を作れるか、だと思う。

加藤　そうですね。特に児童会館部門はどんどん大きくなっています。2万人のお子さんをお預かりしている中で、児童クラブを利用している子どもを取り巻く環境はどうなのか、エビデンスを用いて振り返ったことがあまりないような気がします。今までは肌感覚だけでやってきたけど、エビデンスづくりは大事だし、現場から一歩引いている我々がやるべきことは多い。

五十嵐　エビデンスに関しては実績がたくさんあるから、うちの財産としてまとめて何冊か本が書けるかなと思います。うちにこれまでの文献がないからその辺は必要かも。

課を超えた自主性を育んでいく

課内や他の課とうまく連携するために考えていることはありますか？

渡邊　五十嵐部長が言ったように、ここぞという時に4課を「つなぐ」ような場とか仕組みを作れないだろうかと思っています。大きくなったからこそ、そういう場がなかなか持てず身動きが取りづらくなっているので、別な視点でそれができないか、とここに来てすごく考えています。

加藤　うちの根底としてそこは重要。ほかのセクションとの連携という意味ではもちろん、業務で新しいものを生み出しボトムアップすることも含めて、何かやれたら楽しいし必要だな、と。ただ研修で同期が集まるだけじゃなくてね。

渡邊　上から言われてやるのではなく自主的に、という雰囲気が課を超えて生まれるといいですね。できれば、まずはこども事業課で実現したいです。それと、一人ひとりの意見が反映されたり課を超えて携わる仕組みって、やがては子どもや若者に還元されると思うんですよね。そういう場を作りたい。そのためにいろんなことを立ち上げて環境を作り、地域のネットワークづくりをコーディネートできる人がいたらいいなと思います。また、こんな事業をしたいとなったときに、声をかけるべき団体や人などのつながりが目に見える形で分かるものはほしいですね。そういうものが、将来いろんな事業や事を起こすときに役立つんじゃないでしょうか。

五十嵐　以前、加藤さんとも話したんだけど、ノウハウがないところに対してうちが支援をしていく。ずっとではなく、その人たちが自分たちでできるようになったら、うちはすーっと消えていく感じ。市内87のまちづくりセンター地区でそれが進めば、子どものことを本気で考えてくれて、それを生きがいにしてくれる高齢者がもっと増えるんじゃないかな。その動きが社会全体に広がっていけばおもしろいと思います。

渡邊　種を蒔いて水や肥料をあげるようなイメージかな。私たちが行って活動を見てもらうことで、共感や興味・関心を抱く人がどんどん出てくれば、人材も増えていきますよね。

加藤　子どもたちが置かれる環境において家庭も学校も居場所として機能しないとき、第3の居場所の存在が重要になってきます。児童会館もその1つ。でも「すべての子どものために」という我々の事業目標から言えば、来館者主義は一番良くない。何らかの理由があって来館していない子どももいますからね。そういう子どものために、ほかにも居場所や機会はたくさん作っておかないと。だからいろいろな団体の取り組みや機能を我々がうまくつなぎ、一人ひとりに合った居場所を提示してあげることがすごく大事なんだと思います。

五十嵐　そこじゃ楽しめない人には、地域でやっているサロンを紹介したり。知っている情報は出し惜しみしない、と。

加藤　これまでの実績や信頼でやっぱり活動協会さんがいいですね、と言ってもらえることと同じくらい、公益の法人だけど子どものために個別に小さく動けることも大事。展開する事業について議論して、少数への支援だろうとこれはうちでやるべきだと思ったら実行する。それができる部署だと思っています。

今回の座談会をとおしてご自身の中で改めて思うところはありますか？

冨澤　まずは管理ないしこども事業課内で連携するなどして足下を固めた上で、他のセクションや札幌市、あるいは他の自治体とやっていけたらいいですね。管理だけに没頭していると見通せない部分が出てくるので、私自身、視野を広く持たなきゃいけないなと感じました。

渡邊　部長や課長、冨澤さんの話を聞いて、考え方や視点など自分の中の物差しが変わりました。せっかく今回こうやって話をする機会をいただいたので、事業課にいるほかの人にも伝えて、1つでもみんなが悩んでいることに対しての参考になればと思います。

五十嵐　ここ何年か言い続けてるけど、やっぱり察する力が大切だよね。ちょっとした異変も絶対見逃さないこと。昨日気付いてあげれば、やっておけばと悔やむ事例が本当にあるから。そんなときに必要な部署や人を素早くつなげ、適切な対処をすぐ取れるよう、知識をたくさん蓄えなければならないんです。「信頼される専門家集団」になるため、これからもっと力を入れていければいいな、と思います。

こども劇場課

時代変遷に応じて役割を工夫しながら子どもたちの成長に貢献

About us　日本で初めての公立人形劇専門劇場を発端に、心豊かな子どもたちの成長を後押し

「こぐま座」「やまびこ座」の市内2カ所の劇場を管理運営し、人形劇や児童劇、人形浄瑠璃などの公演事業に加え、各種講演会やワークショップ、市民劇団の育成、人形劇などに関する相談など、一年を通じてさまざまな事業を展開しています。

運営施設

札幌市こども人形劇場　こぐま座　昭和51年7月開館

札幌市中央区中島公園1番1号

公立として日本で初めて設けられた人形劇の専門劇場。市民のアマチュア劇団が中心となって、人形劇や紙芝居、腹話術などを上演しています。

札幌市こどもの劇場　やまびこ座　昭和63年8月開館

札幌市東区北27条東15丁目

優れた“子どものための舞台芸術”を市民に提供しようと、人形劇や児童劇などの児童文化を創作・学習・鑑賞できる、子どもたちのための劇場です。

Mission　これまで大切にしてきたこと

子ども文化の活性化に不可欠な人材育成を柱に歴史を紡ぐ

子どものための劇場が2か所も存在する札幌市は、全国でも稀有な環境にあるといえます。そうした恵まれた環境にある私たちには、その存在意義を札幌から全国に発信し、「やまびこ座」と「こぐま座」の運営方針やあり方を手本にリーダーシップを取っていく責任があると感じています。運営方針の柱は、劇場誕生以来、不変の「人を育てる」こと。札幌の子ども文化の活性化には、劇場を利用する劇団（劇人）の育成が必要で、“創造の場”としての機能が十分に果たされなければ実現していきません。劇場には劇を観る（鑑賞の場）機能に加え、「モノを創り出す機能」が備わることで人々が集い、創造的な空間となり得ます。自分の手を使い世界に一つしかないモノを創り出す作業は、自然と笑顔が生まれ、仲間意識を育て、相手を尊ぶ心を育みます。

夢と笑顔と人が集いあい劇場づくり

地域に開かれた親しみのある存在として、老若男女が集い、夢や笑顔を交わしながら創造的な取り組みができるよう支援し、市民や地域の活性化に貢献していきます。

子どもの文化の拠点として

全国でも稀有な子どもたちの公立文化施設として、舞台公演に限らず表現遊びや集団遊びを通じて、子ども文化を牽引、拡大する役割を担います。

札幌の子ども文化の新たな可能性

巨大人形劇や雪の舞台上演を通じて、劇団や専門スタッフ、関連機関との連携を強化しつつ先駆的な作品を創造し、札幌の文化芸術の普及と水準向上を牽引します。

Vision　中期目標

さまざまな関係者をつなぐネットワーク拠点、子ども文化のセンター拠点として

全国でも珍しい公立の文化施設、専門劇場として、我々には、さまざまな文化団体や劇団、市民をつなぐネットワーク拠点となる使命があると考えています。そのために、人形劇や児童劇をはじめとする良質な文化活動の発信はもちろん、文化活動を支える人材育成事業の継続や子どもの文化に関わる相談窓口機能、講師派遣といった活動を積極的に進めていきます。

さらに、未来ある子どもたちの夢と可能性を拡げていくために、「文化芸術が栄えること＝札幌の子どもたちのこころの豊かさが育まれ、将来へ受け継がれていくこと」との考えに基づき、子ども文化のセンター的機能を有する拠点を目指します。将来を見据えた人材育成事業の展開や文化体験機会の創出を続けるとともに、関わる人々の多様なニーズに対応できるよう、職員一人ひとりの意識、スキルアップに努めていきます。

Value　中期目標達成に向けた行動指針

未来ある子どもたちの夢と可能性を拡げていく使命感

人材育成拠点として機能するための専門職の確立と育成

人形劇の上演や子どもたちへの育成指導を担う専門家の育成は、札幌の文化芸術レベルを押し上げるだけではなく、劇場とともに札幌の子ども文化を創り上げていくキーマンとしての役割も大きく期待できます。

中島児童会館を含めた3施設の相互役割の明確化と連携強化

各施設の特性を活かし、子どもの健全育成を踏まえた人材育成事業や全市的イベントの拡充など、特色ある事業内容を全国に向けて情報発信していきます。

時代のニーズに合わせた継続的かつ発展的な事業を展開

新MICE（ビジネスイベント）施設建設計画のある中島公園周辺地域における、さまざまな環境変化への対応を念頭に、札幌の観光振興の一翼を担うべく、国際交流なども視野に入れた事業展開についても積極的に取り組みます。

課内プロジェクトへの取り組み

あらゆる市民ニーズに対応するためには、職員一人ひとりの業務の質の向上が必要です。技術を教えていくだけでなく、相手を考え、寄り添っていく“姿勢”を持ち、先見的な方向性を打ち出せる人材の育成を目指します。

設立40周年
記念座談会
～ VISION with Next Generation ～

こども劇場課

最終目標は、札幌＝人形劇の街

INTERLOCUTOR

課長 こども劇場館長
矢吹 英孝
Yabuki Hidetaka

×

指導員 やまびこ座
大西 永里子
Onishi Eriko

指導員 こぐま座
須摩 康平
Suma Kouhei

進行 係長 山田 啓貴 Yamada Hirotaka

担当しているからこそ分かる、こども劇場課のこと。
部門長と若手職員、それぞれの思いを語り合ってもらいました。

受け継がれる「人を育てる」ということ

こぐま座とやまびこ座ができるまでの経緯を教えてください。

矢吹　中島児童会館は、戦後の子どもたちに豊かな文化を経験させたいという思いから作られました。その中で人形劇も一つのジャンルとして特化していき、こぐま座ができました。こぐま座は今年で44年、やまびこ座は34年になります。

こども劇場課の使命とするところは何でしょう？

矢吹　全国的、世界的に見ても、子どもに特化した専門の子ども劇場や人形劇場はとても稀です。子どものお芝居だけを年間に計400回以上やっているところはほぼありません。今もこぐま座は人形劇専門、毎週土日に公演。これは自慢していいし残していくべきところです。

なぜそんなことが可能だったのでしょう？

矢吹　やはり「地元で人を育てる」ということです。人材育成はこれまでの運営の根幹をなすもの。ただ東京から劇団を呼んで公演してもらうだけなら続かなかったでしょう。44、5年も前にこの方法を始めたのはすごいことです。

須摩　私は小さい頃からやってるから当たり前のように思っていました。

矢吹　そうした歴史的背景が「未来ある子どもたちの夢をはぐくむ劇場づくり」という基本方針に集約されています。

やまびこ座やこぐま座にはいわゆる「座付きの劇団」はいないんですか？

矢吹　初心者や市民団体を育成し、ここで公演してもらうシステムをずっと取ってきました。いわば市民劇団がうちの座付き劇団です。毎年講習会を開き、人形劇の技術指導はもちろんグループワークも行います。公演以外に劇場の事業にも携わってもらい、一緒に劇場を作り上げるのが特徴です。

大西　設立当初と今では、活動している人たちも様変わりしたみたいですね。

矢吹　最初は仕事終わりの社会人が多かったかな。次に学生のサークル。そのうちお母さんたちが主力になってきた。昼間の講座に4、50人は参加していたけど、社会や経済の変化でお母さんたちが忙しくなり、今では十数人程度。「その次」の対象として、子どもたちを札幌の文化を担う大人へと育てていくことになりました。

須摩　見る方の年齢もどんどん下がっていますよね。その子らに分かりやすく作ろうとすると、内容との兼ね合いが難しいです。

矢吹　もちろん大人の鑑賞に堪え得る作品もあるけどね。今は演劇系の人たちなどが人形劇に興味を持ってくれるようになってきた。それがこぐま座でやっている巨大人形劇やプロデュース人形劇にもつながっているんだよね。

大西　時代の変化に対応して我々もいろいろ変えていかなきゃいけない部分もあるけど、守るべき伝統もあるはずですよね。

矢吹　一番残すべきは工作室かな。モノづくりは人づくりにつながる。劇場にモノを作る場所があるというのはすごく重要だから、工作室の活用は常に考えていきたい。

須摩　それって時間はかかりますよね。

矢吹　うちは効率化や合理的といったものからはかけ離れているよね。でも、モノづくりも人づくりも本来時間がかかるものだから、世の中のスピードが速くなっても、うちはそこを守って丁寧に作り続けたいな。面倒だし離れていく若い人もいるけど、残ってくれる人もいる。そういう人たちを引き込み、増やしていくことが必要だね。

須摩　私は自分と同世代の若い人が作る劇団がもっとあればいいなと思っています。刺激になるし、相手よりいいものを作ろうという気持ちが生まれるんじゃないかと。

矢吹　子どもの頃からやっている人がどうやったら大人になっても続けるようになるか。そこは課題だね。

大西　この前のあおぞらキッズシアターで、3年生の時に人形劇をやったという地元出身の方が、久々の帰省で観に来ていたんですよ。経験がなければそういうきっかけもなかったわけですよね。

いろいろ試して、可能性を模索する

課のビジョンを考えていくにあたってどんな思いを込められましたか？

矢吹　設立当時の思いや背景は忘れず、良いところはきちんと引き継ぐことです。子どもたちを取り巻く状況は変化していますから、うちが創る文化や芸術をどうしたら役立てられるか、時代ごとの取り組みを振り返りながら模索しなきゃならない。

人を育てる中での、劇場職員の存在についてお話しいただきたいのですが。

矢吹　劇場課も活動協会の一部署なので人事異動もありますが、常に何人かは人形劇の指導ができる専門家を置いておかなければなりません。業務はほかもたくさんあるので、それらとバランスを取る必要はありますが、やっぱり自分で実際にやってみないと理解できないことはあります。

須摩　昨日、こども人形劇団の活動を担当して、自分がやってた頃とは子どもたちの感じ方が違うのかなと思いました。

矢吹　小学生当時の須摩君がテレビの取材で、「人形浄瑠璃はかっこいい」と言っていたのは今でも印象に残っているよ。この年でかっこいいって珍しいな、こいつ変な奴だなって思った（笑）。そういう感覚を大事にしないとね。子どもの感じ方こそ時代に沿っているわけだから。

まさに自分が経験したからこそ気付けたり、もっと広げられたりするんですね。

大西　観る人の年齢が下がっているというさっきの話は私も思い当たる節があります。来ているお客さんの顔を想像して作るからどうしても小さい子向けの話になりがちです。でも多様な作品があって、どれに興味を示すかは人それぞれかもしれませんね。

矢吹　そう、年間の客層が全部同じである必要はないんだよ。浄瑠璃をやると年配の方がたくさん来てくれるし、幼児向けの分かりやすいものや、小学生向けにもう少し内容が濃いものがあってもいい。本当は創り手側がいろいろチャレンジしてほしいんだよね。

すそ野を広げる、きっかけづくり

最近、児童会館の人形劇クラブが活発に活動している印象がありますね。

矢吹　人形劇クラブは、初めて6年くらいかな？その前に元町や新琴似でいくつかやっていて、子どもたちや担当の先生たちの反応がとても良かったので、ほかのところでもできたらいいね、となったんだよね。劇場になかなか来られない子たちもいるので、すそ野を広げられるんじゃないかと。

大西　まだ劇場の存在を知らない人も多いですよね。児童会館の職員も劇場に来たことない人が多いかもしれません。

須摩　同期からもこぐま座ってどんなところか聞かれますし、中島児童会館とつながっていることを知らない人も多いですね。

人形劇クラブも7館もあると人手が足りないんじゃないですか？

矢吹　それも課題の一つですね。単純に人を増やせばいいという問題でもないけど、何人か劇団さんやボランティアの人がいると助かります。でも主導はやっぱりうちなので、誰か一人に任せるのではなく、職員全体のレベルも上げていかなければならない。

職員自身のレベルが上がれば、その人が異動しても同じことができますね。

矢吹　せっかく札幌には児童会館や劇場がこんなにあるんだから、あちこちで自主的にそうしたことが行われればおもしろいですよね。

須摩　レベルアップですね…。ここ2、3年で、巨大人形劇の中で演劇の人たちと共演する機会が増えてきました。みんなその世界では知らない人がいないくらいの有名な人たちなので、そこに関われることはものすごい経験値になります。

矢吹　ありがたいよね。その相乗効果でさらにおもしろくなるし。

学校の授業の中でお芝居を観る機会はあるのでしょうか？

須摩　小学校や中学校には芸術鑑賞教室みたいなものがありますよね。演劇の劇団が来てやってくれることが多いです。また学習発表会の最後に歌を披露するために、劇団四季を観に行ったりします。私は芸術鑑賞教室で人形劇もできたらいいと思っています。そこで初めて人形劇を観て興味を持ち、やってみようと思ってくれる子も出てくるかもしれません。そのためには質の高い作品を出す必要があります。

矢吹　なるほど、小学校からKitaraに行ったり、hitaruで劇団四季を観たりもするけど、学習発表会のためだったのか。小学生がこぐま座かやまびこ座に行く仕組みも作れたらいいね。

大西　そうですね。最初は無理矢理でも、それをきっかけにして来てもらわないことには始まらない。

矢吹　須摩君が言うように、見合った質の作品を見せていくことも必要だね。

大西　人形劇を観て、感動してもらえるのが一番いいけど、街探検などで建物の中を見てもらうだけでもいいと思います。展示している人形も、いつも画面ばかり見てる子どもたちにとっては目新しかったりしますからね。

矢吹　気軽に来てもらうだけでもいいかもね。少し遠くから来た小学校2年生の子たちが、たまたま劇団さんが稽古してたところを見て大喜びして、その後また何人か遊びに来ました。

大西　もう少し校区探検で来てくれたらと思います。館長は有名だから、昨日も館長に会いに来ていた子たちがいました。そういう関係性も一つの手かもしれない。

矢吹　地域との結びつきも大切だね。毎年夏に、やまびこ座でお祭りをやるのも関わり方の一つ。それも普通のお祭りではなく、劇場だからこそできるものを打ち出すことが大事かな。

須摩　夏祭りは、子どものために何かしてあげようと思ってくれる大人がこんなにいるのかと感心します。この30年で培ってきたんでしょうね。

大西　みんなどこで聞いたのか、子どもがたくさん来ますよね。でも劇は観に来ない。夏祭りをやらなかったら忘れられてしまうかも。

大西さんは、劇場に異動してくる前は児童会館で人形劇クラブ担当だったそうですが、その時の子どもたちの様子はどんな感じでしたか？

大西　やりたくても親にやらせてもらえない子もいます。でもやれば楽しさが分かって長く続けてくれるし、一度経験している子は次の年も頑張ります。自分で作った人形には愛着が湧くようで、こちらもうれしいです。始めは恥ずかしがっていた子も、ちゃんと演じられたときは自分の可能性に気付くんですよね。親も自分の子どもの晴れ舞台は絶対カメラを持って観に来ます。それをきっかけに初めてやまびこ座に来る人もいるので、集客だけでなく周知にもつながっています。

ここがまさに拠点になっているというわけですね。

矢吹　目指すのは「アートの街・札幌」。我々も「人形劇といえば札幌」というイメージを広めていかなきゃ。そのためには守るべき「うちらしさ」と、新しくすべき部分とのバランスが大切です。その役割を担っている若い人たちが、おもしろがって取り組むことが重要かな。

須摩　今回、この座談会に参加してみて、改めて人形劇や劇場の楽しさ、ワクワクを、これからも次の世代に伝えていけたらいいなと思いました。

大西　「未来ビジョン」って、立てるのは簡単ですよね。でも年月がかかる人材育成もそうですが、今やっていることが目に見える結果となって実感できるようになるまでには、すごく時間がかかると思います。

矢吹　だからこそ、今やっていることを大事にしていくといいんじゃないかな。自分も今それができているかどうか分からないけど、積み重ねていくしかないし、こうやって仕事で子どもたちと関われるのは幸せなことだと思った方がいいよね。

コレクティブインパクトで
“さっぽろの若者支援の未来”を切り拓く

About us　市内5カ所の施設運営を通して幅広く活動

若者の自立支援や相互交流・社会参加へのきっかけを目的に、市内5カ所で運営する札幌市若者支援施設（愛称：Youth+/ユースプラス）でさまざまな取り組みを実施しています。とりわけ近年においては、学校や家庭以外の「第3の居場所」の重要性がクローズアップされていることから、市内・近郊の高校や養護施設、児童相談所、NPO、市民の方々と積極的に協働し、支援の輪の拡大に努めています。《参照 https://www.sapporo-youth.jp/》

運営施設

Youth+ センター 中央区南1条東2丁目大通バスセンタービル2号館1階
Youth+ ポプラ 白石区東札幌2条6丁目5-1-304　**Youth+ アカシア** 東区北22条東1丁目
Youth+ 豊平 豊平区豊平8条11丁目3-5　**Youth+ 宮の沢** 西区宮の沢1条1丁目1-10

Mission　これまで大切にしてきたこと

社会での存在意識を若者に感じてもらえるきっかけづくりを原点に活動

イベントやスポーツ、ワークショップなど、若者の「やりたい」気持ちを後押しするため、私たちはさまざまな取り組みを行っていますが、いずれも「一人ひとりの若者が『自分も社会を形成する一員である』と意識するきっかけづくり」につながることを根幹としています。特に、若者の自立支援や孤立、子どもの貧困など、若者のニーズや社会情勢に応じた事業をスピーディーに実施することを心がけています。

Vision　中期目標

関係機関がそれぞれの強みを出し合うコレクティブ（集合的）な取り組みを模索

複雑化、多様化する社会情勢の動向は、若者や子どもたちを取り巻く環境にも大きな変化を与えています。そうした変化に柔軟に対応し、より効果的な課題解決に結びつけるためには、私たちだけではなく行政や企業、NPO、他団体がそれぞれの強みを出し合い、コレクティブ（集合的）な取り組みを進めることが、社会にインパクトを与えられる近道だと考えています。
若者支援に求められる要素は、時代の変遷や社会情勢によって大きく変化していきます。若者を取り巻く社会動向やニーズを的確に把握するために、国内外の大学や研究機関、実践団体との協働研究にはこれまで以上に深く関わっていく計画です。
さらに、実践面でのノウハウ蓄積のためには国レベルで取り組む先進モデル事業の受託に積極的に取り組み、これまでの知見をさらに深めるとともに、協働型の事業展開を図っていくことで、私たちならではの強み、特徴の強化につなげていく考えです。

Value　中期目標達成に向けた行動指針

周囲との連携を強化しながら、若者支援分野でのリーダー的役割を担う

社会情勢は今後ますます複雑化し、私たちに求められる役割もますます多様化していくと考えられます。そのような変革の時代に対して、国レベルの政策動向や最新の調査・研究にも常に目を向け取り入れていくことで、札幌市の若者支援分野では先駆的、中核的なリーダーとしての役割を担えるよう尽力していきます。
もちろん、私たちでは力の及ばない分野もあるため、他団体や市民との「共に活動（連携・協働）する姿勢」を大切にし、若者や市民にとって身近な存在であり続ける努力も続けます。
地域活動等の事業で、地域での協働型若者支援拠点の設置数を延べ100カ所、施設運営等事業で、協働事業パートナーの獲得を個人、団体合わせて延べ100件まで伸ばしていくことを目標としています。
また、私たちの事業は、施設そのものよりも関わる人々の重要性が圧倒的に高いと考えています。そのため、新たな分野に挑戦する事業、周囲との連携・拡大する事業、市民に伝え定着を広げる事業を柱にバランス良く取り組みながら、挑戦できる人材、折衝できる人材、発信できる人材の育成にも取り組んでいきます。

設立40周年
記念座談会
～ VISION with Next Generation ～

若者支援事業課

若者たちのサードプレイスとして

INTERLOCUTOR

課長
松田 考
Matsuda Kou

×

指導員 若者支援総合センター
中谷 衣里
Nakaya Eri

指導員 豊平若者活動センター
橋本 悠貴
Hashimoto Haruki

指導員 アカシア若者活動センター
二俣 翔也
Futamata Syouya

―― 進行 係長 山名 徹 Yamana Toru

担当しているからこそ分かる、若者支援事業課のこと。
部門長と若手職員、それぞれの思いを語り合ってもらいました。

本当に必要なところへ支援を届ける

―― 若者支援センターの前身は勤労青少年ホームと聞きましたが。

松田 勤労青少年ホームは40年続いてきた行政の施策で、私も10年携わりました。最後の方は「もういらない」「時代遅れ」と言われましたが、まだ新しい可能性を秘めていたので、必要だと言ってもらえるにはどうすればいいか必死で試行錯誤しました。

―― 若者支援は年齢幅が広いですが、その中でどんなアプローチをするのでしょうか？

二俣 若者支援の対象年齢は34歳までですが、高校生・大学生世代がメインターゲットで、事業によっては中学生も対象に据えているように思えます。こうした若年化は社会的背景の影響などもあるのかな、と。

松田 二俣君はなぜ若年化が起こっていると思う？（笑）

二俣 やっぱり子どもの貧困など社会的にスポットが向いていること、言うなれば関わりやすさにあるのかな、と。児童会館や学校と連携ができているので可視化されていることもあるんじゃないでしょうか。

松田 その頃はまだ貧困問題はフォーカスされてなかったかな。勤労青少年ホームは文字どおり働いている青少年が対象で、設置時は15歳～19歳までだったのが、進学率上昇に伴って就職年齢がどんどん上がった結果、最後の方は20代後半の人たちの、単なる娯楽施設と批判されるようになった。札幌市が若者支援基本構想を作って若者支援施設に生まれ変わったのを機に、私たちもヨーロッパの若者支援を勉強したところ、10代後半を対象としたユースワークという概念に行きついたわけ。余談だけど、最近になって活動協会の前身が「札幌ユースワーク協会」だと知って、かなり驚いたよ。

二俣 諸先輩方は先を見通していたんですね。

松田 そう、原点回帰だね。10代の勤労青少年にとっての夜の時間はまさしく「余暇」だけど、20代後半の人にとっては、その時間は「娯楽」でしかないわけ。一部の若者の趣味を充実させるために税金を使う必要があるのか、という批判に対して、現場でも明確に反論できなかった。

社会の一員であるという「気付き」

―― 若者支援事業課のミッションについてお聞きしたいのですが。

二俣 児童会館から異動した当時は自立支援の印象が強かったんですが、実際に若者たちと関わるうちに、彼らが社会的に自立していく過程において、自分を見つめ直す余暇の時間が重要だと感じました。自立支援だけじゃなくそういう時間に対するサポートをしているんだよってところを、松田課長はどうやったら伝えていけると思いますか？

松田 全国のユースワーカーも、そこをどう言語化するのか悩んでいるのが現状。ヨーロッパと違って、日本の若者は中学→高校→大学→就職と隙間なく移行していくから、レールに乗っているうちは余暇の時間が少ないよね。それはつまりユースワークの入り込む余地が少ないということなので、どうしても不登校やひきこもりなど「レールから外れた人」に対象が偏りがちになる。でも私たちの目指すユースワークは、困難を抱えた若者への支援だけじゃないので、余暇という言葉のイメージから変えていかないと。二俣君、余暇を別の言葉に言い換えてくれないかな（笑）

二俣 余暇ですか。難しいですね。うーん、「自分らしくあれる時間」ですかね。

松田 次の指定管理の提案書にそう書くよ。相当イマイチだけど（笑）。それでいこう！

―― 「社会の一員であるという気付きを育む」というところを、どのように目指していくのでしょう？

中谷　今、実際に事業をやっていて、社会参加促進事業の担当をさせていただいているんですけど、若者と話したり、若者の参加数を見ても、社会の一員であるという自覚があまりない人がすごく多いなと感じています。松田さんが20年間この仕事に関わってきた中で、その要因はどこにあると考えてますか？

松田　若者に社会の一員であることを気付いてもらおうとしたら、まずは小さいグループの活動を通じて、メンバーの一人なんだっていうのを感じてもらうのがいい。そうして小っちゃい体験の輪を続けて、輪を大きくしていく。そこにつながるフィードバックが十分あれば、メンバーシップ意識は持てるし、シティズンシップへと転化もできる。どこまで我々が担うべきなのかはいつも悩みますが、少なくとも原体験は提供できていると思います。「社会の一員であるという気づきを育む」というのは究極のゴールだよね。

中谷　思い返せば私も大学時代、家にも学校にも居場所がなく、そのどちらでもないサードプレイスで出会った大人がきっかけで「自分の人生は自分で選んで作っていっていいんだ」と気付きました。その原体験が今の力になっているのかも。今は若い人たちにもそういう経験をしてほしいという気持ちでユースワークをしています。

松田　私が20年かけて出会えた境地に最初に出会えたのは幸福なことだと思う。次のステージを作っていってくれることを期待しています。

憧れられる「人づくり」へ

若者支援事業課にとっての「人材育成」についてお聞かせください。

松田　自分自身のことを振り返ってみても、今のうちの課を見ても、活動協会に染まっていない若い職員の「無邪気な違和感」にこそ真実があると思う。個人としても課としてもそこが成長のチャンスなので、遠慮なくモノを言える空気さえ作っておけば、あとは皆が勝手に育ってくれる。
個人的には「子どもたちの憧れる職業アンケート」にユースワーカーが選ばれるのが夢なので、そのためにはワークライフバランス、特に女性が安心して働き続けられる環境を作りたい。当課には私よりも女性リーダーの方がずっとふさわしいと本気で思ってます。

橋本　Youth+は5館あって、それぞれに特色がありますが、その中で働くスタッフやユースワーカーはそれぞれどういう役割でいるべきなんでしょう。館それぞれの特色を生かしていくにはどんな方法があるのかなと。課長としては今後どの部分を求めているのか個人的にも気になりました。

松田　建物の機能、立地する地域、そこにいる人、という3つの要素があるとしたら、圧倒的に人が鍵を握ると思うよ。本州出身の私から見れば、札幌は地域ごとの特色の少ない街だし。そのときどきの職員と利用者と地域の人とが、しっかりと混じり合って生まれた色が、その館の特色になっていくのがいいんじゃないかな。

橋本　もうひとつ。現在アウトリーチ事業としてさまざまな活動をしていますが、キッチンカーを活用した事業を担当していて、まず地域での拠点ごとの理解や協力がないと、1人や1つの団体だけではどうしてもカバーしきれないと感じています。アウトリーチ事業のゴールをどこに置いていて、どうありたいかといった理想像が、松田課長の中でどんな風にできているのかお聞きしたいです。

松田　アウトリーチをする理由は、単純に私たちユースワーカーの持っているポテンシャルが、施設のキャパシティを上回っているから。施設を飛び出して、あちこちで活動している市民の皆さんと協働して、花を咲かせたあとに戻ってくる拠点がYouth+。我々の雇用確保の面からも、若者の活動場所という意味でも、Youth+が存在する意味はとても大きいけど、ユースワークの舞台はあくまで札幌市全域でありたい。アウトリーチはあくまでそのための手段なので、アウトリーチそのものにゴールは無いかな。

「地域とともに」で、良い循環を

中谷　「子ども・若者の居場所 いとこんち」はどういう経緯でできたんですか？

松田　国や自治体の施策動向、地域のニーズ、他課や他団体との連携、私たちの取り組みの進化、あらゆるベクトルが向かう先に、いとこんちという発想が自然と浮かび上がってきたというのが正直な感覚。あと、活動協会は、遊びや野外活動、あるいは働くことも含めて「体験を通じて得られる学びや育ち」を提供するプロ集団なわけだけど、今の社会でどんな体験活動が求められているかを考えたときに、安心安全な家庭生活の体験を必要としている子ども・若者がとても多いんじゃないかと。実際にいとこんちを始めてみて、活動協会の職員が結集して「本気のおままごと」をやれば、育てられない子ども・若者なんていないんじゃないか、って今は思ってるよ。
その先には、活動協会だけじゃなくて、さまざまな関係団体や一般の市民の方々が地域で運営する「いとこんち」を100カ所くらい作りたい。「地域の子どもを地域のみんなで育てる」というフレーズはよく聞くけれど、そのためには子どもと地域を繋ぐコーディネーターの存在が不可欠なわけで、じゃあ誰がその役割を担うのかと考えたときに「札幌には活動協会があるじゃないか」と言われるようになりたい。そのためのノウハウがいとこんちには詰まってるよ。

中谷　すごく日本的かもしれないですけど、私は家族ってそれぞれ個として独立していなければならないような気がしています。その中で、社会から求められている家族というものにどうしても合致することができなかった、典型から外れてしまった人たちにとって、いとこんちの存在は安心できる。そんな場所が市内に100個できたら素敵だなと思いました。

松田　まさにそうだね。「日本的な理想の家族モデル」と現実とのギャップがどれだけ多くの子どもや親、特に女性を苦しめているか。そのギャップを家族構成員の努力で埋めるのではなく、社会全体で補うのが、いとこんちの発想。

課長から見て、若い職員に対して望むことは何ですか？

松田　人材育成でも話したように、新鮮な視点で違和感に気付いてもらうことが一番。違和感は抱えたままだと不満になるけど、きちんと表明すれば意見になるので、例えば事業計画を立てる話し合いなどに、課の一員として意思決定に参加してほしい。まさにユースワーカーが若者に呼びかけているのと同じことを若い職員に期待します。

中谷　社会の一員として、「参加」ではなく「参画」までを経験してもらうということですかね。

松田　ただ、我々がちゃんと参画までを意識しないとたどり着かないから、ミッションにはやっぱりそこまで含めています。可能性を諦めず、理想を捨てず、目標は大きく取った方がいいだろうね。参画までたどり着いた事例もなくはないけど、行政はどうしたって困っている人たちが救われたエピソードの方を喜ぶから、我々がきちんと発信しなければなりません。

この先10年の展望など、見えているものがあればお話しください。

松田　いつの時代も、トレンドを作るのは若者。幸いにも私たちは若者の近くにいる存在なので、彼ら彼女らをしっかり支え続けているうちに、10年先の未来は自ずと見えてくるんじゃないかな。そういう意味では、言葉としては変だけど私たちの役割は「若い世代が社会を作ることのできる社会を作る」ということに尽きるよね。ただし、Youth+で出会う若者の声を聴いているだけでは不十分だということは、当課の職員なら全員分かっていると思う。研究者が出すマクロデータや国の動向などを俯瞰して学ぶことも大切だし、まだ出会えていない若者の声を聴くためのアウトリーチもまだまだ発展途上です。あとは、やはり10年先の展望を考えるうえで、さまざまな政策や計画を作る立場の行政との連携は欠かせない。私たちの場合、現場でニーズをいち早く掴み、行政に伝えることができるのは最大の強みであり、責任だと思う。札幌の若者や、若者と関わる市民の皆さんの声をしっかりと社会や行政に伝えていこう。困難な状況にある子ども・若者のSOSを取りこぼさない聴診器の役割から、若い世代の意見を社会に発信する拡声器の役割まで。この先10年も20年も、その役割を市民から託される活動協会でありたいよな。

二俣　今回こういう機会を設けてもらって、これから若者にどういうことができるだろうかと考えると、改めて早く若者と話したり一緒に動いたりしたいな、と強く思いました。

野外活動課

自然体験活動を通じて
豊かな人間性を育むお手伝い

About us　市内3つの屋外教育施設での活動を通じ、豊かな人間性を育む活動に取り組んでいます

野外教育施設「青少年山の家」「定山渓自然の村」「北方自然教育園」の管理、利用者対応や、スキーキャンプや体験農場、石窯料理体験などに取り組み、豊かな自然の中で家族や集団での活動機会を創出し、自然体験活動を通じて楽しく学びながら豊かな人間性を育むサポート活動を行っています。

運営施設

札幌市青少年山の家　平成元年9月開設
札幌市南区滝野247 国営滝野すずらん丘陵公園内

自然環境での宿泊を伴う集団生活や野外活動などの体験を通じ、創造性と豊かな心を育み、青少年の健全育成につながる活動に取り組んでいます。

札幌市定山渓自然の村　平成10年6月開設
札幌市南区定山渓 豊平峡ダム下流国有林野

家族や小グループで利用できる「市民開放型施設」、四季折々で自然体験や野外活動を楽しめる「自然体験型生涯学習施設」を目指しています。

札幌市北方自然教育園　昭和51年6月開設
札幌市南区白川1814

体験農場と自然観察林を併せ持ち、自然環境での体験的・創造的な学習の場の提供と市民の教育及び文化の向上を図ることを目的としています。

Mission　これまで大切にしてきたこと

自然体験活動を通じ、豊かな社会と未来を創造する人づくりを目指す

当財団の前々身、札幌ユース・ワーカー協会が昭和48年に発足した当初から、グループ活動やレクリエーション活動における指導者の養成に不可欠な要素として、野外活動を重視してきました。その取り組みが、児童・青少年の健全育成の機運が高まりつつあった当時の社会ニーズをけん引し、信頼を得られたため、発足からわずか4年後に滝野自然学園運営補助業務を受託し、当財団の前身である札幌グループ・ワーク協会が設立されたのです。
野外活動課は今後も財団事業の原点と密接に結びつく最古参の部門として、「変わらない」信念を持ち続ける一方、時代のニーズに応え続けるために「変わっていくこと」を大切にし、野外教育を推進していきます。

Vision　中期目標

野外教育や自然体験活動プログラムに磨きをかけ、施設の存在意義と利用者向上を目指す

自然体験活動を効果的に用いながら、未来の社会を支える若い世代の育成姿勢と方向性を整理し、3つのチームとしてビジョンを定めました。

1. 自然から学び、人から学ぶチーム
2. 社会的課題に目を向け解決の手立てを考えるチーム
3. 地域社会に信頼され、貢献できるチーム

野外教育や自然体験活動分野の情報、ノウハウをさらに習得、蓄積し、フィールド活用に特化した施設ならではの独自の存在感と提案能力を向上していきます。さらに、多様なニーズへの受け入れ機会を拡大するとともに、指導者の養成にも取り組み、野外教育活動の振興を目指します。そのためには、当財団内外との情報交換、周辺施設との関係強化を図り、信頼感の向上にも努めます。
自然環境とこれまでの歴史を活用し、知恵や生きる力の礎となる「自然体験」プログラムを通して、好奇心や創造性、探求心あふれる将来性豊かな人づくりに取り組みます。
すべてのビジョンにおいて、スタッフ個々人で活動するだけでなく、組織全体で取り組む姿勢を常に意識し、私たちの強みをさらに発揮できるよう、チーム力で取り組んでいくスタイルを目標とします。

Value　中期目標達成に向けた行動指針

3施設の情報、知見を共有し、情報発信の強化により利用者増加と満足度の向上を図る

これまで大切にしてきたこと、中期目標を共有し、志を同じくする部門内の仲間とは、互いに最大の情報源として知見を高め合い、施設利用支援の充実を図ります。また、交流の機会を積極的に設け、相互の支援体制の充実と効率的な施設運営を目指した共同活動を心がけていきます。さらに、他部門がもつ幅広いネットワークを活用しながら、全ての市民を対象とした初心者向けの施設利用の促進事業に取り組むとともに、共同で社会課題の解決につながる事業推進を図ることを目的に、情報交換の機会を積極的に活用していきます。冬季の閑散期の利用促進につなげるには、新たな利用者層の獲得が必要不可欠です。これまで以上に外部への広報活動と、保育園や幼稚園、小中学校に加え、学生団体や企業などとの関係性を積極的に強化し、施設の存在意義拡大につながる情報収集に努めると同時に、新たなニーズに応えられるプログラムの開発や提案をしながら、私たちが取り組む事業や活動に対する理解の促進を目指していきます。

設立40周年
記念座談会
～ VISION with Next Generation ～

野外活動課

チームとして価値を高め合う

INTERLOCUTOR

部 長
岡本 峰子
Okamoto Mineko

×

主任指導員 定山渓自然の村
木下 隼
Kinoshita Hayato

指導員 定山渓自然の村
鈴木 卓也
Suzuki Takuya

指導員 青少年山の家
竹内 麻衣
Takeuchi Mai

指導員 青少年山の家
木村 葵
Kimura Aoi

進行 係長 竹澤 幸洋 Takezawa Yukihiro

担当しているからこそ分かる、野外活動課のこと。
部門長と若手職員、それぞれの思いを語ってもらいました。

豊かさの実現に向けて仲間と協力し合う

活動協会40周年にあたり、改めて野外活動課の歩みをお話しください。

岡本　1980年、札幌市からの委託を受けて滝野自然学園で様々なキャンプをスタートさせたのが野外活動の始まりです。協会創成期にいらした佐々木順さんや相馬宏哉さん、大築覚さんらの指導のもと、「みどりと遊ぼう自然学園」とか「じゃがいもキャンプ」などそういった独自の事業をやっていました。現在、事業は企画事業課に担当が移りましたが、1998年からは定山渓自然の村、2010年からは青少年山の家と北方自然教育園が加わり、これら3施設の管理運営を行い、野外活動を通じて人が成長できる場を提供しています。

野外活動課のミッションはどういったことになりますか？

竹内　ミッションは「自然体験活動を通して、豊かな社会と未来を創造する人づくりを目指す」です。

岡本　自然という、家の中でも学校の中でもない非日常の空間に触れ、たとえば森林から何か発せられるものを受け取るとリフレッシュできますよね。一方、大雨や強風などの悪天候、北海道だと冬の寒さなど厳しい状況にさらされることもあります。そんな時も、仲間と一緒なら互いに知恵を出し合い心地よく過ごせるはず。自分一人ではできないけど、みんなと協力することで、自然の厳しさも楽しく乗り越えられる場面があると思います。ミッションに掲げる豊かな社会というのは物質的な意味ではなく、心身ともに健康であるとか、人の多様性を認められる社会であるとか、新しいことに挑戦しようという機運や意欲が持てる状態を指します。その未来を作る人は誰かと考えたとき、私にとっての未来は若手のみなさんであり、さらに子どもの世代かもしれない。その世代の方々がさらに“豊かな未来”を創造できるよう考える力を持った人を育てていきたいと常に考えています。

「チーム」のあるべき姿を考える

野外活動課の持つビジョンは3つあると伺いましたが。

木村　はい。1つ目は「自然から学び、人から学ぶチーム」、2つ目は、「社会的課題に目を向け解決の手立てを考えるチーム」、3つ目が「地域社会に信頼され、貢献できるチーム」です。

なるほど。それぞれのビジョンについて、こうありたいという姿について部長にお聞きします。

岡本　1つ目ですが、自然の恩恵や厳しさから私たちが学ぶことは多く、それによりどうやって人と協力して生きていくかを考えていく必要があります。また、私たちが教えてあげるのではなく、子どもたちやボランティアさん、外部の異なる職業の方、一緒に関わってくださる方々と互いに学び合うべきなのではないかという話はビジョン会議でも出ました。

2つ目のビジョンはいかがですか？

岡本　私たちは施設運営や事業を通して様々な方々と関わり、地域の中から世の中の困りごとを拾い集め、それを社会の課題として分かりやすく言葉や形にして提示してきました。さらに様々な活動団体や行政と課題を共有して、新たな市民サービスにつながってきたものもあります。そのために、社会が必要とするものをキャッチできるように、私たちはアンテナを張っていく姿勢が必要です。そして一人ひとりが課題を私ごととして真剣に取り組み、どうやったら解決できるか知恵を絞っていくのが私たちの「ありたい姿」であり、理想形ではないかと思います。

3つ目のビジョンにある「地域」とはどの辺を意識していますか？

岡本　一口に地域といってもいろいろあります。札幌市なのか、北海道なのか、日本なのか、それとも町内会か。それは関わる対象によってさまざまだと思いますが、どこであっても「気軽に話ができた」とか「相談したらアクションにつながった」「一緒に考えましょうと言ってくれた」という風に、地域から頼りにされることが活動協会の存在意義です。ところで、なぜ3つとも「チーム」と入っていると思いますか？

木村　人と人がつながっていないと乗り越えていけないというか…。

木下　個の力ではなくて、3施設の考えを持ち合わせて解決に導くというところでチームなんじゃないですか？

鈴木　一人で考えるには限界があるから、全員で考えることでさらに良いものを目指すというところでの共有、チーム？

岡本　その通りです。やはり一人でできることには限りがあります。仲間で役割を分担し、知恵を出し合った方がより多くのアイデアが生まれ、前に進みます。人生にはいろいろな波があって、その波は人によって異なります。たとえば体調が良いときもあればそうじゃないときもあるし、子育て期があれば、親の支援が必要な時期もある。そういう人たちが集まって一緒のチームを作っている。例えば、すごく能力のある人が一人だけが先頭を切って、ほかのメンバーはただついていくだけだとすると、その人が体調を崩したりして続けられなくなった時点でミッションへの歩みが止まってしまう。世の中の課題は待ったなしです。歩みを止めないためにも、さまざまな人生の状況にある人たちと一緒に、チームで立ち向かうことがポイントだと思っています。

取り組みの中で感じた野外活動の価値

昨年3つの施設でそれぞれ企画力の向上に取り組んだと聞きましたが、やってみてどうでしたか？

竹内　3施設のメンバーが何か一つのものを作り上げるのは初めての体験だったので、始めは不安が大きかったのを覚えています。実際に作り上げた後は、ここまでできるんだという自信と達成感、メンバーへの信頼感が新たに生まれました。

木村　私も、3施設が連携することでおもしろい事業も考えられると分かりました。今回は課題を抱える子が対象の企画を考えたので、こども事業課とも連携できれば、より多くの人に自然体験を提供できるのでは、と可能性の広がりを感じました。

木下　垣根を乗り越えて話ができたことでグループの絆が深まったし、他施設のことを知る貴重な体験でした。

竹内　「人と自然をつなぐ」という目標があるので、野外への興味が0だった人も求められれば1になるような手助けやきっかけを作っていければと思います。

木村　きっかけは大事ですね。どんな人でも気軽に自然体験や発見ができて、その中での感動体験が、「自然っておもしろい!もっと知りたい!」という思いにつながればいいですよね。

鈴木　特に今、コロナで外に出られない、いろんなことができない状況下だからこそ、どうしたらいいのか前向きに考えなければ。学校は昔から自然体験のニーズがありましたが、企業をはじめ大人や大学生など、まだまだ潜在的なニーズは眠っているはずです。できない・やらない言い訳より、できる・やる方法を模索した方が光明を見いだす可能性がある分いいですよね。

木下　外遊びの楽しさが広まってきましたよね最近。みんながみんなというわけじゃないけど、外遊びが好きになる要素を持っている子どもたちは、大人になってもそれを忘れないと思います。楽しいだけで終わっちゃうのではなく、その楽しさを学びへとつなげる一歩が、野外施設部の大切な仕事なんじゃないかな。

見えてきた野外活動課の「これから」

皆さんから部長へ、この機会に聞いてみたいことはありますか？

木村　活動協会の始まりはキャンプとおっしゃっていましたが、いろんなキャンプをやってきて思い出に残っていることや苦労したこと、印象に残っていることや人などを教えてもらえたら。

岡本　子どもの成長を間近で見て幸せを感じたことがあります。その子は初めて低学年キャンプに参加した1年目はずっと泣いていたけど、2年目に来た初日、ちょっとはにかみながらも駆け寄ってくれました。日が沈む「たそがれタイム」にはやっぱり泣いていたけど、1年目と違ったのは、泣きながら作業をしていたこと。2日目の夕暮れ時には、彼女は泣いていなかった。何かを乗り越えられた瞬間だと思いました。3年目、彼女は泣いている子を励ましていました。親から離れ、キャンプでの活動が成長につながったと感じています。

鈴木　40年の歴史の中で、設立当初の思いにも変化があると思いますが、最初の頃に活動していた指導員の姿と今の指導員との違いや、今の指導員たちに感じていることはありますか？

岡本　相馬さん（創成期のメンバー）にはいつも「働くというのは、端（周り）が楽になるように動くこと」と言われていました。自分の働きがチームのみんなに仕事のしやすさを提供できているか、という意識を持ちました。きっと私たちに足りなかったものを指摘してくれたんだと思います。さらに視野を広げて考えると、自分のためではなく社会の中で誰かの助けや喜びになると思えば一歩踏み出す力が出ると思うのです。みんなにもどんどん新しいことに挑戦をしていってほしいです。

では、一人ずつ今日の感想をお願いします。

木下　座談会という形が初めてだったので、とても緊張しました。指名されたときも「私でいいんですか？」みたいな感じでしたが、みなさんの考えや思いに触れ、仕事について見つめ直すいい機会になりましたし、今後に生かしていけそうです。これからも野外施設部の職員として、みなさんと手を携えていきたいな、と今日一日で思えました。ありがとうございました。

鈴木　私も木下さんと一緒で、現場ではいろんな経験をさせてもらっていますが、こういう場でしゃべれるのか、部長のお話をどれだけ理解できるのか不安でした。参加してみて、活動協会の真の魅力はすごく純粋でシンプルなところ、例えば自然体験を通じた友達との出会いや社会にとっていいものを提供することであり、また私たちもそれによって起きる変化を目の当たりにできることだと分かりました。とても良い機会をいただき、ありがとうございました。

木村　自然体験の指導はやりたかったことでもあり、毎日充実して楽しく仕事をしていますが、ミッション・ビジョン・バリューについて深くは理解していませんでした。職員としての伝えたい思いはあるけど、それを言葉にするのは難しかったので、今回、自分のバリューを考えて何をやるべきか整理できたし、これから目指すものも少し見えてきました。部長のお話も普段なかなか聞く機会がないので、参加させていただきよかったと思います。

竹内　今日の座談会の中では、「チーム」の話がとても印象に残りました。職員になって3年目くらいまでは、自分のできないことや苦手な部分にとらわれてがんじがらめになることが多かったんです。今の山の家の職員もすごく個性豊かな人が多くて、得意なものがはっきりしています。そんなとき「適材適所」という言葉が頭に浮かんできたんですね。自分がどうしても苦手なことは得意な人にサポートしてもらえれば、成果も上がるし、自分はほかの人の苦手な部分を補える人になれればと思うようになってからは、少し楽になりました。今回チームの話で、周りの人たちが仕事をしやすくするために何をすべきかという部分が今の業務につながり、ストンと落ちるものがありました。

岡本　時代とともに財団のありようも少しずつ変わっています。みんなもこの先仲間やチームを大切にして、私たちのミッションは何かということを、その年ごとに研ぎ澄ませていってください。

多様性に富んだ市民が集う
まちの活力を高める活動拠点を運営

About us　市民活動の活性化、円滑な運用を支える多機能拠点「札幌エルプラザ」の公共施設を運営

札幌エルプラザ公共4施設は、平成18年度より開設当初（平成15年9月）、一部の札幌市の直轄部門も含め当財団が運営を引き継ぎ、現在に至ります。男女共同参画や環境保全、ボランティア活動など市民が出会い、交流する各種活動支援を担当し、貸室の運営やワークショップの企画・運営、情報誌の作成などを行っています。

運営施設

男女共同参画センター
性別にとらわれず、個性と能力を発揮できる男女共同参画社会実現を目指した拠点施設

市民活動サポートセンター
札幌のボランティアやNPO団体など、さまざまな分野の市民活動団体を支援する総合拠点

環境プラザ
環境について学び、環境に関する情報を発信する、札幌の環境活動の拠点施設

情報センター
男女共同参画、消費生活、市民活動、環境保全に関する情報の発信・収集ができる施設

Mission　これまで大切にしてきたこと

まちの活力を高める活動の拠点～多様性に富んだ市民との共創

札幌駅や北海道大学から徒歩圏内の交通至便なロケーションに立地、多様な市民ニーズに応えられる機能やスペース、人材を備えていることもあり、年間利用者は57万人にも上ります。ふらりと立ち寄っても面白い、学びや体験を通しての仲間づくりができる、仲間を誘いたくなる施設を目指し、市民に近い存在であることを常に念頭に置いています。

まちの活力を高める活動拠点としての関わり方
市民の伴走者となる ・価値に対する概念を周囲と一緒につくっていく・情報や選択肢などを「得るプラザ」となる・安心安全な場作り・人とつながる職員である

常駐するプロスタッフ
利用者との関係を密にするコミュニケーター・各分野の専門家とつながるコーディネーター・事業を企画するプランナー・さまざまな人材の力を引き出すファシリテーター・施設管理を円滑に進めるマネージャー

多彩なニーズに応えられる各種スペース
ホール・研修室・会議室・多目的フリースペース・料理実習室・託児室・健康スタジオ・音楽スタジオ・和室・洋和裁室・工芸室・OA研修室ほか

Vision　中期目標

私たちがどう行動していくか～そこから生まれる価値を常に念頭に

多岐にわたる市民活動には、決して正解となる選択肢はありません。さまざまな立場の方が自由に発想し、まずは一歩一歩行動に移していく、そうした前進の積み重ねが、活力ある市民生活のあるべき理想像に近づける秘訣だと考えています。私たちはそうした活動を少しでもサポートすべく、人情味と課題解決の両立を目指すエルプラザのモットーをベースとしながら多様な分野のプロによるチーム力をもって、目指すべき姿の実現をお手伝いしていきたいと考えています。当財団であれば、周囲の人を楽しく巻き込みながら、信頼関係に基づいたプラスアルファの仕事で、分野別の壁を乗り越えて課題に当たっていけると考えています。街づくり活動において、「参加者から担い手になった」と答える地域活動の担い手を100名創出することを目指します。

ありたい姿「まちの活力を高める活動の拠点」
・ネットワークの拡大が期待できる
・活動の拡大と潜在的活動者が再発見できる
・社会課題の解決のステージが整っている
・効率的な管理運営体制が整っている

エルプラザのモットー「人情味と課題解決の両立」
・気が付くと、一歩先行く取組み
・自由な発想ときっちり業務
・強みを活かし、チームで仕事をする

Value　中期目標達成に向けた行動指針

自由な発想で多様な価値観に基づいた活動を仲間とともにまずは実行に

自由な発想に基づく自己表現を仲間とともに行動に移すことが、活力ある市民生活を実現する大切な要素であると考えています。

1. 人が受け入れられる（受容）
2. やりたいことが言える、挑戦できる（表現）
3. みんなでやろう！周りの人も誘ってやろう！（仲間）

上記の基本姿勢を基に、出会いとつながりを創出しネットワークの拡大につなげるとともに、活動の拡大と潜在的な活動者を再発見できるよう情報の収集と発信の拠点を目指します。また、複雑化する社会課題の解決のステージづくりを目指し、多様な市民や活動団体との協働に努める一方、施設運営のさらなる効率的な管理にも努めます。

設立40周年
記念座談会
～ VISION with Next Generation ～

市民参画課

多様性ある人と未来を支える

INTERLOCUTOR

部 長
下川原 清貴
Shimokawara Kiyotaka

主任指導員 環境プラザ
三瀬 雅允
Mise Masanobu

指導員 市民活動サポートセンター
松谷 雄太
Matsuya Yuta

指導員 男女共同参画センター
川口 友紀
Kawaguchi Yuki

指導員 男女共同参画センター
久世 ののか
Kuze Nonoka

進行 課長 斉藤 美季 Saito Miki

担当しているからこそ分かる、市民参画課のこと。
部門長と若手職員、それぞれの思いを語り合ってもらいました。

もっと踏み込んだ関わりへ

エルプラザを財団が受託したきっかけについてお話しください。

下川原　婦人文化センターや女性センター時代の活動は、女性の生活文化創造や社会進出の促進などが主でした。男女共同参画センターをうちが受けた際、それだけじゃなく、一緒に社会を作り、変えていこうという意見が出たと思います。うちの部署が市民「参加」じゃなく「参画」部なのもそういう流れからですね。

考え方が変わったきっかけは何だったんでしょうか？

下川原　平成22年に上野千鶴子さんに講演をしていただいた際、課の抱える問題に対してアドバイスや苦言をいただきました。ただ淡々と女性に関する本や資料を読んだりする施設ではなく、もっと人と人が交流しにぎわう場であってもいいんじゃないか。昔から利用している人に遠慮して新しいことができない施設ではなく、これから来てほしい人や支援したい人たちに喜んでもらえる施設にする必要があるんじゃないか。そのように我々の意識が変わり、翌年から早速、起業支援や情報センターのリニューアルが始まりました。

上野さんに背中を押してもらったのがきっかけだったんですね。

下川原　残念なことに私はその場にいませんでしたが、きっとそこでチャレンジする気持ちが芽生えたんじゃないかな、と。平成15年から17年までは男女共同参画センターだけを貸室とともにうちで受けていて、市民活動サポートセンターと環境プラザは市の直営でしたが、指定管理が始まった翌年度からそちらも受託することになりました。それからもう14年も経っているってことですね。14年も経っているならそこそこできてないとだめだなあ（笑）

行政が直接運営していた頃と比べて一番変化したところはどこですか？

松谷　柔軟性は出ましたね。前例踏襲型ではなく、違うことや新しいことをやってみよう、という雰囲気が生まれたのかな。

下川原　そうかもしれないね。それが大きく変わったところなのかな。

松谷　人のつながりなどは今も継承されていますね。

エルプラザの追い求める「関わり」とは

この先、自分たちが目指すものはイメージされていますか？ たとえば10年後とか。

松谷　街づくりなどのNPOや市民活動などは、1つ1つは小さくても、集まればよりよい社会へ発展するための原動力となるものなので、もっとその輪が広がっていくことが理想ですね。

下川原　うちがハブになって、そのポイントごとにいる人たちがそれぞれ自分の地域で活動できるようになればいいよね。そのための「関わり」ってどんなことをやってる？

松谷　相手から相談されたら応えて、こちらも相談したり、という程よい距離感の関わりを持ちながら、いろんな地域の人をつないできました。

下川原　要求があったときだけ関わっていたんでは不十分かもしれないね。ほかにも何かあるかも。そこがこの先10年の市民活動サポートセンターにとって必要な戦略だと思う。

自分たちが関わった結果が、10年後に自分たちの施設の中だけで終わっていたのではだめ、ということですね。

下川原　その人たちが外に出ていったり自分の地域に戻って、自分たちの力で活動できるようになっていないと。

久世　センターが伴走してきた人たちが自分たちで走れるようになって、たまにセンターにも寄ってくれるようなイメージです。

下川原　次の新しい人たちが活動する中で、次の伴走者を見つけてくれているとうれしいな。押し付けの古い価値観ではなく、活動の楽しさや出会った人との絆、温かさによってつながっていくことにゴールがあるといい。

久世　コアな活動の人たちよりも、その周りにいてちょっと関心を持って行動する層を増やしていった方が、結果的に中心にいる人たちもやりやすくなると思います。

三瀬　よく分かります。環境問題も突き詰めすぎると視野が狭くなるね。目的が同じ団体でも、方法論を巡って対立してしまうこともあります。環境プラザとしては彼らに、多様な選択肢や考え方があることを知ってもらうことが大事。

下川原　自分と考え方が違うからといって相手を拒絶したり排除するんじゃなく、「自分とはちょっと違うけど許容範囲」と認める。そういう考え方を広めるために我々がどう関わるかが課題だと思うんだけど、どう？

久世　ジェンダーの当事者支援でLINE相談などをしていても、どちらかの価値観しか知らず、かつそれに当てはまらなくて苦しんでいる人たちに別の選択肢を示してあげると、「知らなかった！」と言われることがあります。

松谷　エルプラザは建物の形がL字だからエルなんですけど、情報や選択肢を得る（エル）場所という意味も込められていると僕は思っています。今日どうしてもこれが言いたくて（笑）

三瀬　いろんな考え方があるとは教えるけど、コミュニティが閉じた価値観に漬かっちゃうと対立関係も生まれるから怖いかな。コミュニティの輪郭はぼんやりしていてもいいから、いろんな形でつながって街全体での取り組みに発展するのがいいと思う。

久世　グラデーションをいかに作っていくかですね。

三瀬　輪郭をぼかすために、閉じないようにするために私たちがいるのかな。中間の部分を増やすという意味でも。

川口　管理部門として今みんなの話を聞いていて、安全安心を実現するために日々の一歩一歩を確実に積み重ねていくことが私の仕事だと思いました。

下川原　管理部門の仕事は、エルプラザ内の全体を見ているからゴールが少し違うかも。

松谷　私はつながりを大事にして相談しやすい関係性を作ってきたという自負はすごくありますが、利用者が僕個人に会いに来ているのか、センターの職員だから会いに来ているのか、というジレンマが少しあります。

下川原　「僕に会いに来た」でいいんじゃない？　それだけじゃだめだけど、きっかけは何でも。いい加減な関わり方をしてたらそうはならないわけだから。

ネットワークで人の輪を拡大

市民参画課の良さをどういうところに感じていますか？

川口　市民参画課って、環境のプロフェッショナルもいて、市民活動やジェンダーのプロフェッショナルもいますよね。そういう多様性が、ここならではの良さだと思うんですが。

下川原　確かに。それぞれの分野に分かれてはいるけど、うまく機能すれば互いに連携していけるよね。ここで仕事をしてみると、掛け合わせることで生まれるものがすごく多いことに気付くよ。

課題のようなものは見えてきたのでしょうか？

下川原　これから出てくるであろう人にもどうやって関心を向けていくかがすごく大事。環境教育も、家の中や日常生活でさりげなくできる小さな活動の1つ1つを通して、環境について考えてくれる人が少しでも増えてくれたらうれしいな。男女分野だって、男性たちのジェンダーに対する認識や理解がもっと進んで、女性の生きづらさが解消されてほしいと思う。この先10年でそこをどうやって変えていくか。潜在的活動者のようなものをいかに増やすかが、一番大きなテーマなんじゃないかとは思います。

そのためには何が必要だとお考えですか？

下川原　今は新しいことにチャレンジしていく気持ちを忘れないことと、想像力が大事じゃないかな。人の気持ちや事柄、世の中の変化などに対する想像力。いろいろなものに想像力を働かせてものを見ていく目は必要だと思う。

活動で得たかけがえのない価値

市民参画課の強みとはどういう部分だと思われますか？

下川原　みんながいいと思うことを、お互いに背中を押し合って前に進められる職場にしたいね。仕事をもっとやりやすくするために会社のルールを変えよう、というエネルギーはみんな持っているはずなのに、なかなかそこにいかない。目の前にやることが山積みで、どうしても市民の方に力を注いでしまうからなんだけど、市民を幸せにするためにはまず自分たちが幸せに仕事ができないと。そのためにはルールを変えて環境を整えることが必要。新しいことに取り組むだけがチャレンジじゃない。自分たちが幸せになることもチャレンジだし、その幸せ感は外に向けてもアピールできるんだから、やる意義があると思うんだよね。

チャレンジすることで、行政にはできないこともできたりするんでしょうか？

三瀬　昆虫食の講座の際は横のつながりの大切さを感じました。オンライン事業の準備であれがない、これがないと大変だったんですが、もしもの時に備えて管理部門が物品を買ってくれていたおかげで事業が無事に行えたんです。環境局からもおもしろいですねって言ってもらえて、テレビや新聞の取材も来てくれて、私たちだからこその事業ができたかなと思います。課題は残りましたが、それを上回る達成感がありました。

下川原　チャレンジしないと課題も見つからないからね。やって良かったということだよ。

下川原　食の問題は地球環境を考える上では必要なことだから、昆虫食を単なるゲテモノ食いじゃなく環境教育とうまく結びつけて伝えていけるといいね、という話は事前の打ち合わせでも出ていました。

三瀬　テレビもそれにちゃんと共鳴してくれて、取り組みを取り上げてくれました。チラシを見て来たっていう若い参加者もいたし、市民活動と環境プラザのつながりもできました。

ほかにも印象深い出来事があったりしますか？

川口　活動協会に入って1年目の頃は劇場で勤務をしていました。市民参画課に異動し、親子向けサロンを担当した時に何をすればいいんだろうと自分なりに考え、劇場でお世話になっていた劇団員さんや、劇場で育成した劇団を呼んだりしました。その時ちょうど市民活動サポートセンターでのマルシェも行われていて、当時の指導員さんに頼み込んでマルシェの人にも呼び込みをしてもらったおかげで、お客さんが集まってくれました。

久世　去年の女性応援フェスタの分科会はSDGsがテーマでしたが、その時ゲストとして参加していただいた環境団体の方が、「SDGsには環境だけでなくジェンダーもあるけど、今回ゲストで呼ばれて慌てて勉強しました」と言っていました。海外と違い、日本ではまだまだ「環境とジェンダー？」というリアクションが多いですね。終わった後みんなと話して、ハードルが高めなことも考えていけるのかな、と感じました。

下川原　考えるきっかけって一緒にいないとできないんだよね。

久世　あの人に聞けばいいんだ、となるのはすごく大きいですね。

三瀬　協会のポテンシャルはすさまじいと思っています。たとえば環境教育では、200館も児童会館があって市内の小学生にアプローチできる。それこそ市に匹敵する信頼度を目指していいんじゃないかと。課を越えて連携というより、同じ協会なんだから一緒に仕事して当たり前じゃん、というのが個人的な思いです。

下川原　すでに目指しているからこそ連携と言ってるんだと思う。事業計画の策定の中にも他部門や他団体の連携が出てくるし。

三瀬　それぞれが持っているパワーを互いに発信して認め合い、協力することで生かしていく。そのためには、こっちも自分の力に自信を持たなきゃいけませんね。

下川原　ただ、その自信には裏付けが必要だと思う。根拠を明示しないとね。施設って、前に進んでもらう人と脇を固める人の両輪がそろって機能するでしょ？そういう意味では、脇を固めてくれる人が裏付けを作ってくれることで、安心して前に進めるのかもしれない。

川口　こうやってみんなの話を聞いているうちに、たとえば市民活動サポートセンターの事業があるたびに管理の人間が1人おじゃまして、手伝いながら施設のアピールをする時間を少しもらうことはできるなと思いました。そしたら利用率が上がるような営業戦略にもつながるんじゃないかと。今度係内のミーティングの時に提案しようと思います。

下川原　言語化するっていいことかもしれないね。そうすることで自分の考えとか、何を求めているのかが見えたりするから。それぞれの部門でやってみてもいいよね。

グループワーク実践の場「滝野自然学園」運営と各種事業受託を柱に人づくりに取り組む

About us　財団DNAのグループワークを色濃く受け継ぐ事業セクション

キャンプや地域のお祭り、大規模イベントなど、幅広い事業の企画運営や指導者の派遣に加え、レクリエーションなどの企画運営スキルを活用し、魅力あふれる地域社会の創造を目指しています。近年では「さっぽろ雪まつり」での大雪像制作業務のほか、札幌の「まちづくり」に携わる事業を通年で受託しています。さらに財団唯一の自主運営施設「滝野自然学園」では、野外活動を中心としたさまざまな自主事業を実施しています。財団の礎となるグループワークを用いたキャンプ事業は、まさに財団の歩んできた歴史そのものであり、これからも財団のDNAとして大切にしていきます。

Mission　これまで大切にしてきたこと

人と人とのつながりを深め、明るく豊かな社会を創造するため

「滝野自然学園」でのキャンプを中心とする自主事業と「さっぽろ雪まつり」をはじめとした受託事業を通して、人と人とのつながりが感じられる社会の創造を目的として、3つのミッションに取り組んできました。

笑顔あふれるまちづくりの推進

私たちが実践してきた財団のDNAを活用した企画を提案し、公共施設が開催する大型イベントのほか、地域のお祭りなど多岐にわたる事業にかかわらせていただきました。札幌を代表する「さっぽろ雪まつり」の中核を担うなど、これからも市民に必要とされる組織を目指します。

「滝野自然学園」での自然体験事業

財団の原点である「滝野自然学園」を拠点に、設立時より家族の形の変化、人のつながりの変化など、その時代、時代の社会課題となり得る状況をいち早くキャッチし、応える事業を展開してきました。小さな声にも耳を傾け、原点を信じて、自分たちの頭で考え挑戦し続けます。

財団の未来を創造

受託事業と自主事業を通して、財団内の連携や事業派遣、実務研修でかかわる全ての職員が財団のDNAであるグループワークに触れる機会を設けることで、財団の未来を共に創る人材を育成しています。

Vision　中期目標

ピンチを契機に原点回帰、必要とされる存在と事業の再構築を目指す

感染症の流行は、これまでの社会基準を一変させました。とりわけ、「接触」「密」「移動」が制限され、私たちがこれまで取り組んできた事業や自然体験活動の実施が極めて困難な状況に陥っています。子どもたちをはじめとするすべての人々の体験機会が著しく減る状況だからこそ、私たちがこれまで大切にしてきた人と人とがつながりを持つことの価値を最大限に尊重して、新しい社会基準と柔軟に融合させることで、これまでのように大切なご家族を預けていただけるような、信頼感のある存在であり続けます。

滝野自然学園における自主事業では、施設周辺の自然環境を活用した「非日常の体験や学びあいの活動」を中心に、子どもたちのみならず市民と自然をつなぐ自然体験活動施設を目指します。いつまでも子どもたちの笑い声が響く場所であってほしいとの地元町内会の皆さまの思いを胸に、他部門との連携で財団全体の野外活動事業を推進するとともに、多様な世代が学びあうリピート率の高い、魅力あふれる事業を再構築し展開します。

受託事業では、実施実績をコロナ禍以前の水準までに回復することを目指します。現在取り組んでいる新しい社会に対応した事業の開発を推し進め、コロナ禍の閉塞感を軽減する、感染リスクを最小限に抑えたニューノーマルな事業として再構築します。また、安心安全な事業の再開実現に努め、市民の期待に応えていきます。

Value　中期目標達成に向けた行動指針

社会にあわせた柔軟な変容と新しい価値の創造で財団の意義を高める

どのような状況下でも、笑いあい、助けあい、学びあう、子どもたちの原体験となるような機会を確保すべく、柔軟に変容を遂げ社会にあわせた形を模索し続けます。

また、安心、安全な事業環境を整えるとともに、これまで培ったノウハウを活かしながら、本来の目的である「人と人とのつながり」を体感できるような事業を展開するため、下記の指針に基づき行動します。

1. 私たちは、財団の原点や歴史をはじめ、全ての人や事柄から学びます。また、先入観にとらわれず、柔軟な発想力をもって皆さまとともに新しい形や価値を創造します。
2. 私たちは、財団の総合力で社会に貢献します。そのために、各部門の強みを理解して、サポートやジョイント役も担います。
3. 私たちは、皆さまの声に常に耳を傾け、コミュニケーションを図ります。心身ともに安心、安全な関係性と環境を用意できるよう努めます。

設立40周年
記念座談会
～ VISION with Next Generation ～

企画事業課

先輩たちのDNAを、次の時代へ

INTERLOCUTOR

部 長
石井 一彦
Ishii Kazuhiko

×

指導員
榊 瞭太
Sakaki Ryouta

進行 係長 吉川 智成 Yoshikawa Tomonari

担当しているからこそ分かる、企画事業課のこと。
部門長と若手職員に、それぞれの思いを語ってもらいました。

キャンプでのグループワークが原点

長年、企画という部署に携わっている石井部長に、企画事業課の歴史についてお聞きしたいのですが。

石井　企画事業課は、1980年4月の設立時より行っていたキャンプや野外体験活動、受託事業などの自主事業を今に引き継ぐ部署として存在しています。財団の始まりとなった滝野自然学園は、そもそも教育委員会より委託されていたのですが、札幌市より2009年に取得し、当財団の施設として自然体験活動をはじめ、自主事業をさらに幅広く発展させる拠点として我々が運営してます。財団を設立した先輩方は、「グループ活動の推進」を基本にさまざまな事業を行い、実績を認めていただき多くの施設を委託されたんですね。そして、その流れは今も続き200か所を超える施設を抱えるに至っていますが、この40年の流れの中で、変わらず存在し続けてこられたのは、企画事業課の役割が大きいと考えています。

各部署の資源を生かし横断的に事業展開

すると滝野自然学園は企画事業課にとって象徴的な施設なんですね。

石井　財団が市から委託を受けて最初に運営を開始した原点（施設）ですからね。うちの職員がここでさまざまな事業を経験し、そのスキルをもって各施設で活躍しています。滝野自然学園があるからこそ財団が大切にしてきたことを継承していくことができる。これからもここは原点としてあり続けると考えています。

榊　滝野自然学園は2009年からという話でしたが、それ以前はどのように活用されていたんですか？

石井　以前は、教育委員会が1971年旧滝野小学校跡地に野外教育施設として開設して、小学5年生の宿泊学習をしたり、野外体験や野外教育の活動に関わる人たちの研修の場として使用されていました。
1980年に委託を受けて運営を開始し、1989年青少年山の家が完成し、5年生の宿泊学習の場が移った段階で、学園は本来の役割を終えてます。しかし学園を残してほしいという地元町内会の声と、続けていきたいという我々の意向を受け、教育委員会は、市の施設として運営を継続していたんですが、ついに1999年3月委託業は終了してしまいました。その後は約10年間は市より施設を借り受け、地元町内会と運営委員会を組織して事務局を我々が担ってきた経緯があります。2009年に、財団が土地と建物を購入し、現在に至っています。

榊　当時中心になった方々が、やっぱり自然学園は必要な場所だと考えたんですね。

石井　そうだと思います。事業や、実務研修に参加する職員と一緒に学園事業を行うことによって、先輩方の行ってきた事業の流れを体感することはすごく大切に思っています。今いる部長、課長、係長などは滝野自然学園や、自主事業を経験しているため、さまざまな事業を企画し、運営することができます。その目線で運営や管理を行っているので、他財団とは一味も二味も違います。管理職、館長を含め全員プレーヤー目線で施設管理を含めて事業を行っていくため可能性が広がり、様々な方面から評価されてきたところでないでしょうか。原点であり礎になるものを守り、伝える。これが企画事業課のあり方のポイントの一つであり、忘れてはいけないんじゃないかな。

改めて企画事業課の業務のポイントはどんなところですか？

石井　大きくは、事業を通じて多くの職員にさまざまなノウハウを伝えていくことですかね。
あとは、財団の業務の多くは札幌市から受託している指定管理業務ですが、さまざまな部局から施設をお預かりしています。巨大な自治体である札幌市は、部局間の連携が難しく横断的事業はなかなか生まれにくい。しかし我々だと例えば子どもの事業を受託した場合、教育委員会の施設や、子ども未来局の施設、環境局の施設などを結びつけて事業を柔軟に企画することができるんです。

小さい積み重ねで信頼を得ていく

課として関わった札幌のまちづくりで、今までで印象に残っている事業について教えてください。

石井　さっぽろ雪まつりはやっぱり印象深いですね。かかわるまでは自衛隊が作っていて見るだけのお祭りと思っていたのが、「担い手として自衛隊から技術を引き継ぎなさい」と、言われて驚いたことが思い出されます。我々がかかわる以上は、市民不在の雪まつりから、ボランティアと一緒に作り上げる市民中心のお祭りへと変化させていく意気込みでしたね。現在は大通会場大雪像5基中3基の制作隊長の派遣と1基の大雪像制作、つどーむ会場の滑り台などの制作と運営を担うまでになりました。つどーむは大学生、高校生の力を借りながら大雪像は市民ボランティアや、児童会館の子どもたちと一緒に作っています。

手掛け始めた当初からかかわり方は具体的にイメージしていたんですか？

石井　はじめは、私たちが学ぶところから始まり、徐々にボランティアとして大学生や子どもたちを巻き込んでいます。つどーむの運営は、大学生との連携だったので比較的スムーズに行うことができましたが、大雪像は難しかった。作業員は、もちろん重機や、足場など専門の方がいて現場を運営しているので最初は「危ない、邪魔」と感じるだろうなと思い、試しに少人数の子どもたちに来てもらい、現場の大人と交流をしたりしながらやってきました。認識を変えるまでに3年はかかりました。

雪まつりのような大きな仕事も最初は小さい仕事があり、人とのつながりと実績で大きくなったのですね。

榊　まさしく人と人とのつながりですね。

石井　企画事業課では、いろいろな仕事を熟知した人材が異動してきます。財団はこれだけ枝葉があって多岐にわたりやっているのは、横のつながりを大切にして評価を積み重ねていった結果、一つずつ仕事をいただけていると言えます。

いろいろな人材に来てもらって、ここで学んでもらうという意味から誰でも活躍できるということですね。

石井　はい。うちにもいろいろな人材やノウハウを入れてもらえる点を考えれば、希望する皆さんに来てもらいたいですね。即戦力にとらわれず楽しみながら仕事をして、そして財団の原点を知ってもらいたいです。

先人たちが培ってきたものを受け継ぐ

榊さんは、企画事業課の強みは何だと思いますか？

榊　石井部長の話にもあったように、諸先輩からのDNAを受け継ぎつつ、いろいろなことに挑戦しそれを実現させてきた実現力と、法人と関わる渉外力なのかなと思いました。財団もそういう時代のことを知らない若い職員が増えているので、私たちが実務研修の機会などでしっかりと伝えていかなければ。今この課にいる指導員は私しかいないので、この経験を独り占めしているのがすごくもったいないです。ノウハウをしっかり共有して、それぞれの強みを生かした事業を行い、財団として一丸となって進んでいく。コロナ禍のこういう状況下だからこそ、うちが音頭を取り、率先して連携の機会を作ることが求められていくのかなと、今話を聞いていて感じました。

諸先輩方のDNAをちゃんと残していかないと、ノウハウを持っている人がいなくなってしまいますね。

榊　企画事業課も今は小さくなってしまって、自分もどれだけDNAを持てているのか心配になります。

石井　そうですね。まずは動きながら覚えていくことです。知識や議論だけではなく、体験からも感じてもらったほうがいい。やっぱり一緒に活動していく中で成長できるし、そこから派生して事業の中で人とのつながりも生まれる。今まで先輩方が考えたキャンプのプログラムなんかにも、そのエッセンスが全部詰まっていますよ。何のためにキャンプやっているのか、何のためにカレーライス作るのか、なぜここでテントを作るのか、たくさんのことがわかってきます。それに活動協会の中には、各施設ごとにそういうことを実践していた諸先輩方のDNAを持つ人たちがたくさんいるので大丈夫です。

榊　ありがとうございます。それと、財団の横のつながりは、今後意識していかなければいけないんじゃないでしょうか。

石井　今までも意識して来たけど、より一層、という意味でね。

榊　ですよね。もちろん、それぞれが専門に特化していけばそこは強くなっていくんだろうけど、逆にそれだけで終わってしまいますよね。

石井　うん。横のつながりがあるからこそ、うちは今までどんどん大きくなってこられたからね。特に職員が増えていくほど意識は薄まっていくんだろうけど、社会情勢が変わっても方向性を示していく課になりたいと思っています。

「体験」を続けていくにあたって、最近取り組んでいることや、これだけはなくしてはいけないと思っていることは何ですか？

石井　「体験」って、仲間と手を取り合って分かち合うというのが根本にあるじゃないですか。今のコロナ禍では人と手を取ってはいけないし、集まってもいけないですが、バーチャルな体験というものもあるんですよね。児童会館から子どもたちを滝野自然学園に呼んで、野菜やイモの栽培を体験してもらうという事業を、去年まで企業と一緒にやっていましたが、今年はできなくなりました。代わりに、企業や職員が野菜やイモを植えたり育てたりしているのをリモートで子どもたちに見せて、遠くで自分が体験したような気分を味わってもらいました。もちろん仲間と一緒に実際に体験した方がいいのは分かっていますけど、あれも一つの方法としておもしろいとは思いました。ただ、グループを作って、仲間づくりをして、みんなで事業を立てていくという、昔の先輩方のやり方がある。あの離れがたい仲間意識の結束というのは、バーチャルではできないものなんだよね。だから今この時点では、仲間と一緒に実際に体験することを決して諦めたくはないんだよ。

コロナの影響で先が全く見えない状況ですが、未来に向けて、企画事業課はどうあるべきだと思いますか？

石井　新型コロナウイルスの影響で、企画事業課も昨年までとは一変しました。イベント事業や受託事業ができない、非常に難しい状況です。企画事業課がここからどのように進むべきか、真剣に考えなければいけない重要な時期に差し掛かっています。

榊　大切なのは、途絶えさせないということでしょうか。

石井　願わくばまたキャンプファイヤーなどをやりながら、子どもたち同士が手をつないで遊べる世界に戻ってほしいですね。1年先か2年先なのか改善するイメージを見据えた仕掛けを作っていかなければいけない。もちろんそこにうちの職員が関わることが大事です。

榊　これこそ活動協会の趣旨ではありますよね。人とのつながりはこの先も常に必要だし、それがあってこその「活動協会」であり企画事業課という。

石井　今まで我々は、外とのつながりでお仕事をいただいていて、それをうまくほかの課とつなげて一緒にやらせてもらっていたけど、今、外の仕事がどんどんなくなっているよね。今までのノウハウを還元していくというのは、一つ大事な視点としてあるのかなと思います。

榊　その点、この部署は自由に動きやすい課ではあるんじゃないでしょうか。そういう視点を持って事業を進めていけたらいいですね。

石井　先輩からは、子どもが健やかに育つには「遊び」、「仲間づくり」、そして「自然」の3つが必要だと教わりました。そこは外すことなくこれからも取り組んでいきたいですね。仲間づくりが難しくなっている時代ですが、それでもこの3つはこれから大事にしていきたい。そして後人にしっかりと伝えていきたいし、できれば受け取ってほしいと思います（笑）。

設立40周年
記念座談会
～ VISION with Next Generation ～

総務課

楽しんで働ける、組織を目指して

INTERLOCUTOR

事務局長
生出 裕一
Oide Yuichi

×

指導員
稲葉 茉希
Inaba Maki

指導員
實石 直也
Jitsuishi Naoya

指導員
山田 拓人
Yamada Takuto

指導員
影山 優菜
Kageyama Yuna

進行 課長 土井 聖子 Doi Seiko

担当しているからこそ分かる、総務課のこと。
部門長と若手職員、それぞれの思いを語り合ってもらいました。

About us

約2,000名の組織を円滑に運営する縁の下の力持ち

1980年（昭和55年）に職員15名の財団法人札幌市青少年婦人活動協会として発足した当財団も、今や全拠点数213、約2,000名の職員を擁する大組織に成長しました。手掛ける事業の幅も広がり、利用者からの期待も大きくなっている現状で、すべての部門、拠点を円滑に、かつ効率的に運営していくためには、策定した経営方針にのっとり、全スタッフが一丸となって業務に集中できる環境を整えなければなりません。財務、経理、人事、労務部門で直接的、間接的に事業運営をバックアップする強力なサポートチームが我々総務課です。

今振り返る、総務課の歩み

生出事務局長はプロパー職員最初の総務課長という経歴をお持ちですが、昔の総務課はどんな感じでしたか？

生出　今でこそ総務課や経営企画室があり、当たり前に管理部門が存在していますが、設立当初の総務課は、札幌市からの派遣職員が部長や課長などのポストを担うことでバックオフィスが機能していました。それが徐々に活動協会のプロパー職員が担う体制になっていきましたが、当初はどこか派遣職員のお手伝い的な感覚で、自分の仕事という意識が持ちにくかったように思います。

何かその時、感じたことはありましたか？

生出　総務にはさまざまな問題が持ち込まれます。事務のプロフェッショナルである派遣職員に代わって、我々が安心感を与えられるだけの力をつけ、自分一人の力ではなく総務課として信頼されるようにならないと相談もされなくなってしまいます。分からないことばかりでしたが、いろんな方からお知恵を拝借したり、道筋を一緒に考えたりして、手探りながらやってきました。

総務課ができて、組織として変わっていったのを感じましたか？

生出　その潮目はあったかもしれません。各部門とは、良い意味で対立していました。どっちが良いとか悪いとかではなくて、やりたいことや実現したいことがあって、それをちゃんと実現し軌道に乗せるために、お互いが果たす役割の違いみたいなものがあったんです。スタート当初は、現場の思いと運営上の考え方が合致しないときの立ち振る舞い方には苦労しました。でも今は自分たちの担っている役割や位置付けは確立できているので、後はその先を見据えるだけです。

仕事を通して得た「気付き」

皆さんは、今総務で仕事をしていてどうですか？

實石　大変なこともあるけど、学べることは現場とは全然違いますね。「お給料ってこんな手順を踏んで支払われるのか」とか「経理ってこのようにやるんだ」とか、今まで知らなかったことをここでたくさん学べています。

生出　私も子ども会のリーダー研修のつながりから、活動協会に入ったら人と関わる仕事ができるんじゃないかと何となくイメージしてたけど、32年間を振り返ると、ジャージを着てるよりネクタイを締めている方が長かったですね。

影山さんは総務に来て感じ方が変わりました？

影山　去年までは施設の職員としての意識が強くて、ごく狭い範囲だけを見て仕事をしていました。総務課に来て採用に携わることで財団全体の動きを知ることができ、自分は財団の職員だったんだな、と再認識しました。最初は漠然と総務課に対してちょっと怖い印象を抱いていましたが、来てみて変わったと思います。

稲葉さんはもともとどんな仕事をしたくて活動協会を選んだんですか？

稲葉　もともとは企画事業課でイベントをやりたいと思っていましたが、児童会館に配属されました。その時、ほかのボランティア団体などが自分たちと同じ事業を、会社としてではなく、それぞれの余暇を使って行っていることを知りました。仕事としてやっている我々との違いや仕組み、お金の動きなどを知りたくなって、総務に異動希望を出したんです。

山田さんは日々の業務を通じて、自分の仕事について思うことは何かありますか？

山田　私は4年間児童会館で勤務した経験がここでも生かせると思っていましたが、やっぱり仕事内容は全然違いました。さっき事務局長が、分からないことばかりで、と言ってたのでちょっと親近感が湧きました（笑）。やっぱりそういう時期があったんだな、私も頑張ろうと思いました。今までは、子どもを含め保護者や地域の方といった、外部の方、周りの方をサポートしていく感覚でやっていましたが、総務課では、どちらかというと協会内のサポートをしていくところだと感じています。でも労務と研修を担当し、現場の人たちからの問い合わせ対応や手続きをしていく中で、「人を支えていく」という根本の部分は変わらないと気付けました。今後また異動があったとしても、その根本はどこのセクションに行っても変わらないんじゃないかと思います。

指導員に望む「仕事像」とは

指導員の皆さんに事務局長から、こうしてほしいという思いはありますか？

生出　とにかく楽しくお仕事をしてほしいですね。それが1つでも、少しでも意味あるものにつながっていくような思いを持って、毎日仕事をしてもらえたらいいかな、と思います。それはどの職責でも同じ。もちろんなかなかそう思えないときもあるから、遠慮なく嫌だと言える風土も作れたらいい。人には得手不得手があるので、一人ひとりが輝ける分野で自分の役割をしっかり担えれば、強みを生かした仕事ができると思うし、そんな組織になればいいですね。自分の頑張りをアピールすることもお互いの刺激になりますが、これだけ体制もできて仲間もいるんだから、一人で背負わず、時には弱音を吐いてもいいと思います。今はバックオフィス部門や児童部門、若者部門といったように、より専門的に事業がしっかりと立ち上がっています。もちろん問題も複雑化し深まっていて、世の中の要求にしっかりと応えていかなければならない時代になってきたのだとは思います。でも、ちょっと前まではそんなに複雑でもなく、みんながお互いの仕事に目を配りながら、一緒に取り組んでいこうという雰囲気があったような気がします。そういう原点は今も変わっていないと思うので、視野を広く持って他部門との横断的な取り組みなどにチャレンジすれば、仕事がもっとおもしろくなるはず。

設立から40年経って、これからまた長く続けていくにあたって、一番大切なことは何でしょう？

生出　正解はないけど、人がたくさんいればいいとか、ルールや規則を作ればいいとか、そんな単純なものではありません。それこそ当時の総務課は10人もいなかったし、児童会館の事務局にいた当時も、派遣職員の課長と私と臨時職員さんという3人体制でした。それはそれは大変だったけど、でも何とかやっていけていましたよ。何かを形にしたり実現していくことに対する、思いの強さや意欲が「その先」を作っていくような気がします。そこがまず根幹にないとだめなんじゃないかな。そのためには、一緒に仕事をする人をどう巻き込んでいくかも重要です。目標を決めて、そこへ向かってどう進むかをみんなで考える。それがバックオフィスだと思います。

様々な分野に言えることですね。

生出　もちろん自分の仕事を全うするのは大事です。でも自分が今担っていることが性に合わなかったり、もっとほかに何か得意としているものがあるかもしれない。そんなとき、悩んでいる人がいたら、手を差し伸べてあげる心の余裕も必要だと思うんです。そんな風土を、まずは自分たちの足元から作れたらいいなと思います。

総務課の未来ビジョンというものについてお聞きしたいのですが。

生出　未来ビジョンは5つあります。まず「バックオフィス機能強化と迅速な事業部門支援」。総務課が事業部門間を迅速に支援してつなげ、問題提起をしていくのが重要な役割と考えます。2つ目の「風通しの良い財団づくり」は、各部門としっかりとコミュニケーションを取っていくという意味です。3つ目は「社会ニーズに応え活躍できる人材の輩出」。財団は人がすべてだと考えており、その財団を支えていける職員を輩出していくのが総務課の責務です。4つ目は「信頼され続ける総務課」。会社の中で中枢を担うには信頼・信用されることが大切なので、そこに取り組んでいきます。最後が「成長し続ける総務課職員」。これは一人ひとりが能力を発揮できる場を作っていくということです。これら5つに向けて、しっかりと努力をしていこうということを、未来ビジョンとしています。

職員が担う、総務の「これから」

皆さんがこれから目指す職員のイメージをお話しください。

實石　先を見る人になっていきたいですね。話を聞いて現状に満足しているだけじゃなくて、周りが困っていたら助ける。それによって総務全体が良くなれるのだから、そのためにはどうしたらいいのかを考えられるようになりたいと思います。

生出　今やっていることに手一杯だと周りや先を見ることもなかなかできないけど、仕事に余裕が出てくるとそれが可能になるので、まずは一歩ずつしっかり取り組んでください。無理に先だけを見ようとして足元がおぼつかなくなっても大変ですから。

影山　私は価値を広げられる人になりたいですね。そのためにも、今目の前の仕事に取り組む中で、その中の価値を自分で考えたり、関わる全ての人と真摯に丁寧に向き合っていくことが重要なのかな、と思いました。

生出　価値については、私も常に考えているところです。でも悩み考えながらも1つの目標を立てることは、絶対自分の活力になるものだと思うので、いろんなことに興味を持ちながら、その中で自分が一番力を発揮できるものを身に付けていってもらえたらと思います。

稲葉　今日は事務局長の32年の歴史を聞かせていただき、時代とともに人も制度も技術もいろいろ変わっていく中で、視野を広く持ったからこそそれを乗り越えられたのだと感じました。変化に対し自分に何ができるのかを考えるためにも、視野を広く持てる人になりたいですね。

生出　私が視野を広く持つために意識をしているのは、物事に対して常に疑問形から入ることですかね。

稲葉　疑問形ですか！

生出　物事を自分ごととして捉え、自分自身の納得をどうやって見いだすか考えることが、そのきっかけになるのではと意識しています。

山田　財団は人が財産なので、やっぱり個々人の価値・能力を高めていくことが財団のため、自分のため、ひいては人々の生活のためにもなりますよね。覚えることばかりでルーティン作業が多いけど、でもそのままじゃだめだと思うので、現状維持でなく常に成長し続ける人になることで、時代や社会の変化に適応していきたいと思います。

生出　去年より今年、昨日より今日、同じことをやっても慣れてくると早くできるようになる。私も育成課の事務局で初めて契約事務をした時、残業続きの毎日で、このまま死んじゃうんじゃないかと思ってやってましたけど、1年経って仕事が一巡すると、何となく仕事の仕方が分かってできるようになってきました。でも確かにそこで満足せず、余った時間をどう生かすかがまさに成長の幅だと思いますね。これからも基本を大切に、目の前のことに着実に取り組みながら成長してほしいと思います。

座談会を通じて、改めて感じたことは？

生出　会社がある、事業ができる、そこに参加する人たちが幸せになれる、といったことは全てつながっています。会社も管理部門がしっかり機能しないと全体が機能しません。現場が安心して事業を展開できるためにも、自分たちもやるべきことをしっかりやらなければならない。自分たちが頑張ることで、各施設を利用する方たちに楽しんでもらえるんじゃないでしょうか。総務だからとか現場だとこうだとかではなく、どんな仕事もそれぞれ役割が違うだけで、全ての仕事は自分たちが目指す理念に当然つながっていってるはずだとそう思っています。自分たちは良い人や良い街を作るために仕事をしているのだと、理念を掲げてやっていても、実際には書類を見たり作ったりする仕事だったりするものです。でも全ての仕事はそうやってつながっている。その意識さえあれば、もし総務から現場に行ったとしても、財団の職員の役割、使命といったものは変わらずに仕事をしていけるんじゃないでしょうか。

40年のあゆみ

episode 3

新しい未来に向かって

活動協会が歩んできた40年間の軌跡。
事業の多様化、拡大の歴史を辿ることができたのは、
常に存在意義を問い、社会への貢献すべき形を模索し、
変化とチャレンジを恐れずに進んできたからに他なりません。

しかし、事業は常に安定して存在しているわけではありません。

民間の事業者でも行政の事業を受託できるようになった今、
急速に変化する時代をさらに先読みし、「先手を打って価値を創造」していくこと、
そして、「既存の事業受託に頼らない新たな事業を開拓」し、
「法人としての自立」を目指していくことが重要な課題となっています。

さらに時代が変われば、社会課題も、解決のアクションも変わります。
少子高齢化など人口構成や社会構造の変化に合わせてターゲットや
事業アプローチを模索していくことも今後求められてくるでしょう。

活動協会の事業運営は、社会から必要とされ、信頼されることで成り立ち、
世の中に必要とされるものを提供できなければ活動協会の存在意義がありません。
活動協会の「理念」や「目的」は、40年前から変わっていませんが、
達成するための「方法」や「手段」は、社会のニーズに応じて、変化を続けてきました。

活動協会が持つ資源を活用したネットワークのさらなる拡大、
世の中の「通常」を見直し、事業の継続展開に向けて創意工夫する姿勢の確立、
リアルとデジタルを効率的に併用した業務効率・事業実施効果の向上など、
活動協会にはまだまだできること、やれること、やるべきことがあります。

大切なのは、一人一人が役割を担い、自ら変化しながら事業の可能性を広げ、
培ってきたノウハウや幅広いネットワークを生かして、
社会的価値の高い、活動協会だからできる取り組みや事業に挑み続けること。

人々の幸せを追求し、豊かな生活を実現するためにー。

「公益財団法人 さっぽろ青少年女性活動協会」の挑戦は、
これからも続いていきます。

財団法人札幌市青少年婦人活動協会設立趣意書

札幌市は、明治2年創建以来110余年を経過した現在、先人のたゆまない努力により目覚しい発展をとげ、昭和54年11月には、人口において神戸市を追い越し、全国第6位の大都市に成長したところである。

この札幌市の将来は、若い行動力を持つ青少年とその青少年をはぐくみ育てる婦人の力に負うところ大であるが、現今の青少年の実態をみると、非行や自殺の多発等必ずしも楽観を許さない状況にある。

このことから、青少年にあっては、心身の鍛練に励み先人に負けない開拓精神を持って、郷土札幌市の発展に寄与するよう、また、婦人にあっては、家庭教育の重要性を十分認識するとともに、ボランティア活動等を通して人情あふれる地域社会の確立に寄与するよう期待するところである。

この種の活動を支える最も重要な要素は、グループ活動に関する専門性を具備し、かつ、実践的に活動できる専門指導者（グループ・ワーカー）の確保であるが、この種の指導者が現在本市において絶対的に不足している状況にある。ついては、この種の指導者を質量ともに安定的に確保するとともに、その身分保障等をも配慮し、もって官民一体となった活動を展開するため、札幌市青少年問題協議会の建議にのっとり、財団法人札幌市青少年婦人活動協会を設立し、青少年の健全育成と青少年婦人の社会参加の促進を図ろうとするものである。

昭和55年3月11日
財団法人札幌市青少年婦人活動協会
設立者　札幌市 代表　板 垣 武 四

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会　定款（抜粋）

第1章　総則

【 名称 】

第1条　この法人は、公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会と称する。

【 事務所 】

第2条　この法人は、主たる事務所を北海道札幌市に置く。

第2章　目的及び事業

【 目的 】

第3条　この法人は、人とのつながりを通じて青少年の健全育成と青少年女性の社会参加を促進し、魅力あふれる地域社会創造のための主体的な活動を支援することにより、地域社会の発展及び向上を図り、もって豊かな豊かな生活の実現に寄与することを目的とする。

【 事業 】

第4条　この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

(1) 青少年の健全育成と社会参加に関する事業
(2) 社会教育の推進に関する事業
(3) 市民活動の振興に関する事業
(4) その他法人の目的を達成するために必要な事業

管理運営施設一覧

こども劇場施設

施設名	住所	TEL	FAX
札幌市こどもの劇場やまびこ座	東区北27条東15丁目	723-5911	723-5934
札幌市こども人形劇場こぐま座	中央区中島公園1-1	512-6886	

若者支援施設

施設名	住所	TEL	FAX
札幌市若者支援総合センター	中央区南1条東2丁目大通バスセンタービル2号館1階	223-4420	231-2884
札幌市宮の沢若者活動センター	西区宮の沢1条1丁目1-10	671-4111	671-4103
札幌市豊平若者活動センター	豊平区豊平8条11丁目3-5	823-5256	823-5299
札幌市ポプラ若者活動センター	白石区東札幌2条6丁目5-1-304（地下鉄白石駅バスターミナル3階）	862-8802	862-8891
札幌市アカシア若者活動センター	東区北22条東1丁目	752-7959	752-7938

市民活動施設

施設名	住所	TEL	FAX
札幌エルプラザ公共4施設			
札幌市男女共同参画センター	北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ1・3・4階	728-1222	728-1229
札幌市市民活動サポートセンター	北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ2階	728-5888	728-7280
札幌市環境プラザ	北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ2階	728-1667	728-1440
情報センター	北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ1階	728-1222	728-1230

野外活動施設

施設名	住所	TEL	FAX
札幌市青少年山の家	南区滝野247 国営滝野すずらん丘陵公園内	591-0303	591-0394
札幌市定山渓自然の村	南区定山渓（豊平峡ダム下流国有林野）	598-3100	598-3104
札幌市北方自然教育園	南区白川1814	596-3567	596-3591
札幌市滝野自然学園	南区滝野106	591-8780	591-9401

児童会館

札幌市児童会館　中央区

会館名	住所	TEL
中島児童会館	中央区中島公園1-1	511-3397
円山児童会館	中央区北1条西23丁目1-18	621-0325
山鼻児童会館	中央区南24条西13丁目1-1	561-6220
緑丘児童会館	中央区南10条西23丁目1-5	562-1283
宮の森児童会館	中央区宮の森2条5丁目2-21	641-9710
桑園児童会館	中央区北7条西15丁目28	641-7008
苗穂はるにれ児童会館	中央区北1条東10丁目15-9	221-2271
幌西児童会館	中央区南14条西16丁目2-15	563-2263
円山西町児童会館	中央区円山西町8丁目1-50	611-1980
山鼻かしわ児童会館	中央区南15条西8丁目1-20	533-0622
二条はるにれ児童会館	中央区南2条西15丁目	252-7283
資生館小ミニ児童会館	中央区南3条西7丁目1	208-5828
中央小ミニ児童会館	中央区大通東6丁目	788-8641
三角山小ミニ児童会館	中央区宮の森4条11丁目4-1	299-6008
伏見小ミニ児童会館	中央区南18条西15丁目	206-8688
幌南小ミニ児童会館	中央区南21条西5丁目	206-4682
日新小ミニ児童会館	中央区北8条西25丁目	676-4715

札幌市児童会館 北区

会館名	住所	TEL
エルムの森児童会館	北区北27条西12丁目1-35	737-3974
新琴似児童会館	北区新琴似11条7丁目3-16	761-7501
新川児童会館	北区新川4条11丁目5-16	764-3664
麻生児童会館	北区北39条西5丁目3-5	757-0185
新琴似西児童会館	北区新琴似9条13丁目4-1	762-6632
新川中央児童会館	北区新川3条3丁目3-21	762-8433
幌北児童会館	北区北17条西6丁目1-20	727-6225
光陽児童会館	北区新琴似6条12丁目1-25	765-6141
篠路西児童会館	北区篠路6条4丁目2-32	771-2191
篠路児童会館	北区篠路4条9丁目3-1	772-9292
屯田児童会館	北区屯田5条6丁目2-23	772-7130
太平児童会館	北区太平8条7丁目2-1	771-6324
百合が原児童会館	北区百合が原9丁目9-11	774-2050
あいの里児童会館	北区あいの里1条3丁目6-1	778-3755
あいの里ひがし児童会館	北区あいの里3条7丁目9-1	778-2358

会館名	住所	TEL
屯田北児童会館	北区屯田8条7丁目1-39	788-8122
新琴似南小ミニ児童会館	北区新琴似1条3丁目1-1	762-3666
白楊小ミニ児童会館	北区北24条西7丁目1-1	717-5562
新琴似小ミニ児童会館	北区新琴似7条3丁目2-1	876-8008
拓北小ミニ児童会館	北区あいの里2条1丁目24-1	299-8868
太平小ミニ児童会館	北区篠路1条2丁目6-20	214-0002
屯田北小ミニ児童会館	北区屯田9条3丁目4-1	790-8030
新琴似西小ミニ児童会館	北区新琴似11条15丁目	374-7774
北九条小ミニ児童会館	北区北9条西1丁目1-1	299-1888
北陽小ミニ児童会館	北区北31条西9丁目2-1	788-4131
屯田西小ミニ児童会館	北区屯田6条10丁目3-1	214-0715
鴻城小ミニ児童会館	北区あいの里3条6丁目2-1	299-1524
新川小ミニ児童会館	北区新川5条15丁目1-1	374-6845
和光小ミニ児童会館	北区北34条西7丁目3-2	792-0655
茨戸小ミニ児童会館	北区東茨戸1条2丁目	769-0667

札幌市児童会館 東区

会館名	住所	TEL
新生児童会館	東区北8条東7丁目1-3	711-1339
ひのまる児童会館	東区北38条東9丁目1-29	752-1551
苗穂児童会館	東区苗穂町5丁目7-1	711-8433
栄西児童会館	東区北46条東5丁目3-18	752-8363
北光児童会館	東区北18条東5丁目1-1	753-6353
北栄児童会館	東区北30条東6丁目1-15	711-3755
元町南児童会館	東区北16条東16丁目2-1	785-6148
東苗穂児童会館	東区東苗穂5条2丁目2-10	786-3191
伏古児童会館	東区伏古10条3丁目6-8	782-5620
札苗児童会館	東区東苗穂9条3丁目2-30	791-5200
元町児童会館	東区北21条東18丁目5-1	784-6664
東雁来児童会館	東区東雁来14条2丁目1-1	214-9215
栄西小はんのき児童会館	東区北39条東4丁目1-1	768-8883
丘珠たから児童会館	東区北35条東23丁目7-10	784-8095

会館名	住所	TEL
丘珠ひばり児童会館	東区北丘珠4条1丁目12-5	785-6137
苗穂小ミニ児童会館	東区北9条東13丁目1-1	731-5977
北園小ミニ児童会館	東区北25条東4丁目3-1	876-8010
札苗小ミニ児童会館	東区東苗穂7条2丁目3-1	781-2818
中沼小ミニ児童会館	東区中沼町73番地10	790-4733
元町小ミニ児童会館	東区北25条東17丁目1-1	788-4040
東光小ミニ児童会館	東区本町2条1丁目2-32	374-7744
栄小ミニ児童会館	東区北42条東10丁目	594-8153
栄東小ミニ児童会館	東区北46条東13丁目1	788-4171
札幌小ミニ児童会館	東区伏古1条2丁目1-31	788-6791
伏古北小ミニ児童会館	東区伏古11条1丁目2-10	214-9110
元町北小ミニ児童会館	東区北31条東14丁目1-1	214-1246
栄緑小ミニ児童会館	東区北51条東10丁目1-1	792-1043

札幌市児童会館 白石区

会館名	住所	TEL
北郷児童会館	白石区北郷4条5丁目1-1	871-2770
北東白石児童会館	白石区川下3条5丁目3-1	875-1311
東白石児童会館	白石区本通14丁目南6-1	863-8833
柏丘児童会館	白石区平和通8丁目北3-44	865-7520
川北児童会館	白石区川北4条1丁目4-29	872-0002

会館名	住所	TEL
菊水元町児童会館	白石区菊水元町8条2丁目15-5	873-1610
菊水やよい児童会館	白石区菊水1条4丁目6-61	841-5150
東札幌児童会館	白石区東札幌5条3丁目2-26	822-5811
栄通児童会館	白石区栄通6丁目19-12	853-5706
北白石小ミニ児童会館	白石区北郷6条3丁目5-2	871-6100

会館名	住所	TEL
本郷小ミニ児童会館	白石区南郷通10丁目南3-1	868-4616
大谷地小ミニ児童会館	白石区本通18丁目南1-1	206-4006
平和通小ミニ児童会館	白石区本通15丁目北3	826-5586
北都小ミニ児童会館	白石区北郷3条11丁目7-1	827-9515
白石小ミニ児童会館	白石区本通1丁目北4-1	860-3931

会館名	住所	TEL
菊水小ミニ児童会館	白石区菊水元町2条3丁目2-14	872-3310
西白石小ミニ児童会館	白石区中央3条5丁目	860-8318
南郷小ミニ児童会館	白石区本郷通4丁目南3-1	868-7557
東橋小ミニ児童会館	白石区菊水8条1丁目3-25	876-8011
上白石小ミニ児童会館	白石区菊水上町1条3丁目52	876-8020

札幌市児童会館 厚別区

会館名	住所	TEL
厚別東児童会館	厚別区厚別東3条4丁目4-13	897-4425
もみじ台児童会館	厚別区もみじ台西6丁目1-2	897-0775
厚別西児童会館	厚別区厚別西2条4丁目3-20	891-7237
厚別南児童会館	厚別区厚別南1丁目15-10	894-1710
しなの児童会館	厚別区厚別中央4条5丁目7-16	891-2025
青葉児童会館	厚別区青葉町7丁目1-38	895-9962
上野幌児童会館	厚別区上野幌2条4丁目5-1	895-9749
もみじ台ふれあい児童会館	厚別区もみじ台東7丁目9-1	897-4760

会館名	住所	TEL
ひばりが丘小ミニ児童会館	厚別区厚別中央2条4丁目3-1	896-8822
厚別北小ミニ児童会館	厚別区厚別北2条3丁目3-1	894-3015
新札幌わかば小ミニ児童会館	厚別区厚別南7丁目9-1	378-6851
厚別東小ミニ児童会館	厚別区厚別東4条8丁目	375-7765
もみじの丘小ミニ児童会館	厚別区もみじ台東4丁目	398-8833
厚別西小ミニ児童会館	厚別区厚別西3条1丁目3-1	375-7165
大谷地東小ミニ児童会館	厚別区大谷地東5丁目8-1	375-8717

札幌市児童会館 豊平区

会館名	住所	TEL
美園児童会館	豊平区美園6条5丁目4-1	824-5440
豊平児童会館	豊平区豊平6条7丁目1-12	811-1376
平岸児童会館	豊平区平岸3条9丁目15-22	812-2493
中の島児童会館	豊平区中の島2条3丁目8-1	811-5215
天神山児童会館	豊平区平岸1条19丁目2-55	816-0388
福住児童会館	豊平区福住1条1丁目5-5	855-0350
西岡児童会館	豊平区西岡3条6丁目6-1	852-8113
東月寒児童会館	豊平区月寒東3条16丁目13-28	853-9741
月寒児童会館	豊平区月寒西1条6丁目3-21	851-6433
西岡高台児童会館	豊平区西岡4条11丁目4-22	581-5394
あやめ野児童会館	豊平区月寒東4条10丁目6-10	857-5862

会館名	住所	TEL
羊丘児童会館	豊平区月寒東1条16丁目3-1	876-8022
東山小ミニ児童会館	豊平区平岸4条11丁目6-1	831-6616
東園小ミニ児童会館	豊平区豊平1条12丁目1-1	820-5356
平岸小ミニ児童会館	豊平区平岸2条14丁目1-28	817-5744
豊園小ミニ児童会館	豊平区美園1条4丁目1-1	299-5051
平岸高台小ミニ児童会館	豊平区平岸5条18丁目1-1	299-8686
旭小ミニ児童会館	豊平区水車町3丁目1-22	206-4118
西岡小ミニ児童会館	豊平区西岡2条9丁目1-1	854-6660
あやめ野小ミニ児童会館	豊平区月寒東1条11丁目7-32	850-1081
南月寒小ミニ児童会館	豊平区月寒西4条8丁目2-1	850-1248
みどり小ミニ児童会館	豊平区美園5条2丁目2-1	827-8005

札幌市児童会館 清田区

会館名	住所	TEL
美しが丘児童会館	清田区美しが丘5条6丁目1-5	885-9766
清田児童会館	清田区清田1条4丁目3-53	882-2960
平岡児童会館	清田区平岡8条1丁目6-22	881-9766
北野児童会館	清田区北野4条2丁目8-17	884-6992
清田中央児童会館	清田区清田6条2丁目10-1	884-9610
里塚児童会館	清田区里塚2条3丁目12-23	881-4822
北野台児童会館	清田区北野4条5丁目4-58	882-9640
平岡みどり児童会館	清田区平岡公園東10丁目13-10	884-6866
真栄小ミニ児童会館	清田区美しが丘1条1丁目	882-7946

会館名	住所	TEL
清田緑小ミニ児童会館	清田区清田7条3丁目	802-5522
美しが丘小ミニ児童会館	清田区美しが丘2条5丁目	376-0041
三里塚小ミニ児童会館	清田区里塚2条6丁目7-1	398-8388
平岡中央小ミニ児童会館	清田区平岡5条3丁目9-1	807-7528
北野平小ミニ児童会館	清田区北野2条3丁目	807-0161

札幌市児童会館 南区

会館名	住所	TEL
澄川児童会館	南区澄川5条4丁目1-1	831-5150
藻岩児童会館	南区川沿8条2丁目1-26	571-8616
藤野児童会館	南区藤野2条8丁目6-1	592-1532
真駒内児童会館	南区真駒内本町3丁目4-1	584-3336
南の沢児童会館	南区南の沢4条2丁目6-21	571-2909
石山児童会館	南区石山1条4丁目1-1	591-7730
常盤児童会館	南区常盤2条2丁目17-23	592-6091
真駒内五輪児童会館	南区真駒内泉町3丁目1-6	581-1823
みすまい児童会館	南区簾舞3条6丁目8-25	596-3911

会館名	住所	TEL
南小ミニ児童会館	南区南31条西9丁目	581-0191
定山渓小ミニ児童会館	南区定山渓温泉東4丁目	595-3090
藤野南小ミニ児童会館	南区藤野4条6丁目26-1	299-5303
澄川南小ミニ児童会館	南区澄川5条13丁目7-1	299-6605
藻岩北小ミニ児童会館	南区川沿2条3丁目	206-1777
藤の沢小ミニ児童会館	南区石山528	213-0071
藻岩南小ミニ児童会館	南区川沿18条2丁目1-15	200-0871
北の沢小ミニ児童会館	南区北ノ沢1727	596-6315
澄川西小ミニ児童会館	南区澄川2条5丁目7-2	595-8316

札幌市児童会館 西区

会館名	住所	TEL
山の手児童会館	西区山の手6条5丁目2-1	642-0118
手稲東児童会館	西区西町北10丁目3-8	661-7332
西野児童会館	西区西野7条3丁目5-15	663-6355
二十四軒児童会館	西区二十四軒4条3丁目4-44	644-4730
平和児童会館	西区平和1条5丁目1-27	667-3359
宮の沢児童会館	西区宮の沢1条5丁目11-25	666-5323
八軒児童会館	西区八軒7条東1丁目1-7	631-7061
発寒北児童会館	西区発寒13条4丁目1-37	664-9710
発寒児童会館	西区発寒5条7丁目1-2	666-0206
八軒北児童会館	西区八軒8条西6丁目1-20	644-3643
西野第二小ミニ児童会館	西区西野8条7丁目1-1	671-0205

会館名	住所	TEL
西園小ミニ児童会館	西区西野1条7丁目4-1	299-5650
手稲東小ミニ児童会館	西区西野4条3丁目7-1	676-3600
発寒小ミニ児童会館	西区発寒10条4丁目1-62	669-1218
八軒西小ミニ児童会館	西区八軒3条西5丁目1-1	206-4804
八軒小ミニ児童会館	西区八軒4条西1丁目	876-8722
琴似小ミニ児童会館	西区琴似2条7丁目1-30	624-5451
福井野小ミニ児童会館	西区福井6丁目11-1	688-5863
山の手南小ミニ児童会館	西区山の手1条9丁目6-1	624-5961
発寒南小ミニ児童会館	西区発寒2条4丁目1-1	213-9185
手稲宮丘小ミニ児童会館	西区宮の沢3条2丁目1-1	688-5260

札幌市児童会館 手稲区

会館名	住所	TEL
手稲前田児童会館	手稲区前田2条12丁目1-4	682-2070
富丘児童会館	手稲区富丘3条6丁目2-7	685-9393
西宮の沢児童会館	手稲区西宮の沢2条4丁目5-35	681-6940
いなづみ児童会館	手稲区前田4条4丁目2-13	684-3072
新発寒児童会館	手稲区新発寒6条4丁目15-1	685-7343
稲穂児童会館	手稲区稲穂3条5丁目9-23	684-0901
あけぼの児童会館	手稲区曙9条1丁目9-40	685-4821
前田しらかば児童会館	手稲区前田8条15丁目17-25	694-2474

会館名	住所	TEL
星置児童会館	手稲区星置2条7丁目3-1	684-4610
金山児童会館	手稲区金山3条2丁目1-30	695-0919
富丘小ミニ児童会館	手稲区富丘1条6丁目4-1	685-3797
前田小ミニ児童会館	手稲区前田6条11丁目3-1	688-1828
新発寒小ミニ児童会館	手稲区新発寒2条2丁目1115-307	299-5066
前田中央小ミニ児童会館	手稲区前田8条12丁目2-1	695-7766
星置東小ミニ児童会館	手稲区星置2条1丁目6-1	694-7595
新陵小ミニ児童会館	手稲区新発寒6条6丁目3-1	215-8611

基金

こども基金「さっぽろスマイルキッズ」

子どもは遊びを通して、自然の中で、集団活動の中で、社会参加の中で、好奇心や創造性、探究心を育みます。そして、普段の生活などの実体験を通してさらなる想像力を育みます。これらの体験を通じて得る想像力は、未来を担う子どもたちの成長にとって必要なことであると私たちは考えています。

こども基金「さっぽろスマイルキッズ」は、子どもの体験活動の場を安定的に提供することを目的に開設しました。この目的に賛同してくださる皆様からのご寄附やご支援を、子どもたちの体験活動の場を提供したいと思っている方たちへと還元していく取り組みです。

こども若者応援基金「さっぽろユースチャレンジ」

現在、家族・親族との結びつきや地域住民との人間関係の希薄化などにより、子ども・若者の日常生活を取り巻く環境は変化しており、一部の子どもたちは、経済的困窮だけではなく、家庭内の問題を抱えたり、それらに起因する様々な要因によって他者のサポートなしで自立することが困難な社会環境に置かれております。

当財団では、若者活動施設における自立支援プログラムの実施、相談窓口の設置や若者サポートステーション事業の受託などを始めとした若者自立支援事業に取り組んで参りました。

こども若者応援基金「さっぽろユースチャレンジ」は、困難を抱える子ども・若者を支援する財団の自主公益事業及び自立支援プログラム等の一環である、「子ども・若者の居場所 いとこんち」の運営等に活用することを目的としております。

ご支援のお願い

ご寄付は、上記に記載する活動を幅広く支援するために利用いたします。
詳しくは https://www.syaa.jp/syaa/childfund/ をご覧下さい。

各基金に関するお問い合わせ
総務課 基金担当　〒001-0908 札幌市北区新琴似8条1丁目1番34号ニュー鳳ビル2階
TEL：011-299-4590

編集後記

ここに無事、財団設立40周年記念史を発刊することができ、安堵しております。
私ども財団にとって記念すべき2020年は、新型コロナウイルスの世界的大流行という未曾有の事態とともにあり、記念事業の実施ばかりか日々の事業展開に大きな影響を受ける状況にありました。
しかしながら、設立から今日に至るまでを支えてくださった関係者の皆様へ感謝の気持ちを伝えたい、財団の未来を担う若手職員に財団の精神と文化を伝承したいという思いから、記念史の制作についてはプロジェクト一同、止まることなく進めてまいりました。
この40周年を一つの節目として、諸先輩方が築いてこられた財団の価値や理念を揺らぐことのない幹とし、世の中の流れやニーズの移ろいに合わせ多様な花を咲かせるべく、職員一丸となって邁進していく所存でございます。
関係者各位におかれましては、これからも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

財団設立40周年記念事業　プロジェクトメンバー 一同

公益財団法人 さっぽろ青少年女性活動協会 40周年記念史
40年のあゆみ
2021年3月1日発行

編集発行
公益財団法人 さっぽろ青少年女性活動協会
〒063-0051　札幌市西区宮の沢1条1丁目1-10
https://www.syaa.jp/

SYAA